

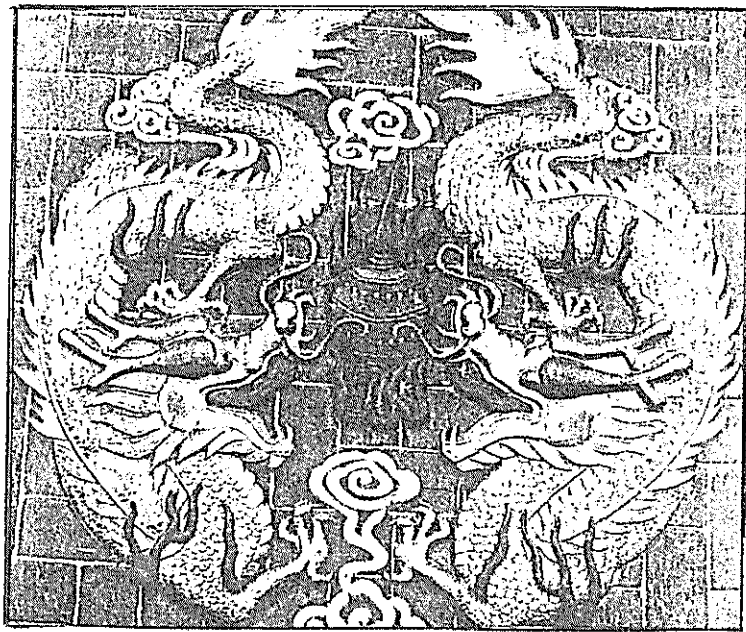
諸葛亮孔明陣役の地

五 丈 原

劉邦・漢王を拝命の地

漢 中

紀行

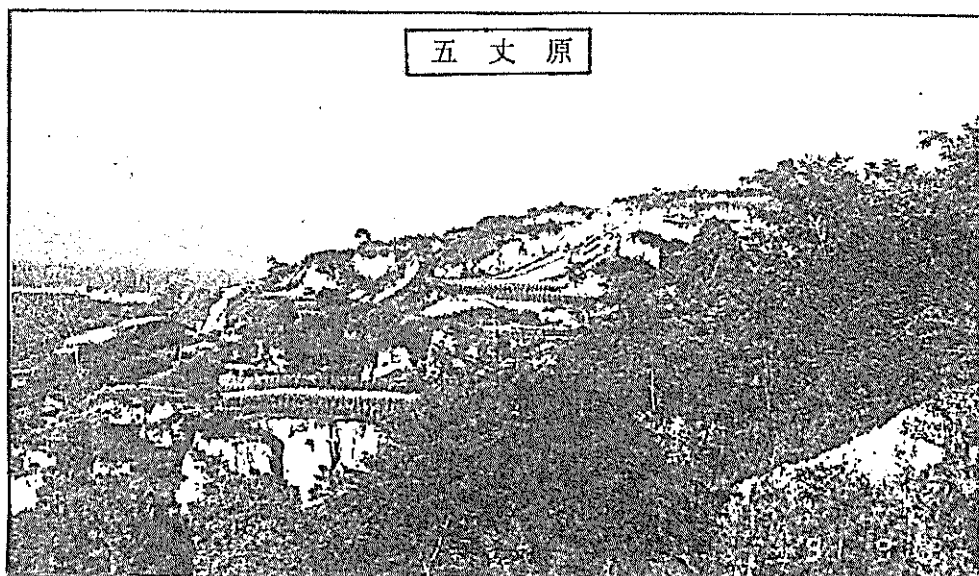


平成3年9月4日～12日

寺 前 信 次

「五丈原及び漢中の旅」(中国・陝西省) 目次

まえがき	・ ・ ・ ・ 1	9月8日 隴を得て蜀を望む	・ ・ ・ 3 5
9月4日 北京へ翔ぶ	・ ・ ・ ・ 3	漢張留侯祠	・ ・ ・ 3 8
9月5日 北京観光	・ ・ ・ ・ 4	張良廟～漢中	・ ・ ・ 4 2
玉泉山	・ ・ ・ ・ 4	漢中の概要	・ ・ ・ 4 3
白雲觀	・ ・ ・ ・ 4	9月9日 漢中見学	・ ・ ・ 4 5
白塔寺	・ ・ ・ ・ 6	木牛流馬・連弩の新兵器	・ ・ ・ 4 6
景山～雍和園	・ ・ ・ ・ 7	武侯墓	・ ・ ・ 4 9
北京～西安	・ ・ ・ ・ 8	定軍山	・ ・ ・ 5 1
陝西省の概要	・ ・ ・ ・ 8	馬超墓	・ ・ ・ 5 3
西安の概要	・ ・ ・ ・ 9	武侯祠	・ ・ ・ 5 5
9月6日 西安～宝鷄	・ ・ ・ 10	諸葛亮読書台	・ ・ ・ 5 8
茂陵・霍去病の墓	・ ・ ・ 11	前漢時代の城壁	・ ・ ・ 5 9
楊貴妃墓	・ ・ ・ 11	9月9日 漢中見学	・ ・ ・ 6 0
武功・法門寺	・ ・ ・ 12	古漢台	・ ・ ・ 6 1
五丈原に向かう	・ ・ ・ 15	東塔	・ ・ ・ 6 3
五丈原	・ ・ ・ 17	古虎頭橋	・ ・ ・ 6 3
星落秋風五丈原の対陣	・ ・ ・ 21	石門	・ ・ ・ 6 4
死せる孔明		拌将壇	・ ・ ・ 6 5
生ける仲達を走らす	・ ・ ・ 23	飛行機欠航・バスで西安へ	・ ・ ・ 6 7
五丈原～宝鷄	・ ・ ・ 25	9月11日 西安観光	・ ・ ・ 6 8
泣いて馬謖を斬る	・ ・ ・ 26	半坡遺跡跡	・ ・ ・ 6 8
9月7日 宝鷄～天水	・ ・ ・ 30	大雁塔	・ ・ ・ 6 9
麦積山石窟	・ ・ ・ 32	9月12日 帰国の途へ	・ ・ ・ 7 0
天水	・ ・ ・ 35	あとがき	・ ・ ・ 7 1



まえがき

旅に出て何時も感じることは、旅は心を日々新たにして新鮮な感性を与え、風雅な神髄に逢着し、テーマをもった旅から凡人の私が非凡になったような摩訶不思議さを味わうことであった。

人の人生が様々であるように旅のテーマは個々の人の興味から生まれる。テーマが広がる地にはいろいろな読み方があり、とてつもない書物というか、どのような本を読むよりも楽しさを倍加させ、ストレス解消の精神衛生にもなるものだ。

毎月送られてくる旅行各社のパンフレットの中に「五丈原」の活字を発見した。奇貨が二本足で歩いてきたように血が騒がずにおられず、神様がくれた天与の幸運だと遅疑逡巡することなく参加を決意した。

三国志の愛読者なら蜀漢の軍師・諸葛亮孔明を見逃すことはできない。魏・呉に比べれば小国であつた蜀の国を世に知らしめた軍師の神機妙算な知謀の数々が、改めて生き生きと私の脳裏をよぎった。彼の才知と徳を慕う人々の夢は「五丈原」であり、中国文学古典の舞台に行くロマンの旅に輾転反側した。

雄大な自然と豊富な歴史の眠る中国は訪れる度に魅力に引き込まれ、識らずのうちに戦後13回目の度となった。それは多分景色の美しさや名所旧跡のためばかりでなく、私達に流れる血がこの国の何かに呼応して魂を揺さぶっているのであろう。

三国志の世界に生きた人物たちは、それが理想の実現であつたか野心の達成に向かった行動であつたかは別として、少なくとも彼等はみな大きな目標を目指して生命を燃焼させている。誰もが大きな闘魂をもって乱世に挑戦したのであつた。

三国志の世界は実に様々な行動の示唆を与えてくれる。悠久の流れの中にこめられた人間行動の原理は、三国志に登場する数多くの人間を通して複雑な現代社会に生きる我々に呈示されている。

1800年の昔のことが今日の世界にも通用するところに不思議さがある。だからこそ人間という生物の面白さがあると言える。ハイテク産業が発達して戦争態形が変化しても、人間そのものは大昔と少しも変わらないのではないだろうか。

戦時中の私は黄河文明の発祥の地である河南省を中心に転戦した。そこは三国志の当初の舞台であり、項羽と劉邦の決戦の地でもあつた。先年、四川省から長江を下る三国志の旅も終えている。余すところは陝西省の「関中」から「漢中」にかけての最後の場面のみとなっていた。

旅に年季が入ったものの、「日月逝く、歳、我と与^{トモ}ならず」「逝くものは斯くの如きか昼夜を舍かず」と戦友の8割が鬼籍に入った昨今のこと、五丈原の開放は民族や立場の違いを越えて、憂国の至情に燃えた歴史の宿命のようなものを感じる。

一世を風靡した孔明が今日においても高い名声を得ているのは、時代が乱世であつたからである。混迷した状況であつたからこそ、自分の能力を最大限に発揮する機会があつたと言えるだろう。若し秩序正しい時代であつたなら彼の出番はなく、まさに天の時を得たと言わなければならない。

優れた統率者はよく天の時に応じ、地の利に合わせ、人の和によって戦った。戦いの勝利の要素は有利な態勢を整えるか否かにある。それが天の時、地の利、人の和であり、統率者の才能と努力によってのみ獲得される。

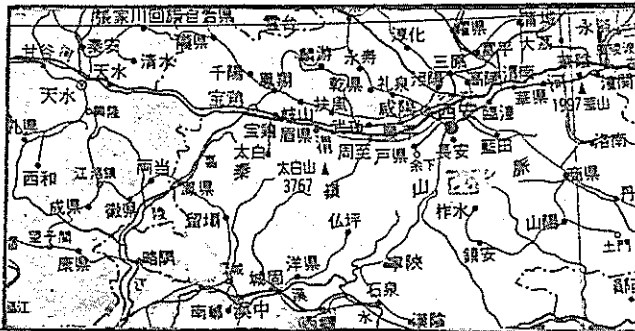
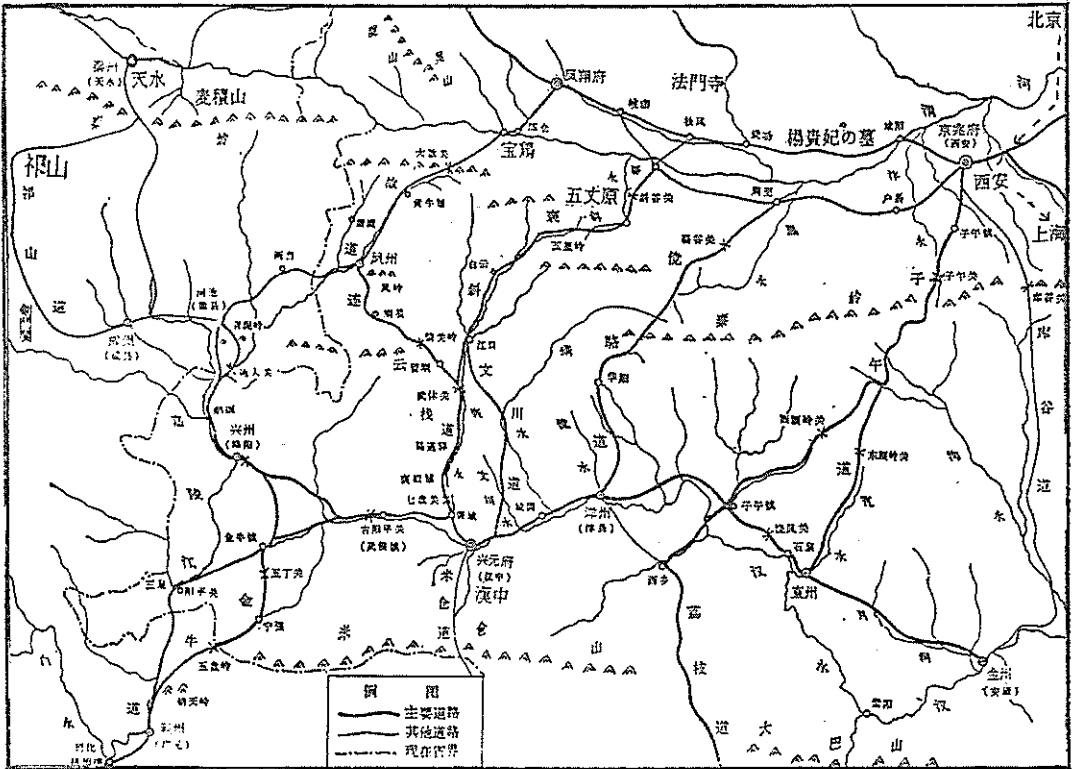
それらの兵法といえは春秋末期に「呉」に仕えた孫武の著書「孫子」が有名である。しかし並みの武將の頭腦では修羅場裡にあって、深慮遠謀の奇正の策を構じることには至難である。

諸葛亮孔明は「戦いは知をはじめとし、仁これに次ぎ、勇はその下にあり」と述べ、実戦場において其の慧眼・洞察の兵法を駆馳した。將に実戦兵法家として我々の心に焼き付いている。

三国志の世界の面白さは善悪の評価はともかく、何れも劣らない興味深い行動である。黄金時代に生きる我々は其の歴史の中から何かを学び、心が動かされるものを会得したいものである。

平成3年9月（孔明生誕1810年）

下は今次旅行の要図



9月4日

(水) 晴

北京へ翔ぶ

旅は創造性の発露だと同気相求める一行は15名の高齢者揃い、三国志の三つ巴となった謀略戦に興味を抱く知的な旅人達は、体力の下降線をたどっている自覚もなく、千載一遇の好機到来だと人生の荒波に洗われてきた世代の面影を留めていた。

道祖神、つまり旅に誘い出される心に招かれて幾度となく空の旅を過ごした。しかし今回の大鵬の大空に行く雲海を見詰めていると、誠に不思議な因縁が私の脳裏を掠めていた。

1 去年の「モンゴル紀行」は天安門事件の直後で、北京空港の閉鎖という生々しい事件、本年春の「海のシルクロード紀行」はイラクのクウェート侵入、多国籍軍が地上戦に突入して「砂漠の嵐」作戦遂行中であつた。

今次紀行に出立つ2週間前の8月20日(モスクワ時間19日早朝)、ソ連ゴルバチョフ大統領が失脚して非常事態が宣言され、首都に戦車部隊が展開したとのニュースが流れた。3日後に保守派のクーデターは失敗したと報道されたものの、ソ連共産党は74年の歴史に終止符を打った。

そのことを考えると私の旅には「死霊」が付きまとい、無残な死者の声が聞こえてくるようで、鎮魂・平和の旅の感じがしてならない。発生事件は何れも独裁あるいは半独裁国家だが、政治的高揚の掛け声だけでは国民生活の向上は有りえない感じがする。

天安門事件で国際的批判を浴びた中国の「8老」は、同じ8人のソ連保守派のクーデターに感激したのは当然であろう。「クーデターはソ連の国内問題であり、内政干渉はできない。ソ連人民の選択に任せる」と発表する一方、歓迎の意志表示を新華社を通じて明らかにした。

僅か3日間でソ連保守派によるクーデターが失敗したというニュースは、中共保守派に大きなショックを与えたのは想像に難くない。ソ連共産党がこのような末路になったのは、レーニン以後の指導者選びが間違っていたからだと指摘し、中国は独自の社会主義を守らなければならないと強調した。

クーデター失敗後の北京の大学には、ソ連の8人組が追放されたが中国の8老はなぜ追放されないのか、というビラが貼られた。今後の中国は政治的にも経済的にも危険な状態に陥るのではないかと心配される。

中共首脳に望むことは「国際的な視点に立て」ということである。日本の協力なしに国の安定が望めない彼等は、日本国民の立場に立った現実的な理解が必要である。掃海艇のバルシャ湾派遣批判、教科書問題、首相の靖国神社参拝問題等、どのような詭弁を弄しても内政干渉であり、嫉妬であり、特殊な唯我独尊的な撰民思想の発露である。

「掌は二つなければ音がしない」、友好もその通りだ。「搬起石頭打自己脚」自分の持ち上げた石で自分の脚を打つ類の愚を繰り返さず、唇齒輔車の関係にある両国の平和を願望して止まない。

藍を溶かしたように光る日本の海を見詰め、大連を經由して20・10到北京空港に着陸、王府井北側の華僑ホテルに投宿することになった。

9月5日

(木) 晴

北京観光

「玉泉山」(位置は右図参照)

幾十回訪ねてもその度に新しい魅力を与える街・北京は、何時も私の熱い思いに応えてくれた。昨年、旧満州紀行の帰路に北京に立ち寄って独り車を走らせたとき、心を奪われる光景に見惚れて暫く佇んでしまった風光が、玉泉山であった。

今回もツアーを離れて別行動を企画し、昨夜のうちに添乗員を通じてタクシーの手配を依頼し、憧れの玉泉山に夢を馳せていた。

一行が出発した直後にタクシーが私を出迎え、全コース添乗の通訳・李西京氏も同行することになった。若い彼は中国国際旅行社西安分社所属で北京は余り知らず、私の行き先に興味を抱いて北京郊外見学の下心から同乗したようだ。

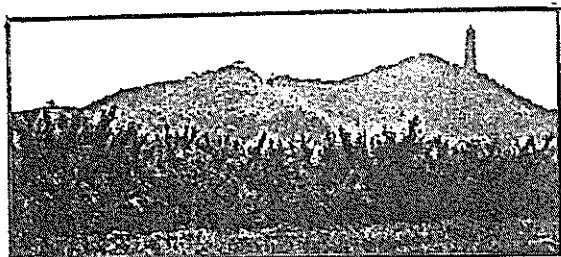
市内は地下から湧きでたように人波で埋まり、自転車の列は黒帯のように流れ、超満員のバスも数珠つなぎになって走っている。青雲の志を心に秘め、初めて北京に足跡を印した当時の悠長な古都が懐かしい。今では心の皺を伸ばすことも出来ない状態である。

漸く用水に平行した安定街を西進し、徳勝門を通過した車はスピードを上げて郊外に向かった。明瞭に見覚えのある町並みを離れて左に万寿山を望むと、羽を上げた蝶のような姿の丘が車窓越しに見えてきた。玉泉山である。

草原のススキの花穂は透明な光を反射して一際美しく、しかも大群生の尾花に陽の当るさまは幻想的な景観だ。以前から訪れたいと憧れていた玉泉山を目前にして、車は登山口を捜しながら一巡していた。

王侯貴族の栄華を偲ぶ緑の山並みは美しい稜線を描いているものの、運転手は初めてなのか一向に要領を得ない。

彼は車を下りて土地の人に尋ねたところ、玉泉山は未開放で一般観光客は立入禁止だとのことであった。



各社のガイドブックにも景勝地として玉泉山の掲載はなく、漸く未開放だと合点したが、とんだくたびれ儲けで得るところなしであった。私も運転手も迂闊だったと言わなければならない。(上の写真は玉泉山の一部)

万寿山の西方約2・5kmにある玉泉山は山頂に2つの高塔が聳立し、山麓は森々とした緑林に囲まれていた。金朝の行宮・芙蓉殿の遺址である。その後は元・明の二朝を経て、清の康熙年間に更に離宮を設けて静明園と名付けている。

玉泉山には「天下第一泉」があり、その清冽な水は東に流れて万寿山の昆明湖に入り、さらに北京十刹海から紫金城(現故宮)の太液に注いで運河となり、通州を経て白河に入っている。

玉泉山の西北は目睫の間に西山一帯の連峰を望み、南は北京城外の郊野を一眸に収めて、眼下に昆明湖の幽景が窺える等、風光きわめて絶佳と云われている。

王侯貴族の夢破れ、去勢されたような感じで市内に向けて反転し、運転手に白雲觀を指示して車は疾走した。

「白雲觀」

ゆっくりと動いている白雲を眺めながら市街に入り、長安街を越えて南下すると其処に豪華絢爛な朱塗の牌門が眼に映り、「洞天勝境」の扁額が燦然と一際目立って輝いていた。白雲觀であった。（位置は上図の左下）

石造りの山門には「勅建白雲觀」の扁額と中国道教協會の看板があり、入場券を購入して参観することにした。一瞥したところ広大な境内に宏壮な殿堂が並び建ち、自ずから襟を正す雰囲気が充溢していた。

白雲觀は全道教の第一の叢林（寺院のこと）で、龍門派の祖庭（庭は場所）である。唐の「天長觀」は前身であり、唐の玄宗皇帝は道教を敬い老子を祀ってこの觀を建立した。「觀」とは道教の道士が居るところと云う意味で、此処にある石刻の老君座像（老君は老子の尊称）は当時のものであった。

金の章宗の泰和2年（1202）に天長觀は焚毀したが老君石像だけは残った。元初の道士・邱長春は燕京に来てこの地を賜り、殿宇を再建して一新した。当時の觀名は「太極宮」であった。

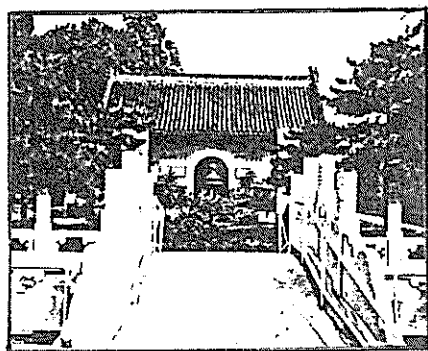
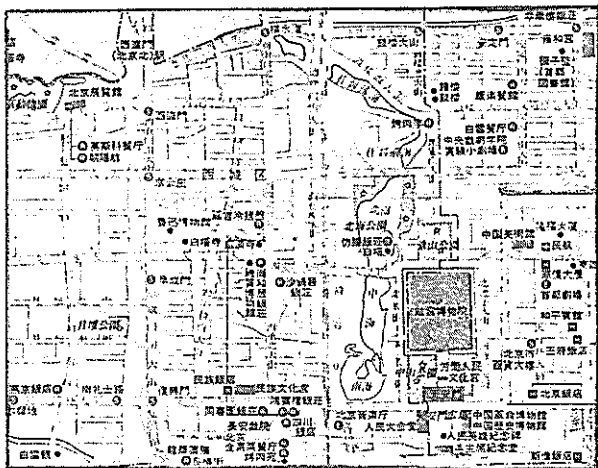
1227年、元の太祖チンギス・ハンは「長春宮」と改称し、明初めに「白雲觀」と再び改名され、現在の白雲觀は明朝のときに重修したものである。（以上は中国道教協會出版の書を参考）

觀の前壁に書かれた「万古長春」の書を覗きながら山門を進んだ。觀内は中・東・西・後に分かれ、中路には靈官殿、玉皇殿、老律堂、邱祖殿のほか、鐘鼓の二楼や藏経楼が建ち、元朝太極宮の故址は道教の本山らしい伽藍であつた。

開祖を祀る邱祖殿の塑像は漆が塗られ、その精彩は生きている像のようであつた。像の前に置かれた木鉢は上が広くて下が狭く、5斗の水が入るという大きなものである。その内部は金、外部には清の高宗の詩が彫刻され、山門に勅建と書かれたように贅を尽くしている。

（右の写真は玉皇大帝を祀る玉皇殿）

東路には南極殿や清の世宗の命で建てた塔などが建ち、西路には八仙殿（8人の仙人像）、元辰殿（諸神の掛軸像）があり、香炉は数百年に亘り



燃え続けているという。

人間を救済してくれるのは道教だと信じる敬虔な信者の姿も見えていた。脈々と流れる教えを信じる者は救われる。信じる神仏は違っても救いを求める信仰者の姿は万国共通であった。

后院は「雲集山房」（別名は小蓬萊）という名の庭園、妙香亭、友鶴亭や退居楼があって回廊で結ばれ、緑樹が繁って清新幽静という形容に相応しく、人は帰るのを忘れるような景観である。

白雲觀の各殿宇の前の石碑は私の眼を注視させた。それは凡て石造りの亀の上に立っていたからであった。中国では亀（俗称は王八）は龍の8番目の子として尊ばれるのである。

道教は老子を教祖とした宗教で秦漢時代には神仙の術として崇拝されていた。老子の「道德經」が主要經典で、信徒が日常誦念するのは「玉皇經」である。玉皇帝の意味を理解したことは大収穫であった。

「白塔寺」（位置は前頁地図参照）

北京の単独行動は午前中と限られていた。時間も経過した関係から白雲觀を後に反転して北に進み、魯迅博物館横の白塔寺へと車を走らせた。

市内は依然として自転車の波で渋滞し、欲の皮を張り過ぎたかと案じていると、狭隘な道路で車は停車した。運転手はこれ以上は入れず、徒歩で参拝してまくれとのことであった。（右は狭い道路から眺めた白塔寺の白塔）

細い道を左折して右折すると古色蒼然とした山門に出会し、拝観券を求めて境内に入った。古呆けた天王殿を過ぎたところに心境殿、その後ろが七仏宝殿であった。

採画した軒下のつづく殿宇には金箔の釈迦牟尼像を中心に七仏像が祀られ、龍を描いた格天井は美事な作りであった。

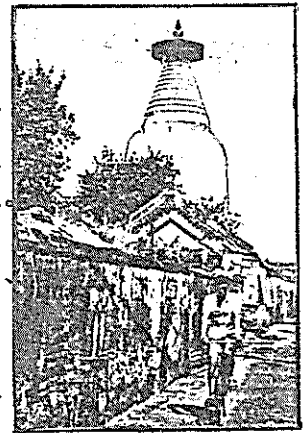
この七仏殿は仏教寺院の大雄宝殿であろうか、十一面千手観音を始め各種の鍍金の仏像が所狭しと並び、自然に合掌の心を誘うようである。

白塔の基壇の前に建っている「具六神通殿」には、釈迦本尊の他に密教の画像が飾られていた。如何にもラマ寺の感じがしてウランバートル（モンゴル）のラマ寺院を彷彿させていた。しかし本場のモンゴルに比べれば問題にならない小型である。

白塔の基壇に据えた二匹の鹿の石像は印象深い。肝心の白塔は大きくて頂点は見えず、カメラに収めることも不可能であった。しかしモンゴルや揚州の白塔を重ね合わせたように想い出させ、懐かしさを抱かせたのは参観の価値充分であった。

白塔寺の正式名は「妙応寺」で塔の高さは51m、中国に現存する最古最大のラマ塔である。1096年の創建で1271年に重修し、「釈迦舍利靈通之塔」の碑文のある由緒の深い塔である。

元代には妙応寺を「大経寿万安寺」と称している。元が大都（元の都・北京）の創建の時、多民族国家統一のために世祖フビライが採用した国策の一つが、「以儒治国、以仏治心、喇嘛教定国教」であった。そのためチベット式仏塔が建ったのである。



塔の白色の淵源は古いインドの卒塔婆式の仏塔から由来している。1260年、工芸家の阿尼哥という人がチベットに入り、それを元の大都であった北京に伝え、壮麗な王城に花を添えたと言う。故に金城の玉塔の別名がある。

(以上は白塔寺文物保管所発行の小叢書を参考)

我が身は秋口の蚊のように頼りなく、洪水の前の戸板一枚ほどの用にも立たない身となってしまった。いま白塔寺や白雲観を参詣し、真の人間性を回復することが今日の宗教の宿命だと、心動かされるものを感じた。

白塔寺を辞して昼食の予定場所である京城大酒店へ向い、午前の単独行動は終わりを告げたのであった。

「景山～雍和園」

景山には何回登ったであろうか。昼食後は一行と共に景山観光となったものの、過去の紀行文に記事を認めたため新たに記述することはない。ただ崇禎帝の嗚咽流涕した姿を想像しながら、北海から中南海に眼を移すと、充満した国民の怨嗟の声が響いているような感じがする。

中南海は中共首脳の居所であり、彼等の相剋の歴史を秘めた闘争場でもある。ソ連共産党の崩壊から剣ヶ峰に立たされた彼等は、全体主義が大衆の生活を犠牲にして成り立っている点を自覚できないらしい。

(中南海は5頁の地図にある故宮の西側にある)

「徳は孤ならず必ず隣あり」、世界と共に歩むことを期待して雍和園へと転進した。このラマ寺院も昨年参観したばかりで記憶は鮮明に残り、前回の紀行文に詳細に亘って記載済みであり、割愛する。

魁偉無比の巨像、高さ18mの白壇の木に彫られた弥勒菩薩は、修理中のために拝観はままならず、一行の人たちは落胆したのではないだろうか。しかし多くの熱情的なラマ教信者の真摯な求道心を見て、元代のラマ教に対する情熱が窺えたことだろう。

北京観光を終えて新装なった北京空港に向かうと、夕立のために出発延期を告げられた。無神経で総てが慢々的な大陸旅行は今回も始めから狂い出し、予定が消化できるかと危惧の念を抱きながら待機したのであった。

景山より北海公園を望む。左端はラマ塔



北京～西安

三国志の熱狂的な心酔者ばかりの一行は大儀そうに待つこと2時間、漸く夕立の消えた虚空へと銀翼は燦として鸚翼を伸ばし、東の間の空中散歩となった。

金波銀波の雲海が下界を覆い、文明の母といわれる黄河は見えない。三つ子の魂百までを地で行こうとする我々が、宇宙という時を超えた世界を夢みている時、経水の蛇行した流れが眼に止まり、いよいよ西安だと胸の鼓動は高まり始めた。

20時に西安空港に着陸。中国全土は時差がなく、日没前の四辺の空に夕暮の明かりが漂っていた。降り立った空港は今月「咸陽」（次頁地図参照）に完成したばかりの空港で西安市街まで50km、早速一直線の有料道路を東に向かって驀進した。

咸陽は秦の始皇帝が都した地である。6年前に訪れた咸陽に吹く風は懐かしい匂いを感じさせ、歴史こそ知識の王様だと教えている。春秋時代の諸子百家から戦国時代の縦横家のことが私の脳細胞の中を走っていた。

秦によって天下が統一されなかったらば、恐らく中国は現在のヨーロッパのように多くの国に分かれていた筈である。現在でいう中国は秦によって誕生したとも言えるだろう。秦の発音はCHIN、英語ではCHINA、日本では支那、この語源の発祥の地は咸陽ではないだろうか。

咸陽はまた「馬上で天下を得ても、馬上で天下を治めることはできない」との教訓を示した所だ。文武を合わせ用いてこそ天下を長久に保つことができ、秦がなぜ短命に終わったかを考えさせられるのであった。

秦は刑法一点ばりで天下を治めようと民を法の網にかけて処刑した。その恨みを買って農民が蜂起し、項羽や劉邦らの出番となった。為政者は人民あつての天下だと悟らなければならない。

日は没して暗闇の無聊を慰めるといえば格好は良いが、車窓から何一つ映らないバスの中では、自然に蓋世の英雄たちの歴史を回顧するしかないのであった。

やがて街角の露天商の小さな灯火が見え出し、数々の思い出の多い街・西安の市街に入った。色彩豊かな電灯で飾られた城壁、諸々の車窓越しに映る光景を自分の視線で消化していると、前回宿泊した小雁塔近くの豪華なホテル・西安賓館に到着、時刻は22時であった。

歴史の宝庫と云われる陝西省と西安に就いては、前回の紀行文との重複を避け、未記述のことのみ簡記しておく。

陝西省の概要

陝西省は「東洋史の第一頁」である。

古の雍州の地で省都は旧西安（長安）の府城であった西安で、周、秦、漢、西魏、北周、隋、唐等の王朝は、この地域または其の附近に置いている。

即ち中国の歴史の開幕ともいふべき東洋史の曙は此の地方である。いやしくも天下に号令をかける程の人物は、みなこの陝西省を中心にして活躍していた。

周は鎬京（次頁地図参照）に都し、秦の始皇帝は咸陽で自らを帝と称し、長安は漢

の高祖以来、隋朝を経て唐の初めに至るまで前後数百年間天下の都であった。

さらに下って清朝になってからは、北京皇室は古の旧都長安を西安の離宮として修理

保存したばかりでなく、義和団事変の連合軍が天津・北京を占領した時、光緒帝は西太后と共に西安の離宮に逃れて安全を期したのであった。

由来、陝西省の地は、上代中国統治の頭痛の種であった匈奴の襲撃に対し、最も守り易い天險の地であった。西北は六盤山脈の連峰によって西戎のウイグル・吐蕃の侵入を防ぎ、東方は連枝山脈に添って南流する黄河の險があり、南方は秦嶺山脈の南に大巴山脈があり、北の外蒙に面しては横山、梁山の二山系の外辺に長城を築いて匈奴の外寇に供えたのであった。

万里の長城は恐らく此の地方で初めて築造され、これが歴代を経て次第に東西に延長したものだろうと言われている。長安の中央盆地周囲の連峰要所には関門を設けて外敵を防いだから、現在に至るまで陝西省の中央部を「関中」と呼んでいる。

「関中」とは四塞、即ち「函谷関」「武関」「散関」「肅関」の四つの関所に囲まれた沃野千里の地域である。(上の地図参照)

「漢民族発祥の地」は陝西省である。唐の玄宗皇帝が長安を見捨てて帝都を河南の洛陽に定めるまで約3000年の間、陝西の地を何故に漢人種は去らずに守り続けたのであろうか。単に天險の地に依存しただけでなく、むしろ純血の漢民族の発祥地であったからだと言われている。

中国の人材の淵源だとも言われる秦の始皇帝の天下統一をはじめ、堯が蒲坂で帝位につき、舜が安邑にて禅位を受けたというのも悉く関中のことである。

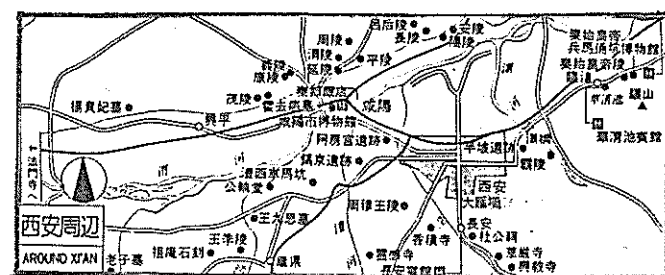
また周の武王は今日の蘭州街道の「岐山」に興り、晋の文王、秦の始皇帝は何れも関中の出身である。故に陝西は漢民族の発祥地であると共に、中華文化の発祥地とも言ふべきであろう。

しかし今や70万人の労力によって建てられた阿房宮、富豪12万を移して建都した咸陽等、漢民族の栄華の跡は其の面影をとどめず、感無量と言わなければならない。

西安の概要

四方を天然の要塞に囲まれているため、紀元前11世紀ころから約2000年の間に、11王朝が相次いで都を置いた中国一の古都である。東洋史上有名な長安は隋唐時代の天下の帝都であった。

シルクロードを通じてインドや東ローマ(トルコ・イスタンブール)などとの通商を持ったから、当時の城下の人



口は150万を下らず、万里の旅路を遠しとせず城下に集まる白色人種は、常に万を以て数えたと記録されている。

清朝時代には満州人町が存在して約4千人の満州族部落があったが、中華民国創立革命の際に全部が虐殺されたとも伝えられている。また陝西省には甘肅省と同様に回教徒が多く、漢回兩族の葛藤は絶え間がなかった。前回訪れた時に足跡した西安のイスラム最大の寺院・清真寺は、千人以上の信者が一齐に礼拝できるものであった。

国際都市であった長安には阿部仲麿呂（興慶公園に石碑あり）や空海（青龍寺に記念碑あり）など、深く関係した日本人は数多い。今回は西安に3泊4日も滞在したから殆ど見学済みである。

現在の人口は都市部で280万、郊外を入ると680万。大学数は北京、上海に次いで多く42校、古代皇帝の墓陵は72を数えて中国第一である。他は省略。

9月6日 (金) 晴

茂陵～法門寺～五丈原～宝鷄

鬼哭啾々として滂沱の涙が滴り落ちる五丈原訪問の朝を迎え、旅情はここに極まるという心境であった。

経済大国、飽食大国の日本人であっても、想像は旅行者だけの特権で、独特の品性がある。

今日、五丈原へと思いを巡らす旅人たちは、勇んでホテルを8時に出発した。

昇る陽が赤々と照り映える整然とした基盤目状の街並、私の網膜に焼き付いている古都は克明に記憶を蘇らせ、北京、南京に次ぐ明代建造の大城が威容を現わした。

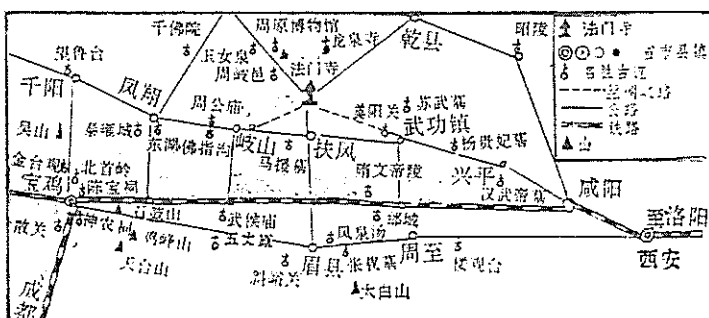
懐かしい南門を左折して西門から西に向い、悠久の歴史にふれる旅路を急ぐと、シルクロードの基点であった旧長安城の西門跡に、ラクダの石像が立っていた。古代中国の曙に活躍した霸王たちの華やかな舞台が点在し、壮大なロマンを語りかけている。

日常の生活で様々な柵にがんじがらめとなり、じっと煩惱を押さえつけて暮らす人間は、何とか日常を超越しようとして心を遠くに遊ばせたい。これが旅心であり、生命を逞しく蘇らすものであろう。そのような実感を味わいながら走っていた。

秦の孝公が宮廷を築き、始皇帝も都して天下に号令した咸陽（渭城ともいう）が近づいてきた。歴史を繙くと始皇帝ほど急激に改革した皇帝は少ない。謚を廃止して数でかぞえる方法を考えて自分を始皇帝、次ぎを2世、3世と続けようとした。

また一般に使われていた「朕」という一人称を、天子のみの用語としたのも彼であった。東方巡遊の帰途に河北省の沙丘で死亡（49歳）した彼は、さぞかし無念の齒がみをしたことだろう。

蓋世の英雄が都した咸陽を一顧だにすることなく通過すると、満々と濁水を盛り上げて流れる渭水であった。この流れは恐らく数え切れない戦に使われ、その度に無辜



の民が失われたことだろう。しかし美なる哉、水、洋々乎であった。

文明をつくった古人の心を思わせる渭水とも別れ、記憶の底から私を呼ぶ声を聞くような感じを受けながら、バスは壮快壮快また壮快と走った。

眩いばかりの陽は木々の枝葉を照らし、その中に蜿蜒とつづく玉蜀黍畑は唐時代を彷彿させ、この豊饒の地は大兵を養ったことだろうと見入っていた。

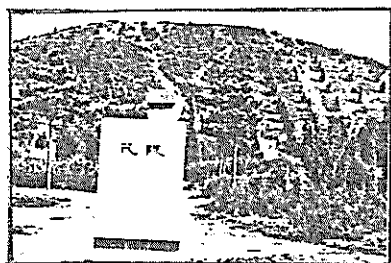
朔風黄塵を捲く黄土層は遠くまで地を覆っている。乾き切った黄土は水気はなく、広大な大地と大気の澄みわたった空間に、風景が新しく展開し続けていた。

見渡す限り緑を失った褐色の黄土の土漠を眺めながら、おぼろげな記憶の糸を手繰っていると、正面の広野の中に茂陵の輪郭が映ってきた。

茂陵・霍去病の墓 (前頁地図の漢武帝墓)

太陽の陽射しが強い胡沙吹く中に祀られた前漢第5代皇帝・武帝の陸墓の記憶は鮮明であった。しかし、血の気が少なくなった性か前回のような動悸は感じない。(右は茂陵)

鞭をあげ砂塵を蹴り立て、西域に軍を派遣してシルクロードの基礎を築いた彼の功績は、それまでの皇帝が蓄積した国力の賜物であり、先祖に感謝しなければならない。それにしても彼は並みの人間の何倍もの血液を持っていたのである。将に一世を風靡した皇帝であった。



太陽を西の果てから呼び戻さんばかりの威勢を持った武帝、彼の誦った「秋風起って白雲飛ぶ」というように、颯々とした秋風は墓陵の草を分け、青空に二つ三つの薄い白雲が浮いていた。

尾花の穂の揺れに季節の移り変りを感じながら、茂陵東方にある^{カキキツヘイ}霍去病の墓丘に移動した。矢つぎ早やに数次の匈奴討伐に出陣した彼は、決定的な大打撃を加えたものの、24歳の若さで短い波乱に満ちた生涯の幕を閉じている。

戦袍に身を包んだ者の一人として墓丘を眺めると、彼の無念は勿論、死を悼む部下の声まで聞こえるようである。前回、士気烈々の彼の墓丘に登った想い出は懐かしく、今日は羊腸の小径に砂漠の野菊が咲いていた。

再び霍去病の墓と相見えるのも奇異というか、縁の不思議さであった。少時間で離別の時を迎え、懸命に疾走するバスの息遣いをうけながら、玉蜀黍畑の鮮やかに色づいた中を楊貴妃の墓に向かっていた。

楊貴妃墓 (右は新設された楊貴妃像)

古代中国に燃え広がった兵火がいつ熄むとも思われなかった関中平野を、桃源の夢をむさぼるようにバスは大地を蹴つて走った。

楊貴妃が殺害された馬嵬^{ウヰ}の地は、山門と煉瓦で覆った墓丘の外はすっかり変貌し、俗化されて惻隱の情は湧いてこない。



境内には新しく殿宇や楼閣が建立され、地下に眠る貴妃は得意になっているのではないだろうか。その中で一際目立って見えたのは、純白で洗練された眉目秀麗な観音像の彼女であった。(前頁の写真)

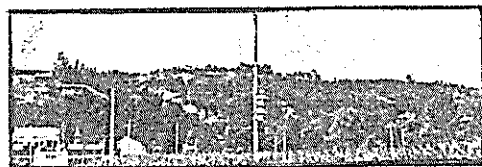
喜色を浮かべた美人の粧い、雪のように白く絹のようにきめ細かい彼女、黄泉の国に眠る玄宗皇帝や安祿山の胸中は如何ばかりであろうか。

貴妃像を眺めていると、主権の害は流賊の害より甚だ強いといわなければならない。当時は上からの改革などは望めなかった時代であった。したがって民乱による下からの力で解決を図る以外には、悪政に立ち向かう方法は無かったのである。

楊貴妃の墓を一巡し、餓えた虎が肉を欲しがるように激突した関中の古戦場へと進行した。

武功 (10頁地図参照)

馬嵬のすぐ西にある「武功」(鎮)の丘の上に斜塔が立っていた。(右の写真の中央、電柱の右側に見える)



武功は諸葛亮孔明と司馬懿仲達とが戦った古戦場である。また孔明が陣を五丈原にとるか武功にとるかと思案した要衝の地で、いよいよ孔明が権謀術数の限りを尽くした戦跡の一角に入ったのであった。

仲達は「若し孔明が斜谷、祁山^{キサン}の兵を武功に出兵し、山に沿って西安に東進するようであれば憂慮すべきだが、五丈原に出れば憂いなし」と、言ったという。五丈原は専守防禦の地形だと判断した仲達の慧眼は敬服に価する。(2頁地図参照)

孔明の軍は進軍を開始し、選んだ地は武功でなくて五丈原であった。孔明は冒険を避けて持久長攻に便な五丈原を選んだが、両軍師とも虚々実々の秘術を尽くして渡り合ったのである。

車窓から武功の地形を一瞥すると、ここで戦いを開始すれば一挙に雌雄を決する決戦場となる地形で、両者共に決戦の意志が無かったのであろう。

車は武功に立ち寄ることなく通過し、曠漠千里の黄土層を眺めていると、黄土地帯の主人公を「黄帝」と名付けた由来が納得できる。これらの「伝承」は一つの大きな歴史の流れの表現であり、一つには人々の願望が作り出したものと思えてくる。伝承は全く無視することはできない。(黄帝は古代伝説の三皇五帝の一人)

黄土は北方の半乾燥のアジアの土が風に運ばれて堆積したもので、層の深さは20～30mもあるという。黄土は植物の成長に必要な鉱物質を多量に含み、水もちが良好なために農業に適し、大陸に巨大な農業文化を育てたのであった。

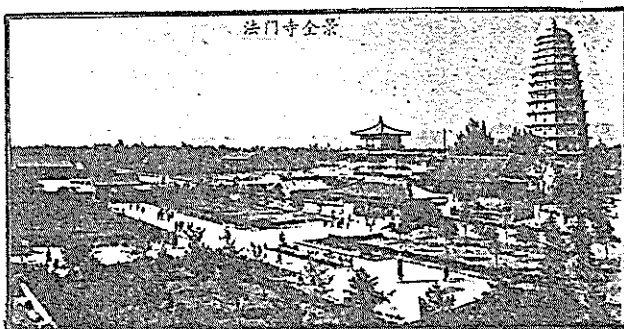
反面、非常に水に侵蝕され易い。戦時中、私が中原の黄河流域で水に悩まされた苦い経験を想起すると、背筋が寒くなってくる。また黄土地帯のイナゴの大群の来襲の悲惨さは言語に絶し、瞬間に作物を喰い荒して丸坊主にしてしまった。しかし農民の最大の恐怖は外敵の侵入という人災ではないだろうか。

古代から広い陝西で狼煙の絶えた日はなく、戦争は漢民族農民にとって悲しい日常茶飯事であった。秋風の音を聞くと今年こそ平和であるようにと祈っていた、と一面の色づいた作物が訴えているように見えていた。

法門寺 (10頁地図参照)

法門寺は中国最古の仏教寺院として有名な洛陽の白馬寺(昭和56年に訪問)と並ぶ古刹だと知り、私の浅学を赤面しなければならなかった。

法門寺の歴史を繙くとこの地は5000年の歴史を有している。黄帝はその臣・周昌を此処に封じ、紀元前16世紀頃には商(殷)の太史周もこの地に封ぜられている。降って紀元前11世紀頃、周はこの附近(岐山・地図参照)に建国し、紀元前676年に秦の徳公が都したところが法門寺東方の雍城であった。(上の写真は法門寺全景)



紀元前350年、秦の孝公は今の法門寺の位置に美陽城を造って美亭と称し、その時代の銅の鼎などが出土している。紀元67年、漢の明帝の時に仏教が伝来して寺院が建築されたが、法門寺も其の時に建立された古寺の一つである。

紀元111年と140年に羌族、172~177年には張角の五斗米教(道教)が侵入、185年には董卓の乱に遭い、384~430年には北魏の戦火によつて寺は廃墟と化し、仏教の禁止、仏塔寺の毀壞、僧侶の殺戮などに遭遇した。

しかし北魏の孝文帝の時に地下宮殿の寺院が再建されて仏舍利が奉納、北魏年間には数々の石仏等が造られ、寺は仏教布教の道場となった。隋時代には厚く朝廷の保護を受け、625年の唐の高祖の時に火災に遭ったが重要なものは幸に残っている。

唐代の660年、法門寺の仏骨は洛陽に移され、則天武后は法門寺に対して莫大な喜捨をしている。則天武后が仏教の隆盛に力を尽くしたため、白馬寺と共に法門寺の再建重修が行われ、仏骨(中指)は厚く白馬寺で供養され続けた。

790年、唐の貞元6年2月、仏骨は法門寺に送還されて地下宮殿に安置され、30年毎に開扉して仏教徒に功德を施すことになった。唐時代の法門寺に対する貢献は枚挙することは出来ない程である。

宋時代に移っても唐と同様の喜捨奉納が続き、真宗、徽宗の時代は特に著しい。元になると杭州の普陀山からの經典の奉納が多くなり、明時代の寺の修復と仏像や鐘の寄贈は顕著で、記述することは尽きない。

中華民国になっても法門寺は厚く尊敬保護されたが、解放後の文化大革命の際には紅衛兵によって仏像、仏典、碑刻などが破壊された。しかし地下宮殿にあった重要なものは幸い発見を免れて現存されている。

以上は陝西省出版社発行「法門寺記事」(200頁)の一端を記載した。このような由緒ある寺院に参詣できたことは無上の喜びで、今次旅行の大きな成果である。

三日月眉のふっくらとした顔たちに身装の端正な女性通訳が、法門寺専任として我々を案内した。灼りつける陽光は夏日を思わせ、広大な境内に入ると2基の大燈籠が正面に据えられ、寺の貫禄を遺憾なく現わしていた。

見えない糸で固く結ばれている心の古里のような感じを抱いて玉砂利を踏み進んだ。

仏教文化の薫りに満ちた広くて長い参道、青空を見上げると吸い込まれそうな真っ青な秋空、蒼蒼として茂る街路樹の蔭を求めて進むと、樹の歯を挽くように店が並んでいた。（右は参道と塔）

遮るものもない大空の向うに湧き立つように塔が聳え、一大楽土を築いた中心になっていた。法門寺西方10万億土に極楽浄土の世界があるという感じを受ける景観は、自己催眠術にかかったようであった。

政權の座が目まぐるしく交替して殺戮・略奪が横行し、民衆は激しい闘争の中に巻き込まれたこの地、仏が闇の世を照らす煌々とした光となって、うちひしがれた民を絶望の淵から救済した功德が、今もなお多くの参詣人を呼んでいるのであった。

あたりの森閑とした清々しい空気が、五臓六腑にしみわたるような雰囲気の中に二層の本殿が建っていた。莞爾として慈愛に満ちた本尊に拝礼した一行は、地下宮殿に進んだ。（下の写真は本殿、下が地下宮殿。各建物内部は撮影禁止）

1981年、倒壊した塔の地下から仏舎利が発見され、87年4月2日（中国での釈迦生誕の日）に新築落成した鉄筋の建物には、法門寺の数々の宝物が陳列されていた。

記憶できないほどの中で感動させた筆頭は、嚴重にガラスの中に保管された仏骨（中指）であった。

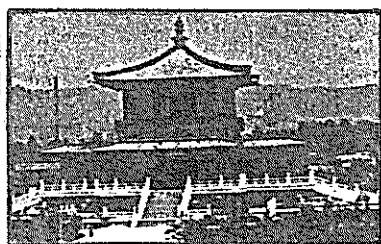
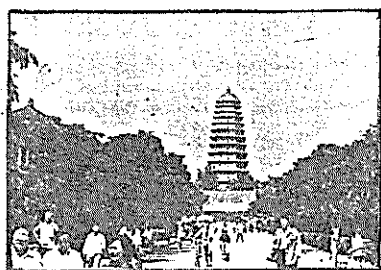
古来、中国では有徳な人とは、金持ちや比較的によく人に施す者を称していた。王侯を始めとした有徳の人達の寄贈品は眩ばゆいばかりに飾られ、その圧巻は金製の八宝重箱（八個の重箱）、金製の臥亀蓮花紋様の香炉、金製の籠であった。

戎衣を纏って戦火を交えた当時を回顧すると、多くの戦友の壮烈な死を見て世の中に神仏の存在を疑ったことは事実である。しかし沢山な中国参詣者に混じって拝観しているうちに、信じる者は救われると云うのであろうか、和やかな信仰の心が湧いてくるのであった。

「地位、財産、名誉」ばかりが重んじられる余り、「信仰、信頼、愛」といった人間古来の心が軽んじられる今日である。その風潮を改め、この世に生まれてきて良かったと思う社会作りのためにも、宗教の重要性を考えなければならない。

また死後の世界がどんなに素晴らしい世界だと説かれても、人間は誰でも此の世で生き続けたいと念願するのが本音である。その為にも信仰によつて安心立命を図りたいものである。

絶望に満ちた暗黒の時代から一般大衆を救済に導いた法門寺、約1時間の通訳の熱心な解説で一巡した。澄み切った蒼空に眼をやると、伽藍の屋根の上にたった一羽の鳩が平和を祈願するように見えていた。



五丈原に向かう

思いも掛けなかった古刹の拝観を終えて南に向かった一帯は、諸葛亮孔明と司馬懿仲達が数次に亘って干戈を交えた古戦場であった。

若き日の情熱と影響力は今なお心の中に生き続け、三国志の世界が私の頭の中に雲のように去来し、誠に奇しき縁である。

車窓に映る周りの景観を飽きることもなく眺めていた。樹木も農作物も午睡しているような静けさである。持参した地図に書き込んだ資料を確認すると、眼に見える景色も違って見えてくる。

バスは周の武王が都した「岐山」（右図参照）を通過した。興奮の熱気が舞い上がるような心境である。岐山は別名を「天柱」と云う。周の時代、鳳凰が山上でよく鳴いたことから「鳳凰堆」とも呼び、峰が高く急峻で諸山を抜いて天柱のように見えるから、この名が付いたと云われている。

天柱山は一名を鳳凰山と称し、三国志上にしばしば出現する地名である。

メキシコ原産のコスモスは、ギリシア語で調和装飾（ファション）を意味すると聞いている。壮烈な修羅場であった岐山に咲くコスモスの花は1800年の昔を忘れ、存亡興廃は世の習いだと生まれ変わる輪廻を示していた。

岐山の急坂を下ると其処に、悠久の歴史を秘めた渭水の流れが手に取るように見え出した。いよいよ五丈原だと私の胸は素早く反応し、名状し難い一期一会の感動を誘っていた。

三国志は日本の戦国乱世時代と似通ったところが少なくない。ただ一つ歴史的な流れとして織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という天下人が次々と制した。そして家康が最後の覇者となって乱世に終止符を打った。

三国志の時代は魏、呉、蜀の三大勢力であり、三極分化あるいは多極的な競争関係にあり、面白く可笑しく脚本した「三国志演義」になっている。それは一つの人間行動の真理から出ており、日本の戦乱は足もとにも及ばないと言わなければならないだろう。

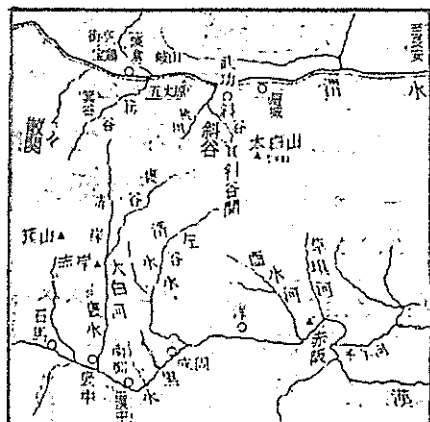
その中の劉備と孔明の関係は現代にそのまま存在し得ることで、人間関係の不思議さを伝えていると言える。

五丈原の地を踏む前に諸葛亮孔明と司馬懿仲達に就いて、極く簡単に記載する。

【諸葛亮孔明】（181～234）

今年は孔明の生誕1810年である。

三国時代に蜀（蜀漢）の劉備玄德に仕えた宰相で、空前の政治及び戦略家として知られている。孔明は字で名は亮、山東省沂県（琅邪国陽都）の豪族の出身だが、幼時に両親を失い叔父の諸葛玄に養われ、その後、荊州の隆中（湖北省襄陽県）に移った。



隆中で師・徐庶の教えを受けて「臥龍」と云われるほどに成人した。この時、魏の曹操に追われていた劉備玄德は其の名声を知り、所謂「三顧の礼」を以て孔明を訪問し、孔明は劉備に「天下三分の計」（魏・呉・蜀の三分）を説いて仕えた。

それ以来「水魚の交わり」を結ぶことになったが、この諺はこれから生まれたもので、孔明は28歳であった。

翌年、呉の孫権（孫子の子孫）と連合した孔明は、南下してきた魏の曹操軍を赤壁の戦いで撃破した。

この時の奇策（火攻め）は有名で詳細は三国志の旅・長江下りに前記済みである。その後、荊州（湖北・湖南省）、益州（四川省）を劉備の勢力範囲におさめ、221年、劉備が蜀で漢帝と称すると孔明も丞相となり、天下三分の計を実現させた。

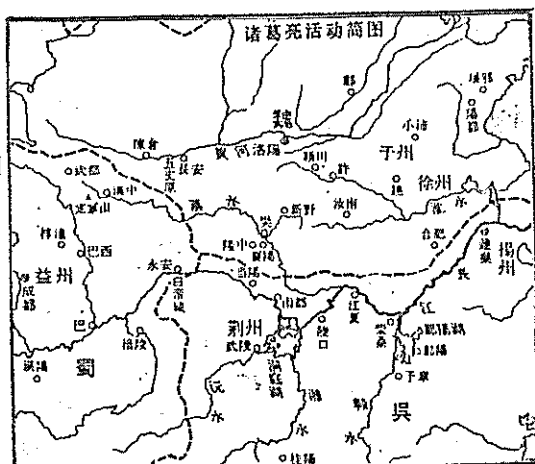
白帝城で劉備が死亡した時、国の将来と嗣子の行く末を託され、それ以来、劉備の子「劉禪」（17歳）を助けて蜀の経営に専心した。225年には自ら南方の鎮定に向い、後顧の憂いを断った。このときの奏上文が「前出師之表」である。

その後の227年、宿敵であった魏に対して積極的に攻勢に出た。第2次の出陣に際し後主・劉全に奏上したのが「後出師之表」で、これを読んで涙を流さない者は人に非らず、と言われる名文であった。

前後8年間に6度に及ぶ魏討伐戦は、一時は魏の2郡を奪うという戦果をあげたが、最後の2度にわたる戦いは魏の司馬懿（仲達）の持久戦に苦戦し、彼の知略をもってしても大勢を動かすことは出来なかった。

遂に渭水の辺の五丈原（前頁地図の中央上部）で仲達と対陣中に病没したのである。時は二三年8月、享年54歳、諡は「忠武侯」である。そのために各地の孔明廟を「武侯祠」と称している。

君に仕えて至誠至忠、戦場に於ては知謀縦横、しかも悲願は成就しなかった彼の一生は、三国時代の特異な英雄として後世史書に特筆され、「三国志演義」の中では重要な人物となっている。（上図は諸葛亮の活動した地図）



【司馬懿仲達】（179～251）

字は仲達、河内郡温（河南省）の人。曹操、曹丕、曹叅、曹芳と魏王朝の四代に仕え、やがて彼の子孫は魏から禪譲を受けて晋王朝を築いている。

彼は少年時代から聡明で初め郡の会計官になったが、評判を聞いた曹操に招かれて数々の要職を歴任。曹操の死後は子の曹丕に仕えて側近の地位を固めた。そして226年、曹丕（文帝）が死去する際には曹真、陳群、曹休と共に後事を託された。

曹叅（明帝）即位後、荊州、予州（河南省）の軍事の全権を与えられて宛（河南省・南陽）に駐屯した。



227年、蜀の孔明が出師之表を奉じて北伐の軍を興した時、魏の新城郡太守（地方長官）の孟達がこれに内通する動きを示したが、仲達は電光石化の行動でこれを討伐し、禍根を未然に防いだ。

231年、孔明が再度祁山に討って出たが、このとき仲達は西部方面軍の指揮をとり、初めて両者が対決した。しかし第1回目の対決は蜀軍が補給にこと欠き、本国に撤退して終わった。

3年後の234年、孔明は斜谷^{しゃく}から出撃して五丈原に布陣した。仲達は孔明の挑戦にのらず一途に守りを固め、4ヶ月後、孔明が病死して仲達の不戦勝となった。

以来、朝廷内でますます重きをなし、239年、明帝の死後に際しては曹爽と共に後事を託され、幼帝曹芳を輔佐した。やがて曹爽の一派が朝政を専断すると、249年、クーデターを決行して朝政の実験を握った。251年、洛陽で死去。

後日、仲達の子孫は政権を魏から禅譲され、全国を統一して晋王朝を築いたことから、晋朝の遠祖となった。

三国志演義では蜀の劉備、孔明を善、魏の曹操一族、仲達は悪とされているが、その点は曹操や仲達は気の毒である。

五丈原

渭水を渡って玉蜀黍の黄色に色づいた一本道を走ると、肥沃な黄土の中に五丈原鎮の集落があった。思ったより大きな農村の村人達は我々日本人を物珍しそうに出迎え、通訳は南側の高台を指差して五丈原だと伝えた。（下の写真は五丈原の景観）

鋭利な刃物のように頭脳を働かせて三国志の記憶の糸を手繰り出し、湧かれるように炬眼を光らせ視線を凝らした。絵で見た昔のままの五丈原は歳月が止まっていたように、秀麗な丘の輪郭をくっきりと作り出していた。

1800年前に逆戻りした幽玄な丘は美しく陽に映え、電流が走ったように体が震えて興奮を覚え、写真は感動の記録だと双眸を潤ませてシャッターを切った。

村の西側の径を歩き出すと胸中は波打ち、空洞がaitaように虚ろな思いが込み上げ、又もや三国志の世界が走馬灯のように胸をよぎっていた。

観光用に新設した石段は羊腸のように急斜面を走り、一步一步踏み締めて登ると人生は茨の道だと激励していた。老体では胸突き八丁の石段を一気に登攀することはできず、何度か休憩しなければならない。

山裾は深碧の灌木に覆われ、石段を登って上に行くにつれて古色蒼然とした大樹が茂り、緑の中に褐色の黄土の山肌が露出して彩りの起伏をなしている。

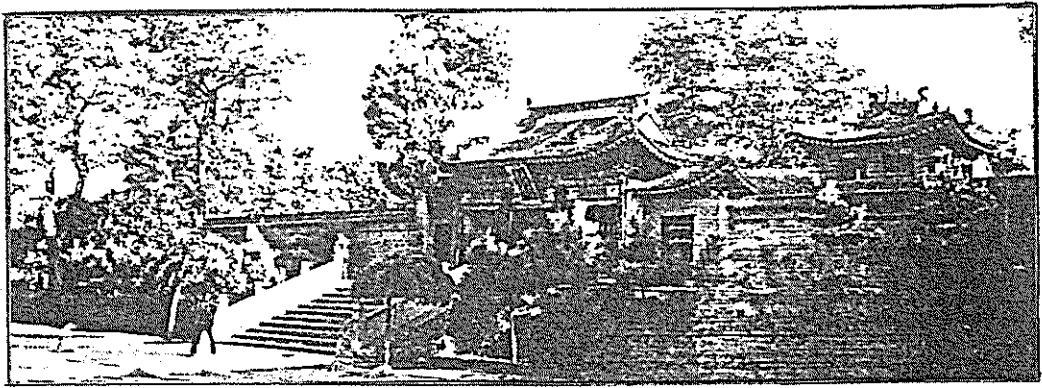


己を叱咤激励して腰を浮かすと楚々とした萩の花が白い石段を飾っていた。万葉集に多く歌われた萩は何処の国でも同じく、四季の移り変りの中に静かな淡い花を咲かせ、風流の代名詞の感じがする。

僅かな微風に真っ白な冠毛をふるわせる草花の中に、生々しい傷跡のような横穴も見え（勿論当時のものではない）、漸く兵家必争の戦略的要衝の地・五丈原頭に登り詰めた。

苛酷な歴史の一齣である五丈原、歴史は一人の偉大な人物を中心にして動いた五丈原、胸が痛まずにおられず滂沱の泪が頬をつたうような感じの五丈原、臥龍の人格を慕って原頭に立った心境は筆舌に尽くせない感激であった。

台上から眺めた五丈原は、渭水の近くまで突き出た緑と赤茶げた黄土層の丘であった。奇縁とも云える五丈原との出会いは玉手箱を開けるような気持であり、原頭は冷水を浴びせたような静けさである。その中から何処か夢の国へでも訪れたような、不思議な懐かしさが感じてくるのであった。（下は五丈原諸葛孔明廟）



孔明を祀る「五丈原諸葛孔明廟」は平らな原頭に静寂に包まれて建っていた。人はそれぞれの世界観や人生観があるとはいえ、我々年代の者にとっては孔明は心の宝石、旅の実感が潮のように押し寄せてきた。（右は廟の山門）

襟を正して山門をくぐり通訳嬢の説明を聞くと、高鳴る鼓動は大地に響くようで、何とも言えない悲哀感が疲れ切った我が胸を抉っていた。

恭しく終焉の地に祀られた孔明像に拝礼した。両軍膠着状態の中に雄図空しく死出の旅に立った軍師、運命は残酷だと思えば私までも悲しみが小刻みに震えてくる。

死を視ること帰するが如き眉宇、凜乎とした孔明像は瞳の奥に炯々とした輝きがあり、訴えるように光っていた。

通訳嬢の一言一句も漏らさないと耳を傾けていると、改めて痛恨に臓腑が抉られる思いであった。漢朝復興のために燈明ように尽きるまで燃焼した彼の魂魄は、この地



に在って鎮護の鬼となり、松柏に宿っていることだろう。

これらの心境は死闘戦場に臨んだ者のみが感ずることかも知れない。「同火共食」即ち同じ釜の飯を食べた者の腹の中は同じであり、確かに涙を誘う力は不思議である。

特にこの時代は王将を失うと、全軍ばかりでなく国家まで崩壊した。主将は単に指揮機能だけでなく、その存在が国、軍そのものであり、恨みは深し五丈原である。

学生時代、若い血潮にかられて歌った「星落秋風五丈原」の歌詞の一部を記載して、丞相・孔明を偲びたい。

(丞相とは天子を補佐して政務を処置する最高の官職で、戦国時代からあったが明の初期に廃止されている)



- | | | |
|---|--|--|
| ① | 祁山悲秋の風更けて
零露の文は繁くして
蜀軍の旗、光りなく
丞相、病い篤かりき | 陣雲暗し五丈原
草枯れ馬は肥ゆれども
鼓角の音も今静か
丞相、病い篤かりき |
| ② | 清渭の流れ水やせて
夜は関山の風泣いて
令、風霜の、威もすぐく
丞相、病い篤かりき | 咽ぶ非情の秋の声
暗に迷う雁は
守る砦の垣の外
丞相、病い篤かりき |
| ③ | 張中眠り幽かにて
ここにも見ゆる秋の色
見よや侍衛の面影に
丞相、病い篤かりき | 短檠、光り薄ければ
銀甲固く鎧えども
無限の愁い溢るるを
丞相、病い篤かりき |
| ④ | 風塵遠し三尺の
秋に傷めば松柏の
漢騎十万今さらに
丞相、病い篤かりき | 剣は光り曇らねど
色も自づと、うつろうを
見るや故郷の夢如何に
丞相、病い篤かりき |
| ⑤ | 夢寝に忘れぬ君王の
心をこがし身を尽す
今いま落葉の雨の音
漢室の運、はた如何に | 臨終の詔かしこみて
暴露の努、幾とせか
大樹一たび倒れなば
丞相、病い篤かりき |
| ⑥ | 四海の波瀾、収まらで
何時かは見なん太平の
群雄起ちて、ことごとく
誰か王者の師を学ぶ | 民は苦しみ天は泣き
心のどけき春の夢
中原、鹿を争うも
丞相、病い篤かりき |
| ⑦ | 末は黄河の水濁る
伊周の跡は今いずこ
管中去りて九百年
誰か王者の治を思う | 三代の源、遠くして
道は衰え文弊れ
樂毅滅びて四百年
丞相、病い篤かりき |

この歌は土井晩翠詩集「天地有情」(明治31年発行)の中に出てくる長い詩の第一部である。(上の写真は五丈原諸葛亮廟に祀られた孔明像)

歌詞を口ずさびながら廟中の各楼閣に脚を運ぶと、己の生命を如何に燃焼し尽したかと云う彼の人物がにじみ出ており、「蜀漢柱石」「英名千古」「五丈秋風」などの扁額は、数え切れないほどであった。

(右の写真は扁額の一部)

乱世の世に時代を展望した先見性は、正しく臥龍と云う尊称の通りで、死山血河の中に神算鬼謀をめぐらした孔明を慕う心は、燦として五丈原に永久に言い継がれることだろう。

人生の夕映えを迎え、身が鈍って老境に入ったに拘らず、過ぎ去った数々の戦闘を思い出す今日、数千年の知己に遇うような心境で五丈原を訪れた。人の一生は邂逅の一言に尽きると云う感じがする。

廟史によると五丈原の諸葛亮廟は唐初に創建されている。元代には廟の規模を拡大し、明、清代には9次にわたって重修、中共に移ってから80年に修復したとの石碑が立っていた。

多くの石碑の中に「出師之表」の石刻が眼に留った。

孔明が出師の必要を説いた最後の文章は印象的で、その哀切さに心がうずき背筋に寒気が奔る思いがした。

「凡そ事はの如く逆め見る可き難し。臣鞠躬して力を尽くし死して後已まん。成敗利鈍に至りては、臣の明の能く逆め観る所にあらざるなり」と。

啾々として惜別の情は抑え難く、漸く参観が終わり、五丈原の戦闘経過を必死になって記憶の糸を手繰った。しかし蜘蛛の糸が脳膜にかかったように記憶の回復を遮り、斜谷、箕谷などの地形が思い出せない。

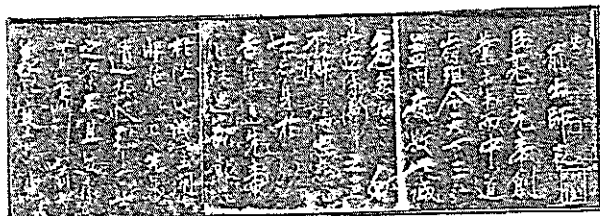
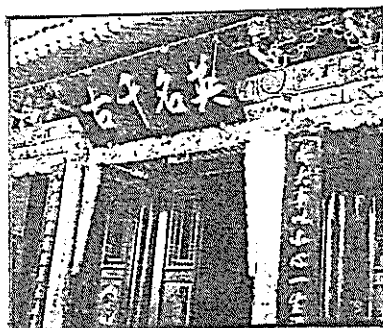
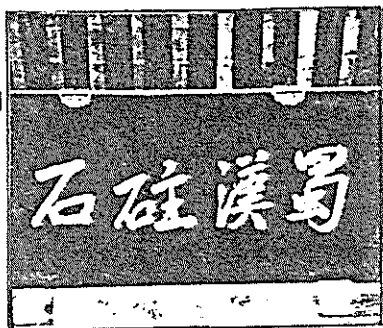
出会した廟の管理人に尋ねたところ、彼は知己のように詳しく教示してくれ、誠に倥傯であった。感謝に堪えない。(下は出師之表の石刻)

五丈原頭から去らなければならぬ時を迎え、台上の一端に立って下界を瞰下した。

悠然とした渭水は黄色い帯びのように東西に流れ、山肌は茶褐色とも薄紫色とも見える表現できない神秘的な色に染まり、原頭の神域は天上の楽園のようにも見えていた。

再び石段を踏むと蜂は羽音も高く花から花へと喜びを伝え、いかにも美酒に酔っているようである。明日という日の保証のない武人として戦陣を馳駆した私にとっては、五丈原は終生忘れられない思いがする。

丘を降って五丈原鎮の子供たちの純真な瞳に魅せられながら、早苗が甘雨を得たように清水の冷たい水で口を潤し、バスに乗車した。



星落秋風五丈原の対陣 (下の地図を参照)

蜀(四川)と関中(渭水平野)との間には秦嶺山脈(南山)が横たわっている。この山脈には東から子午谷、駱谷、斜谷、箕谷などの溪谷沿いに、南北を縦貫する道がつけられている。急峻な崖にへばり付くように取り付けた木道の続く所謂「蜀の栈道」である。

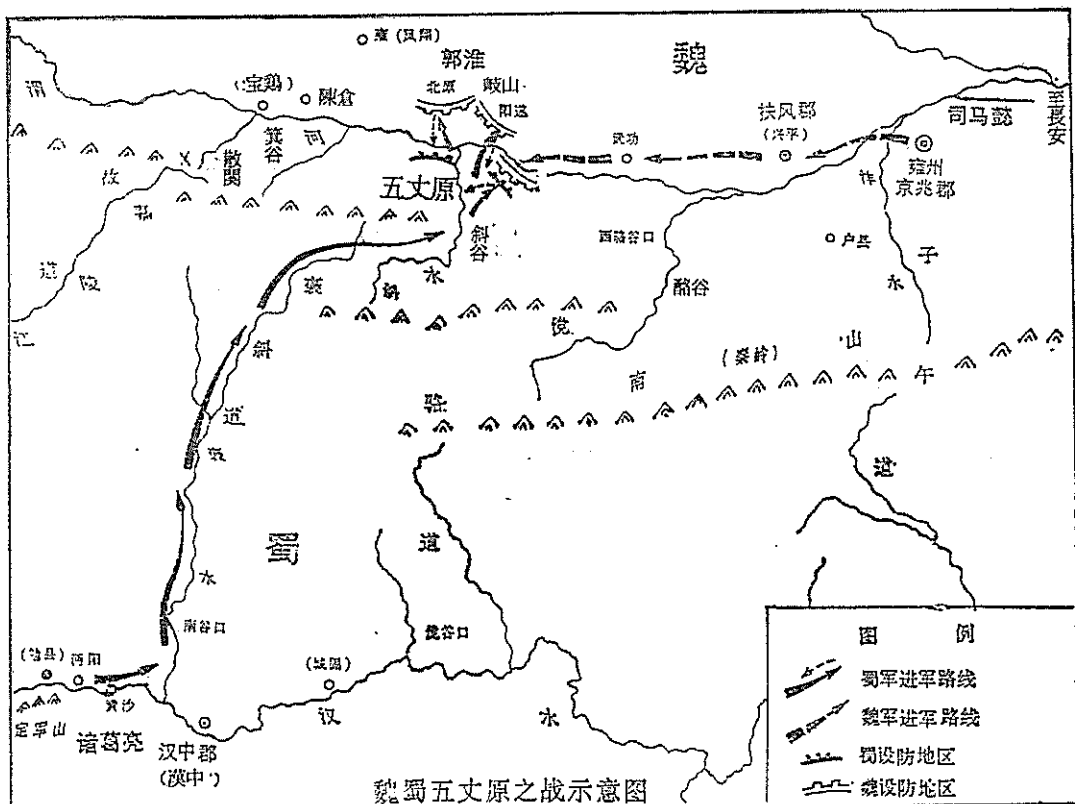
諸葛孔明の北伐はこれらの道を通り、228年から234年まで7年間に6回行われた。蜀漢の建興12年(234)に孔明が精兵10万を率いて褒斜道から斜道に入り、出陣したのが五丈原の戦闘であった。

五丈原の名称は通訳の説明によると、廟の後方にある頂上の広さが五丈、丘の高さが五十丈であったから、これに因んで五丈原と呼称したと言う。一瞥したところ山という感じではなく、丘という感じであった。

武功の項で記述した通り孔明が陣を選定した地は武功でなく、持久戦のために五丈原を選んだ。五丈原は宝鶏県の東南で渭水の南にあり、従来の数次の陣地に較べるとはるかに渭水近くまで突出している。

この地まで来ると長安や潼関、洛陽は近く進攻に便である。孔明は今度の戦いこそ土と化すか、敵国の中核に突入するか、再び漢中(蜀軍の前進基地)には還らない決意であったようだ。孔明の気魄は地形を見ても顕然としている。

これを見た魏の將軍・司馬懿仲達は僥倖だと喜んだ。持久戦ならば彼も自信があっ



たのだろう。ただ困るのは大局の見通しを持たない部下から、総帥は臆病だと批判されることであった。

仲達はわざと朝廷に上奏して戦いを請うたが、堅守自重、守りに努めよと云う訓令であった。孔明は陣を五丈原に移してから誘導してみたが、魏軍は全く動きを見せない。孔明が敵国に深く進出しながら誘導の消極戦法を固辞した理由は、兵力と装備の差であった。

後方からの補給に地の利を得ている魏の陣営は、動きを見せない間に驚くべき兵力を増強し、孔明の見るところでは蜀軍の8倍に達していた。寡兵の孔明軍としては誘き寄せて近くに撃つ、この一手しか他に策はなかった。

無反応で辛抱づよい敵に対して孔明も計の施しようもなく、彼は使者を選んで自筆の書簡と美しい牛皮の箱を託し、魏軍の仲達のところに送った。当時は輿に乗って通る者は撃たずという戦陣の作法があり、使者はこれを仲達に渡すことができた。

箱を開くと巾褌と縞衣が出てきた。これを見た仲達は唇を噛んで激怒した。巾褌というのは少女が髪に飾る布、縞衣は女服である。即ち家の内ばかりにいる婦人のようだと揶揄したのである。

書簡には、史上稀に見る大軍をかかえながら、腐った婦人のように女々しいのは如何したのか。武門の名を惜しみ身が男子であるならば、潔く出て来て決戦せよと書かれていた。

その時、仲達は内心の憤怒とは正反対に、笑って使者をねぎらいながら酒を饗応して、孔明はよく眠れるかと訊ねた。使者は丞相は夜半に寝て朝は早く起きられ、軍中の努めに励んでいると答えた。

続いて朝夕の食事はどうかと訊ねると、食事は極く少量しか召し上がらないと答えた。使者が帰ると仲達は「孔明の命は長くはない。戦陣の激務と心労に煩わされながら、微量の食事しか摂らないことは、孔明は弱っている」と判断した。

これらのことを使者から聞いた孔明は、我れを知ること仲達に優る者はないと感嘆し、我が命数までも量っているのかと賞賛したと云う。その時すでに我が病を孔明自身が誰よりもよく覚っていたのである。間もなく容態は普通でなくなった。

それ以来、孔明の病は募るばかりで、魏の兵士が涼秋八月の夜を楽しんでいる時、不思議な流れ星が3つ、蜀の軍営に落下したのを見た。その奇象が次のように記録されている。

「長星アリ、赤クシテ芒、東西ヨリ飛ンデ孔明ノ軍営ニ投ジ、3タビ投ジテ2タビ還ル。ソノ流れ来タルトキハ光芒大ニシテ、還ルトキハ小サク、其ノウチ1星ハ終ニ隕チテ還ラズ。……占ニ日ク、両軍ガ相当ルトキ、大流星アリテ軍上ヲ走り、軍中ニ隕ツルニ及ベバ、其ノ軍ハ破敗ノ徴ナリ」

仲達は陣外に出て空を仰いで急命を下した。恐らく孔明は危篤に陥っていると思う。或はその死は今夜かもしれない。部下の将・夏侯覇に千騎を率いて五丈原を窺わせた。蜀軍が奮然と討って出たら孔明の病は未だ軽いと見なければならぬ。

孔明の部下の将・魏延は帳中に駆け込み、「丞相、魏軍が来襲し、遂にこちらの望み通り仲達が戦端を開いた」と報告した。病の平癒を祈願していた孔明は剣を投げ捨て、「死生命あり、臆、われ遂に熄むのほかなき乎」と叫び、床に伏し倒れた。

今宵の敵の奇襲は仲達が孔明の病の危篤を察し、その虚実を探らんがためであり、

急に一手を差し向けたに過ぎない。すぐ撃って出て蹴散らすように魏延に命じた。

魏延が陣前に現われると仲達軍の鼓の音も喊声も止み、攻守が忽ち逆転して逃げ去ってしまった。しかし孔明の病状はこの時から精神的にも再び回復の望みはなくなっていた。

翌日、彼の最も信頼する武将・姜維^{キョウイ}を招き、自分が今日まで学んだところを24篇に纏めた兵法書を授けて後事を託し、蜀の天子に捧げる遺書を認めた。

一同の武将に「自分が死んでも喪を発してはならない。大きな龕^{ガン}（神仏を安置する箱の意）を作り、死骸を其の中に生けるが如く坐らせ、口中に米を7粒入れ、足もとに1基の燈明を置くが良い。全軍は常の如く平静を保ち、味方の将兵にも孔明はなお健在だと思わせておけ」命じた。（右は中国の五丈原の絵）

その後、機を見て仲達軍の先鋒を追ひ払い、我が退路を確保してから喪を発すれば、恐らく大過なく全軍は帰国できるだろう。さらに退陣の法を授け、もう何も言っておくひとはない。みな心を一つにして国に報じ、職分を尽くしてくれ言い遺して、一時、息が絶えた。

しかし、唇に水を含むと醒めたように目を開き、病床から見える北斗星の1つを指差して、「あの煌々と見える星が私の宿星だ。いま滅前の一燦をまたたいている。見よ、やがて落ちるであろう……」と言った途端、孔明の顔は白蠟のようになってしまった。時は蜀の建興13年（234）8月23日、54歳であった。

その落星石は五丈原の諸葛亮廟に飾られている。石刻には東北から西南に流れた星が蜀の軍営に落下すると、俄かに孔明は息を引きとつたと彫まれていた。（右は落星石）

孔明が出師之表を認めて北伐の途についてから兵馬倥傯の間、寧日なき7年余を彼は氣力のみで生きてきた。

孔明の死は蜀軍を空しく故山に帰らせて蜀の国策も一転したかが、彼の死ほど大きな影響を与えたものはなかった。



死せる孔明、生ける仲達を走らす

魏の司馬懿仲達は天文を見て、「孔明は死んだ」と愕然として歎息した。今、北斗を見ると、大きな1星は昏々と光をかくして7星の座は崩れた。今度こそ間違いはない。今夕、孔明は必ず死んだだろうと昂奮した。

（天文気象に関することは中国の陰陽五行と星歴によるもので、黄土大陸の庶民の間に信じられていた宇宙観であり、それと結ばれた人生観でもあった）

蜀軍に全滅を加えるのは今だと決心した仲達は、全軍に総攻撃の準備を命じる一方、五丈原の敵陣の偵察を命じた。その時も未だ蜀軍の将兵は孔明の死を知られていない。

五丈原に派遣した仲達の偵察隊は、蜀軍はどこも荷造りをして馬を揃えて撤退の準備中だと報告した。

仲達は手を打って喜び、「孔明死す、速やかに殲滅を図らなければならない」と、全軍に追撃を命じた。

五丈原に接近した魏の大軍は、「孔明のいない蜀軍は要のとれた扇子同様だ」と蜀の陣地に雪崩込んだが、一兵の蜀軍の影もなく、さらに追撃して退路遮断を計った。

そこから彼方の山間まで隊列が延々と続き、最後尾の一隊は朱色の長方形の箱を乗せた台車を護っていた。あれは孔明の棺に違いないと仲達の類は火照り、魏軍は怪鳥のような奇声を発して突進した。

すると忽ち一方の山間から無数の陣鼓が鳴り響いた。蜀軍は蜀旗と丞相旗を振りかざし、1輦の4輪車を真っ先に押し出して反撃に出た。4輪車の天蓋は外され、長身、長衣の人物が羽扇を掲げ、我が姿をとくと見定めよ、と言わんばかりの姿であった。

死んだとばかり思っていた孔明が白羽扇を持って車の上に端座し、車を護る将兵は手に鉄槍を持って士気は旺盛、どこにも陰々とした喪の影は見えない。勿論これは孔明が生前に命じて作らせた木像であった。

孔明は未だ死んでいない。不覚にもまた彼の奇謀にかかったかと絶叫し、追撃を中止して仲達は馬に鞭打って退却を開始した。驚愕狼狽して我れ先にと退却した魏の大軍は、馬と馬、兵と兵がぶつかり合つて阿鼻叫喚の大混乱を呈した。

一方の蜀の将兵は思う存分に猛烈な逆襲に転じ、将に死せる孔明、生ける仲達を走らしたのである。

これらの状況を総合判断すると、蜀軍の大部分は前夜に五丈原を撤退し、知謀の将・姜維の率いる1軍だけが最後まで踏み留まり、退却援護の布陣をしていたのである。これは退却援護戦法の原則で、その経験をしている私には良く理解できる。

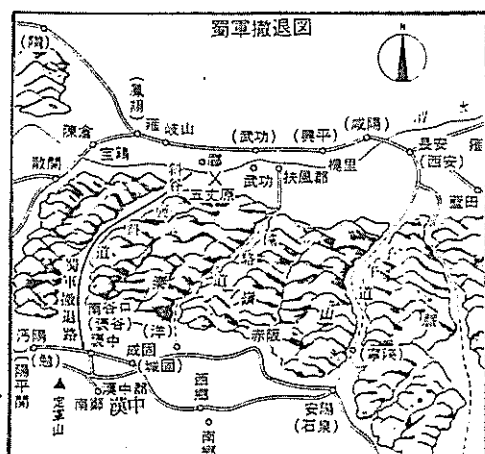
戦いの初日、白い帛旗と黒の喪旗を立てた蓋霊車が、五丈原の西方に後退して行ったことを知った仲達は、再び兵を出発させて追撃したものの後の祭、既に蜀軍の影は見えなかった。

司馬懿仲達は在りし日の孔明を偲びながら、「真に彼は天下の奇才、恐らく地上に再び彼の如き人を見ることはあるまい」と、独り呟いたと言う。

孔明の霊車は皇帝・劉禪以下、文武百官の出迎えを受け、無事に蜀都の成都に着いた。孔明の遺骸は漢中の定軍山に葬られ、蜀朝は諡を「忠武侯」と称したのである。

以上は三国志・五丈原の戦闘経過の一端を記述した。両雄並び立たずと言われるが、孔明、仲達ともに優れた神機妙算の軍略家で、豪遊は豪遊を識ると言わなければならない。(以上は西安・三秦出版社「諸葛亮」の一部参考)

心胆盤石の如く俊敏にして文武両道に通じた孔明、彼の死出の旅に仲達は胸が張り裂ける思いだったと言われている。それを知った私までが、胸に刺がささり目から鱗が落ちる思いがするのであった。(上図は蜀軍の撤退図)



五丈原～宝鶏 (右図参照)

緊張と歓喜に武者震いした五丈原を振り返り、土の色や樹々の色を陰に収めながら、冥界の軍師と語り合っていた。

少しばかり兵学を学び、戦場を馳駆すること4年に亘った私は、五丈原から幾

多の教訓を学び、多くの感想を得た。その第一は「兵は心を攻めることが上策である」と言うことである。また「勇敢」以上に積極的な精神能力を持った人を「勇悍」と言うが、正しく孔明こそ勇悍だと絶賛したい。しかし死の美化は誤りであり、総て天命であると思うのであった。

睡魔に襲われて眼を閉じると、又もや三国志の世界が思い出されてくる。五丈原から宝鶏、天水に亘る千里の沃野は死臭が漂ひ戦いに明け暮れた兵馬倥傯の地であった。

軍師・孔明が権謀術数の限りを尽くし、仲達も負けず劣らずの知略をめぐらした古戦場、馬蹄に塵の雲を起して千軍万馬の将兵が草を食^{パンコフ}に飯の夢、幾度となく天地が晦冥するような血祭りに遭遇したことだろう。

脳細胞に地図を描きながら両眼を血走らせ、「馬謖」の戦った陳倉、街亭の方向を注視すると、一瞬数々の戦闘の様子が浮かんできた。孔明が発明した新兵器「連弩」や「木牛流馬」を使った処は、陳倉の谷であったのである。(上図)

三国志の詭計百出した戦闘場面は断片的ながら脳裏から消えず、古代史の宝庫は余韻嫋々として何かを訴えるような気もする。其の中に星をいただいて耕し、日没して家に帰る農民の姿だけは昔と変わらず、私の眼は地面ばかり見詰めていた。

関中の秋の訪れは遅く空はあくまでも澄み切っている。まさに「蒼穹」の字の通りで、空の青さが増すにつれて地上のものが色ずき、玉蜀黍は黄金色に染まっている。

バスは大陸特有の薄紅色の太陽が傾きかけた夕暮の宝鶏の市街に入った。花嫁がお色直しをしたような渭水の光景が、ぱっと華麗な姿に変身して見えてきた。

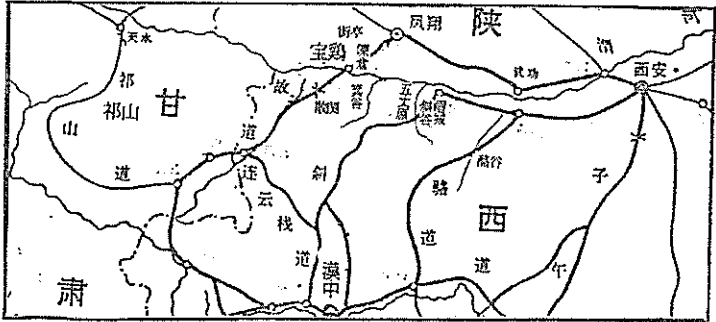
日が沈む時刻になると私は太陽の番人になつてしまう。見ている間にどんどん沈んで行く夕日に、その美しさを楽しめるのは僅かな一瞬であった。

秦嶺山脈を扼す蜀棧道入口の街・宝鶏の唯一の外人専用ホテル・鳳凰大酒店に到着。通訳が自費宣伝していたタバコ「金熊猴」を誘われながら購入し、翼を休める鳥のように旅装を解いた。

宝鶏は古くは秦・隋の時代には「陳倉」と呼ばれた。三国志の時代には神策鬼謀のもとに血飛沫の激突が展開され、泣いて馬謖を斬った街亭は陳倉(宝鶏)であった。

1131年には宋軍が激戦の結果、金軍の南下を防いだ所として知られている。

宝鶏の名の由来は昔ここに宝の鶏が棲み、この鳥が鳴くと瑞祥が現われたので此の名が付いたと言われている。宝鶏という名の風雅な響きに心をひかれながら昔を偲び、ホテルの窓から稜線一帯を眺めていた。



泣いて馬謖を斬る (右及び前頁地図参照)

馬謖 (190~228) の概歴

字は幼常、襄陽郡宜城 (湖北省) の人。蜀の参謀。「才器、人に過ぎ好んで軍計を論ず」と云われた人物で、諸葛孔明にその才を愛された。しかし228年春、街亭に於て魏の名将・張郃と対戦した時、馬謖は孔明の指令に反して險阻な山中に立て籠ったため、水源を絶たれて大敗を喫した。孔明は撤退を余儀なくされ、全軍に詫びるために馬謖を斬る。

【戦闘経過】

諸葛孔明の北伐の第1次作戦は228年春に開始され祁山に進出すると、驚いた魏の仲達は総兵力20万を長安から派遣した。仲達は先鋒の将・張郃を帷幕に招き、孔明は蓋世の英雄、当今の第一人者、これを破ることは容易でないと訓令した。

自分が孔明の立場に立って魏を攻め入るとすると、先ず子午谷から長安へ入る作戦をとるだろう。しかし孔明は恐らくそうはしない。彼の用兵は実に慎重深く、如何なる場合でも絶対に負けない不敗の地によって戦っている。

仲達の判断は孔明の心を解説するようで、英雄は英雄を識ると云わなければならない。即ち孔明は斜谷へ出て眉城を抑え、それから兵を分けて箕谷に向かうだろうと判断した。

仲達は部下の将・曹真に一刻も早く眉城の守りを固め、一方、箕谷に奇兵を潜伏して敵を破碎せよと命じ、仲達自身は張郃とともに街亭にある1城・列柳城に急行する策を立てた。街亭をとれば兵糧輸送の道を絶たれるから、孔明も漢中へ退くしかないと判断したのであった。

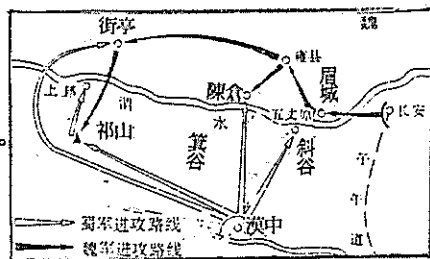
一方の孔明は斜谷から進出して眉城を取ると言明し、趙雲らの部隊を箕谷に進駐させた。これは魏の目をくらます陽道作戦で、自分は大軍を率いて遙か西方、渭水の上流の祁山に進駐した。

祁山一帯の山岳曠野は魏・蜀の天下分け目の境で、その広大な天地は孔明が選んで取った戦場である。この大会戦に先んじて蜀軍が先ず地理的優位を占めたことは言うまでもない。

仲達が早くも大軍を派遣したとの報に接した孔明は、我が咽喉に等しい街亭を案じ、そこに派遣する武将の選定をしていた。その時、馬謖が熱心に希望したのである。

魏の仲達や張郃が名将であろうと、自分も多年兵法を学んで弱冠をこえ、未だ功を立てないのでは世に対して恥ずかしい。街亭一つ守られないくらいなら将来、武門に伍して何の用に立ちませうと熱心に懇願した。

馬謖は孔明を父とも慕い師とも敬っていた。孔明もまた慈父の如く彼の成長を多年眺めてきた。馬謖は夷族の役で戦死した馬良の幼弟で、馬良と孔明は刎頸の友で遺族を引き取って世話していたが、とりわけ馬謖の才器を愛していた。



亡くなった蜀帝・劉備は孔明に、「馬謖は才器に過ぎ、重く用う勿れ」と言つたことがある。しかし孔明は何時かその言葉を忘れていた。そして成長する馬謖の軍計、兵略は孔明門下第一の俊才なりと、心ひそかに彼の大成を楽しみにしていた。

孔明は若い馬謖には重任すぎると考えたが、将来のある人材の鍛錬でもあり、大成への段階だと思い直し、「行くか」と言ってしまった。「若し過ちがあったら私は言うに及ばず、一門が軍罰に処せられても決して恨まない」と馬謖は誓った。

孔明は「陣中に戯言なし」と念を押し、敵の大將・仲達も副將・張郃も決して等閑な輩ではないと注意を与えた。そして千軍万馬の熟練の將・王平を馬謖の副將に任命し、必ず街亭を死守せよと厳命した。

更に孔明は要道の咽喉である街亭附近の地図をひろげ、陣地占領の方法を詳しく説明し、決して長安に進撃してはならないと指示した。この要地を死守して敵の一兵も通過させないことが、長安を取る第一義だと囁んでふくめるように命じた。

馬謖は副將の王平と共に、2万余の兵力を与えられて街亭へと急いだ。それを見送って1日おいた孔明は、武將の高翔を呼んで街亭の東北にある列柳城に進ませ、若し街亭が危険に陥った時は、馬謖を援けよと1万騎を与えた。

街亭の要地を重視した孔明はそれでも足りないと思ったのか、更に魏延の軍を後詰として出発させ、趙雲、登芝の2軍をも援護として箕谷方面に急派した。そして孔明の本陣は姜維を先鋒にして斜谷から眉城に向かった。

先ず眉城を占領して一路長安への進路を切り拓かんとする態勢である。

馬謖は街亭に着くと地形を偵察した。丞相は少し大事をとり過ぎるのではないかと、山といっても大した山ではない。やっと人の通れる程の道が幾つかあるに過ぎない街亭などへ、魏は大軍を投入して来るだろうか。丞相の作戦は何時でも念入りすぎて、却って味方に疑いを起させると、笑ったのであった。

馬謖は山上に布陣を命令したので、副將の王平は厳しく諫めた。丞相の下命した主旨は、山の細道を塞いでそれを遮断することであり、若し山上に陣をとれば魏軍に麓を囲まれ、目的を果たし切れないと強く意見を述べた。

それに対し馬謖は、その意見は婦女子の考えで大丈夫の取るところではない。この山は低いが三方は絶壁の断崖、魏軍が来襲すれば引き寄せて討つのに適した天険だと答えた。孫子も「是ヲ死地ニ置イテ而シテ後生ク」と申しており、黙って我が命令に従えばよいと命じた。

主將が山上に陣を構えるのであればと、王平は5千騎を率いて別に陣を布き敵に備える決意をした。議論に時を過ごしていると近郷の百姓たちは魏軍の来襲を告げ、一刻も猶予できない状況に陥った。

馬謖は山上に布陣するために自ら街亭の頂上に登った。王平は手勢5千を率いて頑として麓に陣をとり、二人の布陣を詳しく絵図に写して軍馬で孔明のところへ訴えた。

馬謖は布陣を終え、王平が我が命令に服従しないのを見て、凱旋の後には丞相の前に於て、彼の軍律違反の罪を問わなければならないと切齒扼腕した。

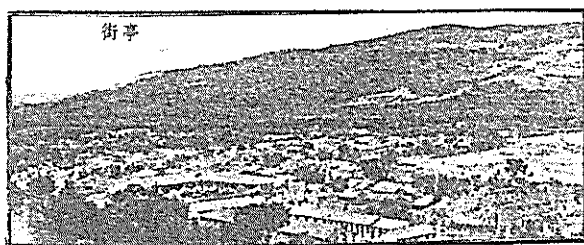
引き続いて味方の高翔や魏延の軍は、列柳城附近から街亭の後方に進出して陰に陽にこの要地を支援し、魏軍を牽制していることを知つた馬謖は、大磐石の構えをもって敵を逆落としにしてやると思ひ込んでいた。

この時、魏の大將・仲達は街亭には未だ一兵の蜀軍も来ておらないと考えていた。

ところが先鋒の軍から街亭には蜀旗が翻つているとの報告を受けた。

さすがは孔明の神眼は迅速だと暫く呆然としていた。

仲達は稍々本陣を動かして街亭、箕谷、斜谷の三方面の偵察を嚴重にした。(右は街亭の遠景)



やがて彼は一高地から蜀の陣容を眺めて啞然とした。それは街亭の軍が絶地に陣をとり、自ら敗北を待っている布陣だったからである。

仲達は街亭の大將が馬謖だと聞くと、千慮の一失というのであろうか、孔明でも人の用い方を誤ることがあるのかと喜んだ。街亭の山を守る蜀の大將は愚者、一撃で破ることが出来ようと自信を深めた。

仲達が山上の命脈を見たのは、軍中に無くてはならない「水」であった。その水を山上の蜀軍は山の下から兵に汲ませていたのである。

魏の先鋒軍の張郃は仲達の指示を受け、翌日の早朝、兵を率いて王平の軍の孤立を計った。即ち山上の馬謖の軍との連絡を遮断し、水汲みの通路を封鎖したのである。そして仲達も自ら魏の大軍を指揮して街亭山麓を包囲した。

馬謖は功をあせて小道を駆け下りて出撃した。多数の味方は序戦に勝利を収めたが、帰路は疲労困憊、再び山を登るために追撃してきた敵に痛撃された。その上その夜から水に窮してしまった。

水を断たれて愕然とした時には既に遅く、以後、奪回をはかる度に甚大な損害を繰り返した。日が経過するに従って山上の人馬は渴に苦しみ、水炊するのにも水なしの状態となり、兵は続々と敵に投降して行った。

魏軍はこの好機に乗じて総攻撃を開始すると、窮鼠猫を噛むように馬謖は山を下って打って出た。すると仲達は道を開いて通過させ、袋の鼠を取るように殲滅を計った。

街亭の後方に進駐していた蜀の魏延、高翔の軍が支援に出陣したが、途中で敵の伏兵に遭遇した。一方、山麓に布陣していた王平軍も戦闘に参加し、蜀・魏の将兵は入り乱れて大混戦となり、終日、何れが勝つか負けるか判らない状態であった。

街亭の激戦は帰するところ蜀の大敗に終わった。麓に陣をとった王平、後方から支援に出た魏延、高翔も懸命に馬謖の軍を援けた。しかし山上の本隊・馬謖軍は水を断たれて兵馬ともに疲れ果て、潰乱混走して魏軍の包囲下の餌食になってしまった。

このころ孔明の立場や胸中は如何であったであろうか。その前に王平の急使が持参した絵図を見て、馬謖の馬鹿者が、と孔明は当惑の眉をひそめた。

若輩の馬謖のやつは要道の守りを捨て、わざわざ山上の危地に陣取ってしまった。何たる愚だ。魏軍が麓を包囲すれば水が遮断されてそれ迄だ。いくら若輩であっても、このように浅慮の者とは思わなかったと、孔明は嘆いたと言う。

その後、仲達は15万の大軍を率いて3道から追撃に移り、蜀軍は漢中に向かって退却した。その退却の途中に於ける孔明の伏兵・奇襲の戦闘経過は省略する。

街亭を全作戦の最大の急所と考えていた孔明は、漢中に帰還してから軍法会議を開いた。先ず第一に王平に詳しく布陣の経過を聞き、魏延、高翔も呼び出して調査した。そして馬謖を連れ出させて尋問にかかった。

汝は幼い頃から兵法を読み、才は秀でてよく戦策を暗唱し、我もまた教えるのに努力を惜しまなかつた。然しながら今度の街亭の守りは、自分が丁寧に大綱を指示したに拘らず、遂に取り返しをつかない大過を犯したのは如何なる理由か。

あれほど街亭は我が軍の咽喉にも当るところ、一命をかけて重責を守れと、門出に強く言い渡したではないか。もう少し成長していたかと思つたが、案に相違して「たわけ者」であつたと孔明は眩^{ツツク}いた。

すると馬謖は「王平は何と言つたか知らないが、あれほどの魏の大兵が来襲したのは、誰が当ても防ぐことは困難だつたであろう」と答えた。

孔明は馬謖を睨めつけ、「お前は布陣の初めから王平の諫めを聞かず、我意を張って山頂を占領する愚を敢えてしたではないか」と叫んだ。

馬謖は兵法に「高キニ拠ッテ低キヲ視ルハ勢ヒスデニ破竹・・・」とありますと答えると、孔明は「馬鹿者」と大声をはり上げた。

孔明は「生兵法の言葉は正に汝にあるための言葉だ。今は何をか言はん。馬謖よ、お前の遺族は死後も孔明が必ず養つてやる。汝を死刑に処す」と言い渡した。

馬謖は大声を出して泣いた。丞相、私が悪うございました。私を斬ることが大義を正すことになるなら謖は死んでも恨みません。死を言い渡されてから彼は善性をあらわし、孔明も涙を流さずにおられなかった。

その時、成都から来た使いの武將は、なぜ馬謖のような有能な士を斬られるのか、国家の損失でありますと孔明を諫めた。すると孔明は孫子の一文を声高く叫んだ。

「勝ヲ天下ニ制スルモノハ法ヲ用イルコト明ラカナルニ依ル」と。四海がみな争い人と人との道が乱れている時、法を捨てて何をか世を正すことが出来るか。馬謖は惜しむべき者だからこそ、断じて斬らなければならないのだ。

間もなく変わり果てた馬謖の姿が孔明の前に供えられた。一目見た孔明は「許せ、罪は予の不明にあるものを」と、面を袖で蔽って泣き伏してしまった。

若い馬謖は39歳であつた。時は228年夏。

首は糸で脰に縫いつけ、棺に入れて厚く葬られ、遺族は長く孔明の保護により不自由のない生活を約束された。しかし孔明の心は決して慰められず、自責の念は自ら刃を身に加えたいほどであつたと言う。

成都に帰る使者の武將に一文を託して蜀帝・劉禪に奏上し、その全文は慚愧の文であつた。この度の大敗は自分の不明によることを深く詫び、国家の兵に多大の損害を与えた罪を謝し、次のように述べている。

「臣亮は三軍の最高に在りますために、誰も臣の罪を罰する者はありません。故に自分みづから臣職の位を三等おとし、丞相の職は宮中へ御返し申し上げます。願わくば暫く亮の寸命をお許し願います」、という意味のものであつた。

帝は大敗の報に胸を痛めたが孔明の奏上文を読み、「丞相は国の大老、一失があつたからといって、何で官位をおとして良いものか。もとの職に留まって更に士気を鼓舞し、国を治めよ」と伝えている。それから丞相の称号を廃し、以後は右將軍となつて兵を統帥した。

孔明が涙をふるって馬謖をつたことは、彼の一死を万生に活かしたものであつた。そのため敗軍の常とされる軍令規律は厳正に引き締められ、敵愾^{ガキ}心はいよいよ深まつたという。

以上は「泣いて馬謖を斬る」の概要である。南方討伐に於ける彼の意見具申を見ると、馬謖は確かに優れた兵法の持ち主であった。しかし私の拙い戦闘体験から考えれば、残念ながら彼は実戦の経験が乏しかったと言わなければならない。

戦闘は最終的には正攻法と奇計の配合の妙であり、それを如何に用いるかは実戦の経験が物を言う。即ち「兵は常なし」である。机上の学問だけでは地形の把握、戦場心理などの総合的判断は不可能であり、一に経験、二に経験、三も経験である。

9月7日 (土) 晴 宝鶏～天水 (下図参照)

私の人生に大きな感化を与えたのは戦闘という死の光景だったと、歴史に向かって大声で叫びたい。

豪雄無双の武将が疾風の枯草を巻く勢いで戦い、風にさらされた灰のように散って行った古戦場・宝鶏で一夜を明かした。

卵を投げて石垣かを崩すような光景が、險に浮んでは消え、消えては浮んでいた。

三国志演義を始め小説は英雄とか悲劇の主人公に「非人間性」を求めたがる。そうでなければドラマが成立しない。歴史を書いた人は普通の人間で神でも巨人でもない。そのように考えると古戦場の悶々とした感じも和らいできた。

夜が明けると残月は西に傾き、陽は山野を包んで朝靄を払い、渭水を煌々と照りつけていた。今年、宝鶏を訪れた日本人ツアーは2回目だという鳳凰大酒店を後にして、天水まで250km、所要時間約8時間のバスの旅に出発した。

宝鶏の街から渭水の流れに沿って西に進み、天水へ行くものと思っていたところ、バスは南の秦嶺山脈へと向った。四角形の三辺を廻るように迂回するのである。

兵器のように使われた渭水の橋を渡ると直ぐ山は幾重にも重なり、視界に入るものは原始林に覆われた自然の造形ばかりで、幽玄な美しさは眼を魅了していた。

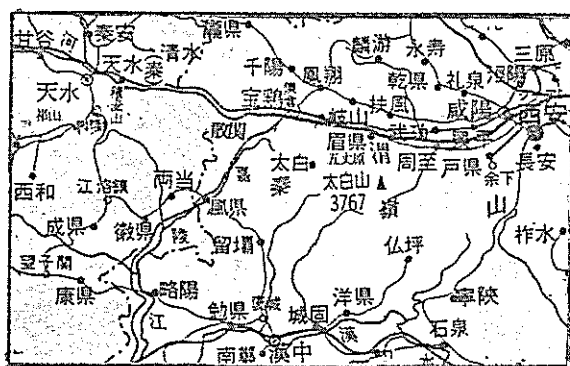
山の風景の裂け目から水が流れて涼風が走り、山間に満ちた清々しい空気の中に、次々と別次元の景色が展開してきた。緑が視覚を刺激して木や岩の匂いは臭覚を刺激し、普段なじみのない刺激が眠っていた神経を呼び起した。

散関を過ぎたかと思っていると、秦嶺の山並みは柱状節理の峻険な岸壁となり、屹立した光景は「一夫関に当れば万夫も開くなし」、と云った男性的な景観だ。

秦嶺の分水嶺を越えたのか溪谷の流れは南に向かい、地図を開くと所謂「蜀の栈道」(故道)を走っていた。唐の玄宗皇帝が巴蜀に蒙塵した街道である。

そればかりか、雲霞の蜀軍が怒濤のように進軍した栈道だ。殺伐悲壮、轟く馬蹄、閃く剣光、意気衝天の武人の姿は今はなく、哲学の道のように大自然の絶景となっていた。

鳳県(上の地図参照)の街に入った途端、三叉路に立った「蜀栈道」の石碑が網膜



に写った。蜀とは現在の四川省と陝西省の漢中を含めた地方を差し、「蜀道の難きは青天に上るより難し」と言われた難路である。

鳳県から右折して天水に通じる祁山街道（2頁地図参照）に入った。ヘアピン・カーブが続き、樹齢数百年の原始林が茂る山並みは、圧倒するような迫力で迫ってくる。この街道こそ蜀軍の関中へ進出した主要路であった。

当時、長安に出る道は他に幾本もあったが、孔明は何時も決まって祁山へと進んだ。彼は「祁山は長安の首」だと称して祁山街道から進軍していた。

隴西（甘肅省・天水から西方）の諸郡から長安へ行くには、必ず通らなければならない所が祁山であった。前は渭水に臨み、山手は箕谷・斜谷の峡谷、重畳の山に起伏する丘、谷々の自然は悉く絶好の楯である。左右からの伏兵による出撃に便利な地勢は稀で、孔明は祁山の地の利を考えていたのであろう。

鳳県を離れるにしたがつて兩岸は直聳した峰々に挟まれ、清冽な細流が見え隠れしており、そこに自然の彫刻が配合されて絶妙な芸術を展開していた。両当県から徽県に続く街道も、重なり合った峰が一秒一秒と表情を変え、迫ってくる景観は名山の中の名勝の感じだ。

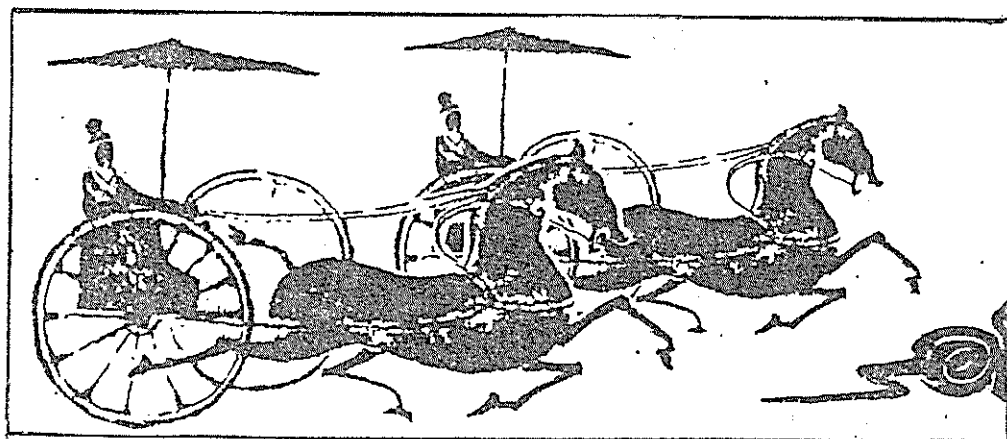
秦の始皇帝は不老不死の妙薬を蓬萊島に求めさせた。しかし都の近くの秦峰山脈を何故捜さなかったのであろうか。そのように思える深山幽谷を覗くと、たて続けに迫ってくる俯瞰は、爪の先まで全身を震い上らせた。

江洛鎮を過ぎた頃から血が凍るような危険は去り、山勢がなだらかになるにつれて心は和らいで来た。垂直な柱状節理の断崖も姿を消し、風によつて堆積した黄土の山肌が見え出した。

不運にも興隆（前頁地図参照）の町の手前でバスはパンクした。煙波測々三千里の彼方に来てまでパンクするとは、泣くに泣けず切齒扼腕するばかりだ。しかし人なつっこい運転手の懸命な努力によって、小1時間で修理は終わった。

歓声を上げたい心境で乗車し、蘇生したような思いで車窓を眺めると、優雅に流れる渭水が眼に留つた。漸く野戦攻防に明け暮れた天水の街も見えてきた。古来から水を制す者は国を制すと言われたが、そのために都は上流につくった。それが天水であった。

天水とは由緒ありげな名称ではないか。興味津々、誘われるように天水賓館の客となったものの、昼食抜ききの強行軍は9時間を経過していた。



麦積山石窟

時刻は午後4時を経過していた。パンクの影響がたたって麦積山観光の時間がなくなり、席の暖まる暇もなく出発を余儀なくされた。(麦積山は天水から45km)

天水を通る隴海線の鉄道は私の眼を引き付け、河南省を東西に走っていた沿線が懐かしく思い出される。

明日をも知らぬ身を叱咤して疾風のように馳駆し、肝腦地にまみれる決意で戦った昔が昨日のような気がする。

麦積山に通じる途中の村で添乗員は月餅を仕入れ、昼食の代用だと配布した。しかしながら飽食に慣れた我々の口は受け付けず、1個を口にする 것도 容易ではない。確かに中国人にとっては、月餅は中秋の明月には欠かすことの出来ないものであった。

昭和16年10月の黄河渡河作戦に於て、乾坤一擲の覚悟で河南・中牟城を攻略し、住民が残して行った月餅を鰹腹喰った味は忘れられない。

この時、ふと私の頭をよぎったのは、「食人之食者死人之事」の字句であった。即ち、人の食を喰った者はその人の為に死すと言う意味であり、孔明の軍の将兵も其のようであったことだろう。私はこの諺が好きだ。

爽やかな秋の陽差しの下に広がる山野は壮麗幽玄な世界に変貌し、現われてくる溪流は悠久の宇宙の観を呈してきた。突然バスは停車した。麦積山の管理人は勤務時間が終了し、行き違うバスに乗車していたからであった。

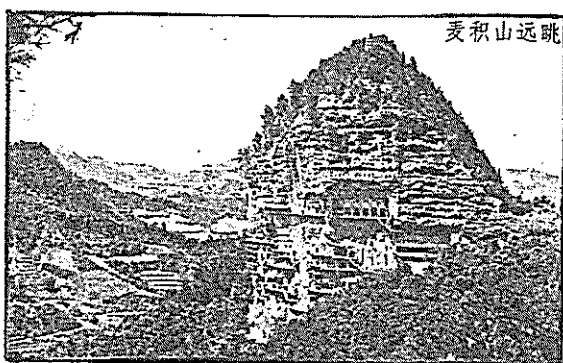
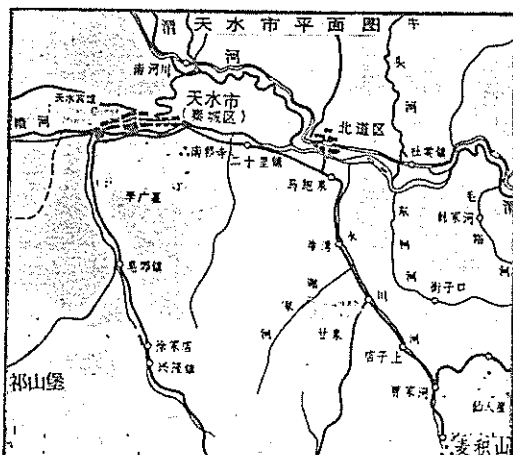
通訳が石窟寺院の拝観を懇願したところ、社会主義の国にしては珍しく管理人は快く承諾したが、私の導いてくれた僥倖だと感謝しなければならない。

次第に俗界を離れて行く峡谷は、現世を離脱した天資の道のようにであった。胸を膨らませて前方を注視していると、いきなり写真で見た麦積山石窟が私の目に飛び込んできた。(右は麦積山)

奥深い静寂の中に鳥のさえずる声が聞こえ、苔蒸した路傍の石にも美しさがあった。一方の竹藪には涼風が吹き通って想像もつかない幽邃の環境である。

谷間の翡翠色の水は静かに流れ、黒ずんだ大樹の葉ずれの音と相俟って、夢幻郷の感じだ。

夕暮の墨絵の世界を思わせる麦積山、気位が高く宙に浮いているようである。バスは石窟寺院の広場で停車して見上げると、天に聳える積石層の靈山は荒涼とした横縞の層が重なり合っていた。



瑞王寺という扁額を掲げた山門をくぐると数棟の建物があり、その後方に高さ142mの不思議な形の独立峰が、他を睥睨するように聳立していた。

これが大同の雲崗石窟、洛陽の竜門石窟、敦煌の莫高窟の三大石窟に次ぐ石窟寺院で、四大石窟を全て拝観した私の感動は格別であった。

歴史が息づく古刹の参道は昼なお暗く、痩せ我慢を出しながら、殿をつとめて登った。

宙に眸を据えると屹立した断崖に、隋代に彫られた高さ17mの三尊大仏が、摩崖の中にどっしりとした風格を現わした。（上は三尊大仏）

崖下から振り仰ぐと、大仏を中心に54の石窟が並び、全山では140もの石窟が存在するとの説明であった。

垂直な崖に造られた栈道に重い足を運んだ。麦積山石窟はこの崖という崖に掘られ、塑像は74体、壁画は千平方mということである。

石窟内には眉目秀麗な仏像や、柳の葉のような細い目の仏像などが祀られ、莞爾とした笑顔に惹き入れられるように眺めると、大自然の中に昇華して行く心境になって行く。これを仏教では菩薩行と言うのであろうか。（上の写真は断崖の栈道）

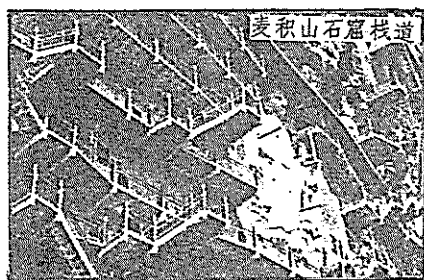
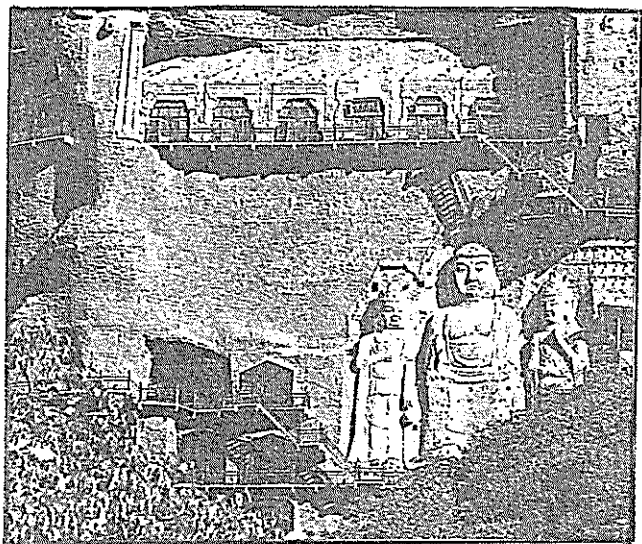
栈道を静かに歩きながら仏の美の魔術に取り付かれていたが、芸術は魂の食物と言われている通りであった。現実の時間さえ凝固してしまったような静謐の中に、真実の平和な楽土を感じさせていた。

このような仏像世界をつくり上げた人々に敬意を表して栈道を降りると、麦積山に夕闇が迫って美しい摩崖大仏の顔にも赤みがさし、一段と神々しさを増していた。

洛陽の竜門石窟や大同の雲崗石窟の仏像は、殆ど首が破壊されていたが、麦積山石窟は無傷で保存されている。その理由を案内人に質ねると、洛陽、大同の仏像は日本軍に壊されたとの返答であった。

何という無学な案内人であろうか。中共では悪は総て日本だと教えているのかもしれない。歴史を知らない彼等に憤慨を覚えたのは当然である。仏教国の日本人が仏像の破壊などは絶対に行わず、洛陽や大同の仏像破壊はイスラム教徒であったことは、明瞭に歴史が証明している。

心の落ち着く夕暮に忘我の心で石窟寺院の拝観が終わった。遙か彼方に落ちて行く血潮の滴るような紅い夕陽は、大陸ならではの景観である。その蒼茫として濃紫色の街道を天水に向かうと、次第に星群が黄土の野に細い光を降らせていた。



【麦積山石窟寺院の歴史の概要】

40年前までは麦積山は一般に知られていない石窟であった。1953年、石窟と摩崖仏、石窟内に塑像または石造の仏像や壁画・天井画があることが明らかになった。

様式からみて5世紀半ばの北魏時代に造営が始まり、西魏、北周、隋、唐、宋、元、清の時代に至るまで、造営と補修が続けられていた事が確認された。

唐代の都・長安に近い関係から、各時代の特色を代表する優れた作品が多く、西の敦煌、北の雲崗、東の竜門と並んで中国の四大石窟の一つである。

麦積山は麦積崖とも呼ばれている。その形が農家の麦を積んだ有様に似ているから、その名が付けられたと云う。

周囲の群峰に囲まれている中で、海拔1742mの麦積山だけが他を抜いている独立峰である。（上の写真は石窟の一部）

記録された歴史によると石窟は十六国の後秦（384～417）の時代に創建され、西秦の時、有名な禅僧玄高・曇弘がここで仏法を説き、僧侶は300人も居住したという。

北魏、西魏、北周の三朝の時に崖閣造りが大いに興り、多くの仏像が造られ、隋、唐、五代、宋、元、明、清の各時代にも絶えず開削修築されている。

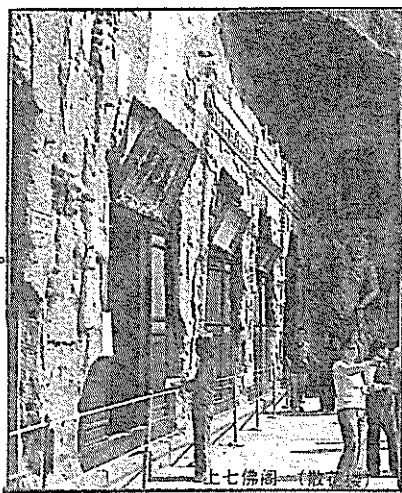
8世紀に大地震に遭遇したが、今でも窟龕（龕は仏壇）は194、泥塑・石刻は数千、壁画は1000平方m、北朝の崖閣8基が保存されて「東方彫塑陳列館」の称があり、中国著名な石窟寺である。

麦積山石窟は断崖絶壁に開削され、洞窟の中は「蜂の巣のように細かく」、栈道は「空をかけ雲を抜ける」ようで、その険しさは世にも稀な存在である。（右は石窟内の仏像の一部）

雨が多く湿気のために壁画は殆ど脱落していたが、塑像はほぼ完璧に保存され、泥質は新品の如く、堅さは焼陶のようであった。これらから古代芸術の匠工たちの優れた技巧を知ることができる。

芸術的造形の面では泥塑は生き生きとして優美、石彫は技芸に秀で、壁画は典雅、北朝の「秀骨清像」であろうと、隋・唐の「豊満円潤」であろうと親しみが自然に湧いてくる。

麦積山石窟は我々に生活の息抜きを与え、中原文化と一脈相通じるものを感じさせるものがある。（以上は麦積山石窟芸術研究所編纂の書を参考）



天水 (右下は天水市街)

麦積山石窟の見学を終えた一行は暮れて行く異国の街道を慕進し、疲労を覚えながら天水賓館の客となった。

ここに天水に就いて簡単に記載する。

天水は甘肅省の東南部に位置する古代文化の発祥地の一つである。古代は邽戎(西戎の一つ)の地で秦代は隴西郡、漢代は天水郡に属し、漢の武帝の時(前114年)に「天水」と呼ぶようになった。三国時代には秦州と称したこともある。

二千数百年の歴史をもつ天水には、6、7千年前の新石器時代の遺址が多く遺っており、人類の始祖的存在の「伏羲」を祀る廟もある。(右は伏羲廟)

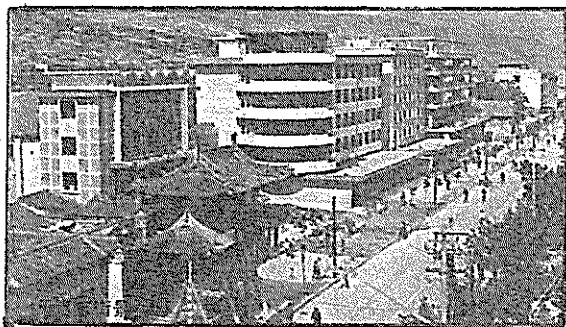
伏羲は中国神話の三皇の一人で蛇身人面、牛首虎尾、易の八卦を作り、民衆に漁獵の法を教えた伝説上の皇帝である。(天水地区博物館編纂書による)

天水はまた春秋時代の秦の発祥地と言われている。この附近の住民はチベット系の遊牧民族の「羌」の血が流れているのか、秦人は一般に慍悍で気概に富み、行動は敏活で勇猛果敢、事に臨んで躊躇しないと言う。その為に秦の始皇帝は天下を統一できたのであろうか。

渭水の河谷にある天水は長安と西域とを結ぶ交通上の要衝であった。2000年前の西方との経済文化交流のシルクロードは天水を通り、西遊記の玄奘三蔵も天水を目指して西安を発っている。

一方、天水は歴代兵家の必争の地でもあった。諸葛孔明が6度も祁山(天水西南)に出兵し、魏と交戦した古戦場である。又、唐代の詩人・杜甫も秦州(天水)に流され、詩20首を詠んだ中の「老樹」は有名だ。

悠久の古い歴史をもつ天水は伝説が豊富で文化は燦爛としていたが、現在では麦積山を除いて見るべきものはなく、黄土層の中にある一県庁所在地に過ぎない。



9月8日

(日) 晴

隴^{ロウ}を得て蜀を望む (天水～漢中街道)

渭水の朝靄はすっかり流れて、あるがままの自然がのびのびと太陽の光を独り占めしていた。今日は秦嶺山脈を越える500kmの蜀棧道を、漢中まで踏破しなければならず、古^{イ・シユ}の国に行くような今次紀行の最難関であった。(次頁地図参照)

8時に天水賓館を発ち、昨日来た街道を先ず風県に向かった。谷幅はぐんぐんと狭くなって山は深まって行く。溪谷に沿った僅かな平地を奪い合うような耕地に、早や農夫の姿が見えていた。

突然、旅行日程に掲載されている「祁山堡」の見学が中止となったと告げられた。

横道にそれる祁山堡は往復に3時間を要し、夕暮までに漢中に着くためには割愛しなければならないとの理由であった。

期待していた我々は愕然とうなだれ、暗澹とした胸は晴れるものではない。

日本の旅行社や中国国際旅行社の杜撰な計画に、呆れて開いた口が塞がらない。誠に不誠実な計画である。

祁山堡は四面が削り取ったような懸崖絶壁で、河畔に聳える自然の弧峰は難攻不落の城塞である。

これに着目した孔明は魏攻略の前進基地として、建興6年(228)に第1次の出陣をした。しかし街亭の一戦では馬謖が失策をおかし、止むなく漢中に引き上げている。

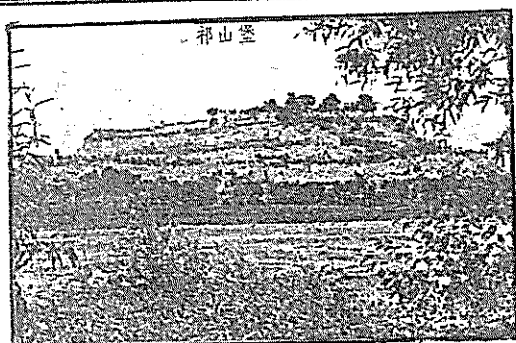
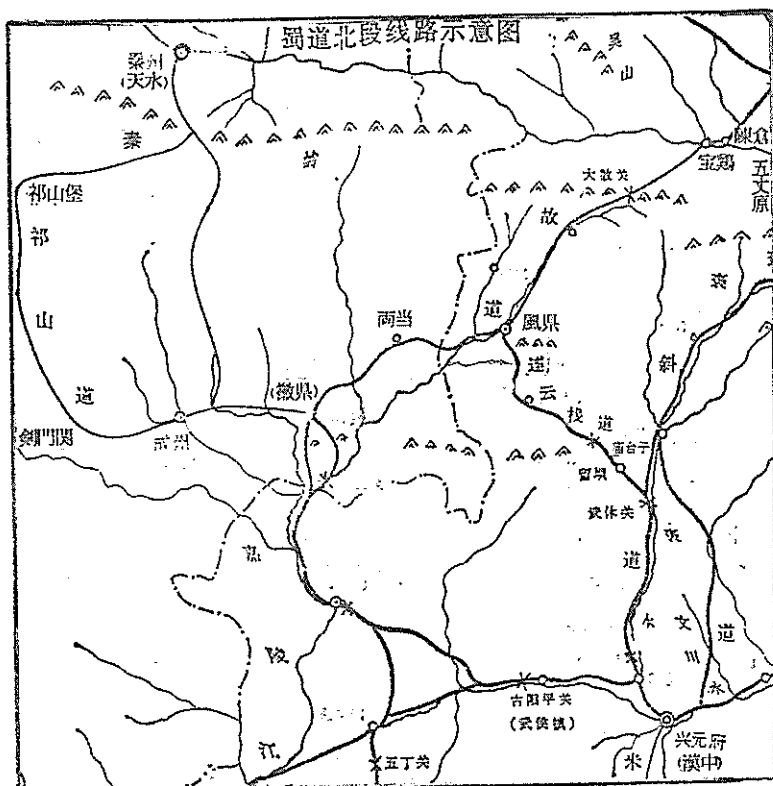
続く建興9年(231)に第2次の祁山出兵となり、天水附近で魏の張郃の軍と戦っている。祁山堡は即ち魏攻撃の最前線基地であった。(右は祁山堡の景観)

祁山堡にある孔明を祀る武侯祠は南北朝時代に創建され、現在の殿宇は清代の建築である。(天水地区博物館の資料を参考)

互いに戦って倒れる「二虎競食」の祁山堡に未練を残し、バスは徽県に向かった。生かすも殺すも運転手まかせの蜀棧道の崖道から、馬蹄の響きが聞こえるようで、時には鳥肌が立つ思いがしていた。懸軍万里の蜀軍は死のような静けさの棧道で、草を枕にしたのであろうか。

語り継がれる数々の蜀棧道物語の世界が続いている。ここには山の神、谷の神が棲んでいることは勿論、木や草や石ころまで精霊が宿っているようで、山河の色まで別世界の感じがしていた。

骨が鳴るような恐怖の山間崖道を走行すること4時間、バスは「徽県」の招待所で停車した。明時代の街並みが続く中から集まった群衆は、初めて見た日本人を物珍しそうに見詰め、瞬時にして我々を取り巻いていた。



招待所の食卓に並べられた佳肴は、山間僻地に似合わない珍品ばかりであった。兎の形に象った鶉の卵は格別で、今日まで宿泊した北京、西安、宝鶏、天水の各ホテルも顔負けである。珍客を迎えた料理人は手に撚りを掛けたことだろう。

徽県招待所の昼食に堪能した後、山の気品を美しく結晶させた栈道を再び走った。百彩の秦嶺の連峰を眺めていると、移りゆく山容に征服感を覚え、自分の歴史に惜しみなく刻んでいるようであった。

喧騒も人いきれもテレビもない標高2500mの山間の空気は、皮膚の細胞を引き締め、神々の棲む山の景観から何の物音も返ってこない。

バスは甘肅省の「両当県」を通過して陝西省に入った。悠々と寄せてくる玲瓏とした峰の間に、嘉陵江の清流が白い帯びのように流れている。その寂寞に包まれた街が「風県」であった。（前頁地図参照）

風県は祁山道と宝鶏に通じる故道が交差する要衝の地で、これから連雲栈道を通過して褒斜道に入り、漢中に通じている。街の中央の三叉路に「蜀栈道」と彫った石碑が立ち、朱塗りの二層の楼がシンボルマークのように建っていた。

（右の写真は三叉路に建つ楼閣）

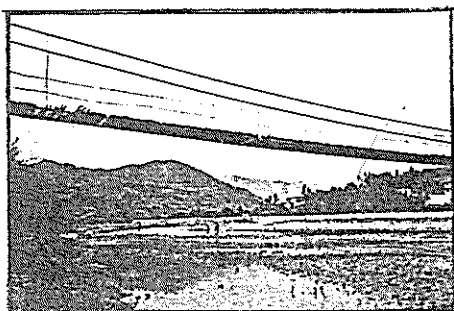
万里の長城、大運河、飛機連雲の蜀道の三つは、中国古代人の偉大な創造だと言われている。その蜀道には駱谷道、褒斜道、故道、祁山道、石牛道、子午道、連雲栈道などがあり、戦国時代の秦・漢時代から本格的に造られている。（2頁の地図参照）

「蜀道の難きは青天に上るより難し」と言われた街道は、諸葛孔明の進軍、補給路として使用されたばかりでない。殷末の周の武王時代から春秋戦国、秦漢、南北朝、隋唐、五代、宋、金、元、明時代の戦闘にも重要な役割を果たし、粒々辛苦の策を凝らしめた街道であった。

風県から連雲栈道（前頁地図参照）を南下するにつれて、男性的な黒褐色の岩肌に変わり、紀行家の終焉の地のような感じがしてきた。正に連雲の文字の通り、雲煙万里の彼方へと白刃の上を渡っている心境であった。

突然、視界が開けてきた。重慶で長江に合流する嘉陵江の上流である。河畔の草が揺れている様子は手招いているようで、雄大なパノラマの展開する風光は旅の財産であり、金では買えないものである。

運転手は奇人な人であった。バスを停めて一行を吊橋に案内し最先に渡って行った。青い空に緑の輝き、この盆地には恵まれた自然が息づいていた。



そして自然に深呼吸を忘れていた心を取り戻してくれたのであった。（上は吊橋）

流れのそばに涼を求めて腰をおろした。漢の高祖や軍師・孔明も耳にした河水の音は、囁々として耳に肌に心地よく響き、眼に見えないほどの微かな飛沫が気化熱を奪ひ、涼しくしてくれた。

一方、四周を取り巻く秦嶺山脈は雄大な原始の野生そのままで、創世時代の地球に

放り出されたような不思議な感動を与え、古代史への傾斜を一段と募らせた。

有限の肉体と精神を持った人間は、限られた世界の中に生まれ、死んで行く。人は誰でも定まった出会いがあり、定まった時代との出会いがある。動乱の世界に青年期を過ごした我々には、師表として仰ぐ孔明に心惹かれる旅の一時であった。

バスに揺られた疲労感を癒し、再びヘアピンカーブの連雲棧道を走った。清澄に静まりかえった溪谷美は地球の年輪であろうか、人跡未踏の昔の姿を所々に残している。

祁山堡の見学を中止したことに苦渋していたのか、運転手は褒斜棧道に入る手前の留坝県廟台子で停車した。ここは漢の「張良」の廟のある所で、願ってもないことであり、運転手の熱意に打たれながらの参観となった。

漢張留侯祠 (張良廟。漢中市に属す)

【張良の概略】 (右は廟の所在図)

張良は前漢の三傑の一人で策士として有名であり、漢室創建の元勳である。

張良 (? ~ 前186、字は子房) は秦に滅ぼされた戦国7雄の一つ、韓の宰相の子である。

彼は血氣盛んな頃、博浪沙 (河南省) で始皇帝を襲って失敗した。即ち、東夷の力士に重さ27kgの大鉄鎚を始皇帝に投げさせたが目標がはずれ、副車の車輪を打ち砕いただけに終わった。(前218)

前209年3月、秦を撃つために劉邦が2万の軍を率いて開封 (河南省) を攻めあぐんでいた時、張良は協力を申し入れた。歴史上ではこれが劉邦と張良との出会いである。

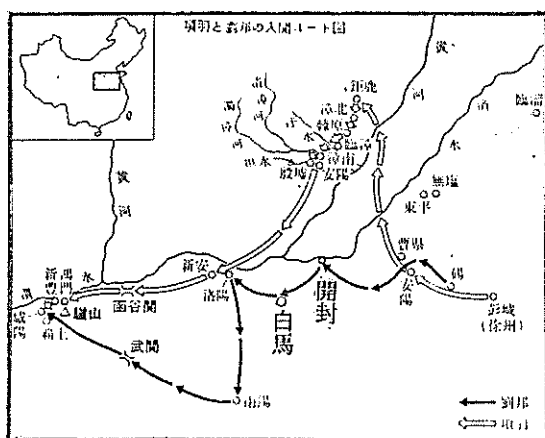
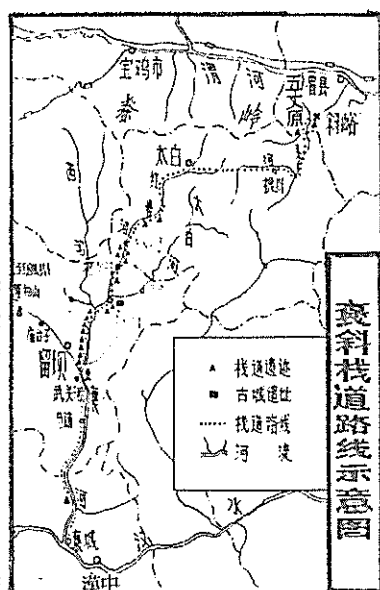
始皇帝の暗殺に失敗した張良が下邳 (江蘇省) に潜入していた頃、ある老人の無理難題を聞いてやったところ、その老人から「太公兵法」という兵法書を貰った。(周の文王の軍師・姜太公の兵法)

張良を幕下に加えた後の劉邦軍は見違えるように生氣を取り戻し、白馬、南陽、宛、(何れも河南省) を攻略し、あっという間に武関から関中に侵入した。

次に張良の活躍した場面は彼の有名な「鴻門の会」である。

函谷関を突破して関中に進撃した項羽軍は新豊台に展開し、項羽の本陣は台上的鴻門に設けられた。

劉邦軍が布陣していた霸上との距離は20kmである。関中を争う天下分け目の戦いが目睫の間にひかえたその夜、項羽の決意をにぶらせることが起った。(上は劉邦軍と項羽軍の進入路と鴻門の位置図)



項羽の叔父・項伯はかつて人を殺して刑吏に追われていたところを、張良に助けられたことがある。そこで項羽の決意を知った項伯は、今度は自分が張良の命を助ける番だと思い、その夜のうちに劉邦の陣営に忍び込んで張良に会い、項羽の計画を打ち明けて、すぐ何処かえ抜け出してくれと忠告した。

しかし劉邦を見捨てる気になれない張良は、項伯と二人で劉邦に会って事の次第を話すと、劉邦は項羽に会って釈明するから、明日の項羽軍の総攻撃を思いとどまってもらうよう、項伯から項羽に進言を依頼した。

項羽はあっさりと首肯したが、項羽の武將・范増は「千載一遇の天機をぶちこわした」と憤慨した。そして明日の酒盛りの席で劉邦を始末する決意を項羽に告げた。

翌日の「鴻門の会」では項羽の陪食者は范増と項伯、劉邦側は張良一人であった。やがて何度も祝盃があげられ宴酣となった時、范増は項羽に眼くばせしながら、腰にさげていた玦（古代の装飾品）を持ち上げて見せた。今こそ決心して劉邦を始末するようにと項羽に催促したのであった。

ところが項羽は知らぬ顔をして好物の豚肉を喰っていた。仕方なく2度3度と同じことを繰り返したが、項羽は肉を食べるのに余念がない。

范増はたまのかねて席を立ち、予めこういう時のためにと待機させていた項莊を会場に招き入れた。項莊は項羽の従兄弟で護衛隊長格の剣士である。

座興に私どもが剣の舞をお目にかけませうと、項莊は恭しく一礼して剣を抜き、旋回し始めた。動きが早くなるにつれて劉羽の席に近ずいて行く。劉邦の顔色が変わった。

その時、舞手が一人では面白くない。わしが相手をしようと言って項伯が席を立ち、剣を抜いて項莊と一緒に舞い始めた。項莊が劉邦の方へ突き進もうとすると、項伯はその前に立ち塞がり、その度に会場の緊張は高まった。

これは危ないと思った張良は席をはずして外に出ると、控えの間にいた樊噲^{はんが}を招きよせて耳打ちした。沛公（劉邦のこと）が危ない。貴公は中に入って沛公を護衛してくれ。しかし、こちらから先に出してはならないと諭した。

樊噲は会場に押し入ると、劉邦の後ろに仁王立ちになって項羽を睨みつけ、怒髪は天を衝いていた。さすがの項羽も度肝を抜かれ、何者だと張良にたずねた。張良は「沛公の沛鼎時代以来の部下の一人で樊噲と申す」と答えた。すると項羽は彼に大盃に酒をついで契めた。

樊噲は「我が沛公は関中を平定して以来、覇上に退いて咸陽宮を侵すことなく、項羽將軍の到着を待っていた。しかし今や沛公を除こうとしている」と叫んだ。

その間に劉邦はこっそり席をはずすと、樊噲もようやく楯を脇に置いて、与えられた椅子に坐った。

張良はそのさまを見ると、「主人は今日はひどく酔ったから、ひと足さきに覇上に帰らせて頂いた。どうかお許しのほど願ひ上げます」と述べ、項羽と范増にそれぞれ白璧（白い玉）と玉斗（玉で作ったひしゃく）を渡し、我々もこれで失礼すると会場を引き揚げた。

後日、劉邦は項羽から巴、蜀、漢中の3地を与えられて「漢王」となったが、この「鴻門の会」で難を逃れたのは張良の知謀の結果であった。

劉邦が封地に赴いたのは「漢」の元年（前206）で、南鄭（漢中）を都と定めた。

一方の項羽は彭城（徐州）に入ったものの、斉（山東省）の田栄が乱を起したので、席の暖まる暇もなく北に向わねばならなかった。

劉邦はこの知らせを聞くなり、鴻門の恥をすすぐのはこの時だと、全軍に出撃を命じた。関中を平定し中原に進撃して洛陽に入城したのは、漢の2年（前205）であった。そして項羽が義帝（楚王）を殺したのを知ると、諸侯に檄を飛ばして項羽征討の義兵を募った。

洛陽に終結した兵力は56万にのぼり、劉邦は大軍を率いて彭城に向った。このとき斉を攻撃していた項羽はその急報に接し、精兵3万の先頭に立って彭城に引返し、天下分け目の死闘が展開した。

戦闘は概ね項羽軍の方が優勢であったが、劉邦は河南省に後退して持久戦に持ち込むことができた。そして劉邦軍は穀倉地帯を確保し、項羽軍の後方にゲリラ戦を展開して補給路を遮断した。

そのうち、劉邦によって斉王に封じられた「韓信」が、大軍を率いて項羽軍を攻撃するため、斉を出発したとの急報が飛び込んできた。この状況では、項羽は劉邦の和睦の申し入れに応じない訳にはいかなかった。

天下を二分し、鴻溝【河南省・開封西方の河で現在の賈魯河（朱仙鎮附近）】以西を劉邦、以東を項羽の領地とするという条件で和睦が成立した。

劉邦が和睦の条件にしたがって西に帰ろうとすると、「張良」は次のように言つた。「漢はいま天下の大半を領有し、諸侯の大半は漢に心をよせている。これに反して項羽の戦力は底をつき、兵糧もつきかけている。即ち天は項羽を滅ぼそうとしているのに、この好機を見送ろうと言われるのか」

張良のこの時の進言は劉邦の心を動かした。そして項羽を降す最後の天機だと決戦を挑み、遂に垓下（安徽省）に於て項羽軍を撃破し、四面楚歌のうちに項羽は自決したのであった。

劉邦の勝利の最大の原因は、好機を看破した「張良の進言」である。後日、劉邦は張良の功をたたえ、「^{ハカレスト}籌策を帷帳の中にめぐらして、勝利を千里の外に決す男だ」と述べている。即ち張良は情報収集に優れた名幕僚であった。

【漢張良侯祠（張良廟）の参観】

張良は偉大な功績によって「留城侯」に封じられたから、「漢張留侯祠」と称されている。しかし一般には「張良廟」と呼んでいる。

この地一帯は中国早期に於ける道教活動の中心地で、張良自身も道教の信仰者であった。そのために「廟台子」という地名になったと言われている。（地図参照）

張良は漢王室を建てた後、漢中から110km、鳳凰から70kmのこの廟台子に隠居し、恵帝の6年に歿した。諡は文成である。

「漢張留侯祠」は東漢末期、張良の10代の孫の漢中王張魯が、張良を記念して紫柏山中に創建したものである。宋時代に重修したが、明時代には戦乱に遭遇して破壊された。現在の建物は清代の建築である。

秦嶺山脈の南にある紫柏山麓（老子廟もある）は紫柏が多く、海拔は2600m。その景観は「層巒疊翠」「如龍躍雲」とでも言うべきであろう。又、「如龍山」の別名をもち、漢江支流の褒河の源で溪水は淙々として流れている。

青い緑水の佳境に建つ張良廟の山門に進むと、古色古香の規模宏大な建築群が精巧な技芸を現わしていた。楼、殿、亭、閣が広大な境内を埋め、自然の佳景と渾然一体となって神仙境の感じがする。

正面の牌楼には「漢張留侯祠」の五個の大字が刻まれ、紫柏山「漢張留侯辟谷処」と書いた石碑が立っていた。

「辟谷」とは谷を開くという意味で、隠居の地を表わしている。（右の写真は牌楼）

石造りの大山門を通ると道教の靈官殿、王靈殿、三清殿があり、その両側に六角形の鐘楼と鼓楼が建ち、十方堂、雲水堂、東華殿、財神殿、観音殿などの壮観な建物が続いている。これらの建物内の壁画は素晴らしく、道教の影響を受けたものが多いようであった。

第二山門は張良大殿院前的大门で、鉄の獅子が据わり、古色蒼然とした青丹極彩の大殿堂は仙境神界の中に建っていた。

張良廟の中心をなす大殿院の正面に、黄金色に輝いた留侯の塑像一尊が端座し、その顔は総慧叡智の相がにじみ出ている。（右の写真は張良像）

拝殿には碑石が林立して扁額が所狭しと掲げられ、中でも我々に馴染みの深い「馮玉祥」の石刻は、一際目立っていた。張良の卓越した計謀により、項羽を追撃して垓下に滅ぼし、国家を統一して漢室を創建した偉業を称賛した文であった。

大殿院の右側は「北花園」で、その中の拝石亭に見えていた「英雄神仙」の石碑は、一段と我々の眼を惹き付けていた。

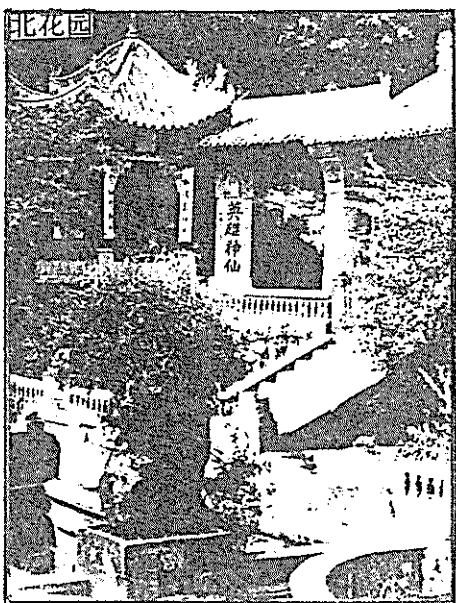
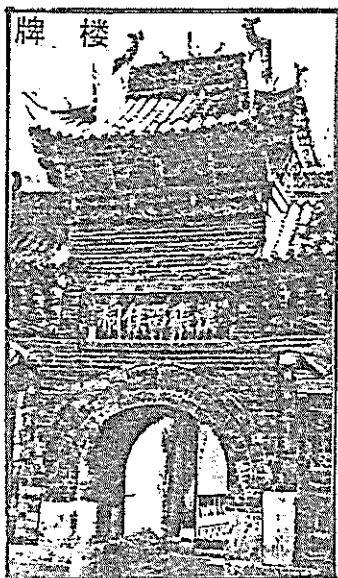
その他、多くの詩人が詠んだ碑が回廊に並び、絶賛の辞を贈っている。（右は北花園）

北花園の庭園は玲瓏で幽深の気が満ち溢れて紫柏、蒼松、翠竹、花樹が繁り、洗心池と呼ばれる池と假山（築山）とが相俟って、宮殿の風格を呈し別天地の感じがしていた。

大殿院の左側は南花園となっていて、湖中に立った小亭は清澄な水と紫竹に囲まれている。その他、湖亭閣、避谷亭、五雲楼などの楼閣には扁額や碑があり、旅人の憩いの場所となっていた。

廟の各建物の柱に掛けてある連詩、それに碑刻、摩崖石刻は数え切れず、功臣・張良留侯の徳と明智に感銘しながら、約1時間の拝観に終止符が打たれた。

張良がこの地に隠居した理由は、彼は生来、



多病の人で、「尊引不食谷」という古代人の一種の養生法を行うためであったと云う。即ち、大気を導いて体内に引き入れる道家の養生法の一つで、深呼吸をして心を鎮める方法のことであろう。（以上は張良廟文管所発行の書を一部参考）

張良廟～漢中（右下の連雲棧道～褒斜道の地図参照）

運命は自分で切り開くものだと言張良廟は語っていた。千古に朽ちない彼の業績は又、「死士」とは死を賭して一瞬に事を決すものだと、兵戦を事とする者に教示していた。

夢想だにできなかった張良廟の見学は人を観る慧眼を与え、「良禽は木を択んで棲み、賢臣は主人を選んで仕うと申す」ことを暗示していた。

教えられることの多かった張良廟を登って武休関に着くと、「対面古陳倉道」と書いた石碑が立っていた。風景を通り宝鶏に至る蜀棧道（故道）であったことを示していた。（対面とは前の意）

武休関から褒河に沿って漢中に通じる褒斜道を南下した。清冽な川の流れの兩岸は、地層がひっくり返ったような奇怪な岩層が続き、急斜面となって青い流れに雪崩込んでいる。（右は対面古陳倉道の石碑）

秦嶺の山並みは依然として柱状節理の峻険な岸壁が屹立し、針広混合の大原始林は突出した絶壁を囲み、恐怖感を与える多様な景観が車窓に迫ってくる。

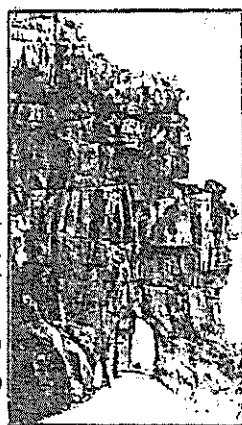
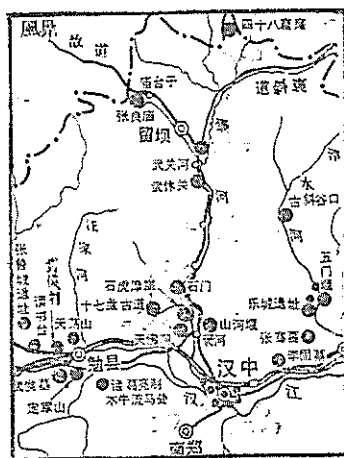
静寂幽水、山気が人に迫る巖々たる山間道、嘗て劉邦や孔明が烈々とした士気をもって駒を進め、露營の草枕とした歴史を想起すると、険峻な山も生命力の旺盛な大地のように思えてくる。

万丈の山、千仞の谷の蜀の棧道は天下の阻（嶮）であり、漢中まで100kmの行程だと思えば身の毛がよだつが、旅は新しいものとの出会いだと考えると、疲労感も忘れてしまうのであった。

卵を岩の上から転がすような危険な道を、バスは漢中平野に向かって坂を落ちるように走った。すると褒河の対岸の崖一帯に広がる、横に伸びた一条の白い帯が我々の眼を注視させた。これは昔の蜀棧道の痕跡であった。

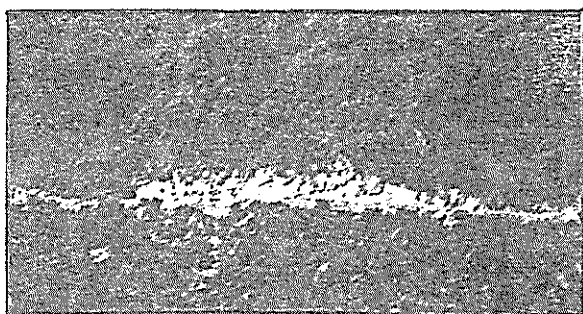
棧道は岸壁に穴を穿ってそこに丸太を差し込み、岸壁の外に出た部分に木の板を敷いた木橋で、2000年以上も前の人間が考案した智恵であった。しかし数千kmに及ぶ、「蜀道の難きは青天に上るより難し」（李白の詩）であることは間違いない。

私は6年前に重慶から長江を下った際、四川省（巴蜀の国）の巖々たる山壁の蜀棧道を歩いた。命の保証はなかったが、勿怪の体験だったと言わなければならない。（右は棧道の一景観）



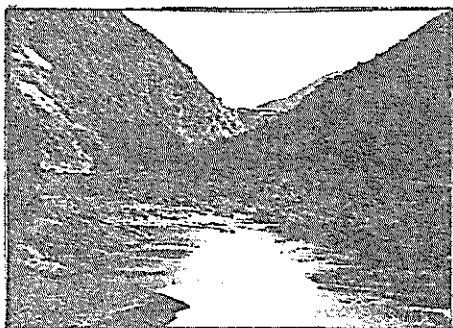
炎の色のように燃えている壮大な夕陽を眺めていると、その炎の中に惹き込まれそうな錯覚を覚えた。

一方、褒河の水際の一線を境に反射する風景は上半分は実景で、下半分は虚景である。虚実相互するものが一つになって澄んだ空間が生まれ、実に底しれぬ秘境・蜀栈道の美観であった。（右は古栈道の跡）



僅かな草木をのせた岩が白茶けた肌をさらし、抜け切った透明な空間に動いているのは風景だけであった。

危険な道路に拘らずトヨックを追い越すバスは、我々に腹わたをしぼるような思いをさせていたが、漢中平野が見え出した途端、胸を撫で下ろしたのである。



漢の高祖（劉邦）や諸葛孔明の故地・漢中は、我々にとっては五丈原に次ぐ憧憬の地であり、狂気した歓喜は私の胸の中に渦巻いていた。（上の写真は褒河の夕暮）

背筋が冷たくなるような衝動に駆られた懸崖道、血の気を失うようなバスの追い越しとも別れ、漢中の市街に入って予定された漢中賓館に安着した。

長かった旅の疲れを一刻も早く癒したい一心であったが、我々のホテルは漢中郊外40kmの南湖賓館に変更になった。一直線に南に伸びた街路樹は行く手を覆って暗く、西に傾いた残照の明かりだけが微かに見えるだけであった。

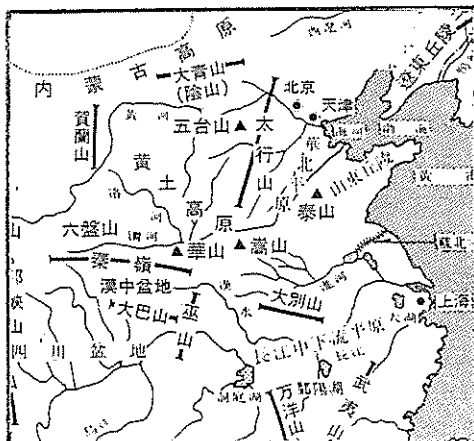
静まり返った闇の帳に包まれた街道は漆黒の世界に変わり、一物も眼に写らない闇黒街道を30分ばかり走り、漸く21時に南湖賓館に到着した。500kmの蜀栈道を走行すること13時間、憧れの旅とは言え誠に御苦労なことであった。

漢中の概要

漢中市は古名を南鄭県と称した。南鄭の名称の由来は「鄭」の桓公（前806～771）が死亡し、南の方に葬ったからであった。

漢中の名称の由来は、漢口（現在の武漢市）で長江に合流する「漢水」の中流に位置しているからであった。

漢の高祖が未だ劉邦であったころ、項羽から漢王に封じられた後、項羽を垓下に滅ぼして王朝を建てたとき、漢中の「漢」をとって国名としたのである。



「漢」は「天漢」から由来している。
「天漢」とは天の中央に多数の星が集まり、河のように見えるもので吉兆を表わし、所謂、天の川、銀河で世界の中心を意味している。

漢の国は前漢、後漢、蜀漢の三朝に別れ、26帝440年も続いた大帝国であり、中国本土を漢（から、もろこし、支那）とも呼んだのであった。

文字を統一して漢字、漢文、漢土、漢語、漢詩、漢学等とした由来も、漢中が発祥地とも言える。漢の高祖の功績は大と言わなければならない。（上は漢中の位置図）

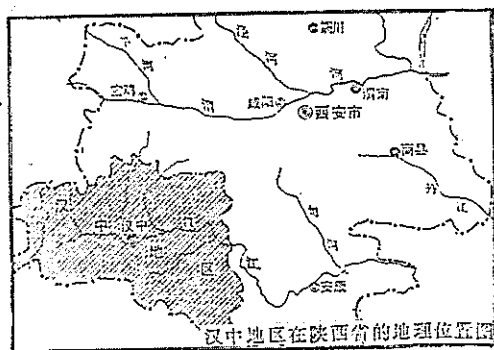
漢中は北の秦嶺山脈と南の大巴山脈の間に広がる漢中盆地に在り、漢水（漢江）と嘉陵江の両大河流域の沖積層のため、土地は肥沃で豊富な自然資源と鉱産、林産に恵まれ、住民の才智と勤労による精神的財産も優れていると言われる。（前頁要図参照）

悠久な歴史をもつ漢中は60万年前に人類の祖先が住み、人類文明史上に光輝ある一頁を遺している。早くも夏の時代に漢中は梁州に属し、西周（前1122?～前771）時代に梁州と雍州に入り、東周、春秋時代に秦、後に蜀に入り、戦国時代に秦に帰し、秦の26年（前451）に南鄭城が築かれている。

秦の恵文王13年（前312）に秦は漢中を攻撃して漢中郡を置き、その後に項羽を滅ぼした劉邦は漢王となり、巴（重慶）、蜀（成都）、漢中を掌中に入れて南鄭に都を置いた。両漢（前漢、後漢）の時期は益州（四川）の所轄となる。

三国時代も蜀漢の地に属して益州の所轄、唐時代は漢中郡となったが、唐の興元年間（784）に興元府となり、この紀行文中の地図にも興元府と記載されている。

降って明、清時代には漢中府、民国2年（1913）には漢中道、開放後は漢中市となり、現在の人口は350万（市街地区は43万）である。



【漢中は帝王の興業の処】

西周が興って南方の楚（前740?～前223、長江流域）と衝突し、漢中は必争の地となった。周の昭王は楚に遠征して敗れ漢中で死亡している。（史書）

秦の恵王のとき楚と丹陽で戦って勝利を収め、この地に漢中郡を置き巴、蜀を結合して楚の脅威を除いている。

秦末の楚漢の争いでは、漢の劉邦は漢中を基地として勝利を収め、その後に帝業を達成している。漢の末期に張魯が王となって漢中を治めること20余年に及んだが、劉備玄德が漢中に進出して王し称し、蜀漢政権を樹立した。

その後の呉、魏、蜀の三国鼎立の局面では、諸葛亮孔明が建興5年（227）3月、北伐軍を率いて成都から漢中に進駐し前進基地とした。そして兵と食糧を集めて8年の長期にわたり魏と戦ったが、遂に五丈原で病没した。

南北朝時代（420～589）には再び漢中は争奪の地となり、南宋（1127～1279）時代にも漢中は金（国名）に反抗する重要拠点となった。明朝の洪武13年（1380）には白蓮教祖の群衆蜂起があり、清末の太平天国の乱でも戦場となっている。以上の歴史から見ても漢中は帝王の興業の地と言えるだろう。

【漢中は秦、隴、巴、蜀の交通の要衝】

漢中は北に秦嶺、南に大巴という難険な地理的条件の所である。その懸崖峭壁、高山險谷は行く人に言語に絶した辛苦を与えた。それを唐の詩人、李白は次ぎのように詠んでいる。

「蜀道難、難于上青天」即ち、「蜀道の難は青天に上るより難し」と。（右は蜀栈道）

このような道を我々は「隴を得て蜀を望む」（欲ばりの意）ようにして漢中に辿り着いた。後漢書によると、後漢の祖・光武帝が隴（甘肅省）を平定したのち、更に蜀を欲しがったという故事から、一つの望みを達しても更に大きな望みを抱くことの譬となった。（望蜀）

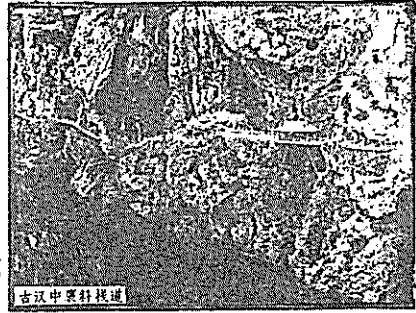
現在は道路も改良されてバスの運行も可能になったとはいえ、蜀栈道を踏破したことには意義があると思う。

史記によると周の貞王の16年（前453）、戦国時代以前にも人々が褒斜道を通過している。その後、先秦（前361年前後）のころ断崖絶壁に栈道をつくり、関中（渭水平野）から漢中に往来していた。

これが褒河から斜水に通じる「褒斜道」、子午河の「子午道」、水谷を通過して鳳泉から陳倉（宝鸡）に入る故道（陳倉道）、駱谷水に沿った駱道などである。

以上のような関係から漢中は旧石器時代の文化遺跡も多く、帝王建業の地として重要な所であった。また劉邦、孔明、張良などの軍事的な争奪の地となった外、シルクロードの開拓者・「張騫」も漢中の出身であった。

天府の国と謂れた漢中の見学は興味津々と言わなければならない。



古漢中褒斜栈道

9月9日

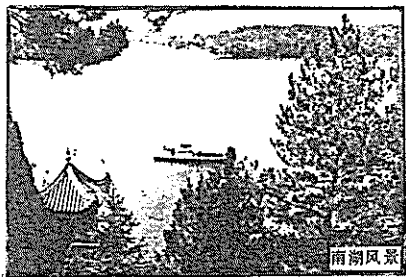
(月) 晴

漢中見学

重陽の節句の夜明けを南湖賓館で迎えた。漢中の天地は正気浼刺としており、朝の晴れわたった空から星影が一つ二つと消えて行った。

節句のためか朝食は小豆粥に月餅、それに中国では珍しくミルクのサービスがあり、大いに漢中を印象付けていた。

東の空が淡々と明けていく中で冷気を胸に深く吸い込むと、静寂を切り裂くような鳥の聲が窸して空には雲一つなかった。次第に朝日は南湖を照らし出し、豊富な歴史の街・漢中に対する期待と歓喜が溢れ出ていた。（上の写真は南湖の風景）



南湖風景

「聖人は天の道を法則とし、賢人は地の利を手本とし、智者は古人を規範とする」と言われている。しかし戦乱の時代の聖、賢、智たちは、自分の意志を超えて互いに殺し合う歴史の繰り返しであった。その脈々と流れる漢中の歴史から、何か一つ身に付けたいと考えながら観光に出発した。

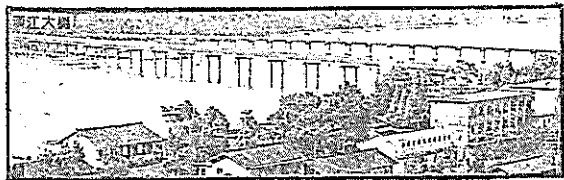
昨夜通った漆黒の街道は水稻が一面に色づき、地味が肥えて産物の豊かな天府の国

の様相を現わしていた。田園地帯は矢張り田舎の感じが強く、交通の便と相俟って1986年に漸く開放された理由も首肯けるようである。

漢江の流れに沿って発達した周時代の南鄭、秦時代の漢中の街は、渭水と漢江地方の長所を取り入れた建築であった。

漢江には漢中から宝鶏に通じる漢宝路の大橋がかかり、バスは橋を渡って西の「勉県」へと向かった。

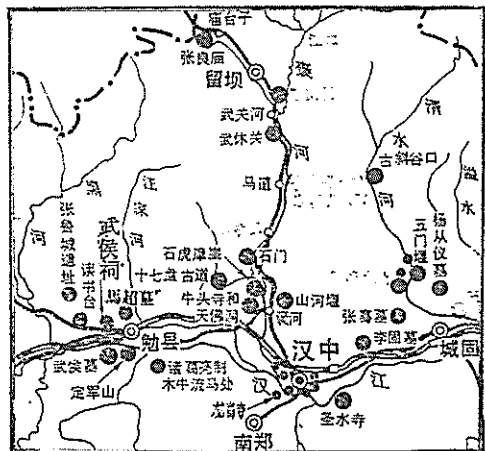
(右は漢江大橋)



再び広大な稲田が広がっていることを考えると、諸葛孔明が食糧の確保に着眼した慧眼が窺えてくる。(右は漢中、勉県附近の地図)

稔りの街道に「牛肉泡」の看板が眼に止まった。これは牛肉の中に月餅を浮かべたもので、近く中秋の明月を迎えるための宣伝であろうか。商魂たくましい光景である。

柔らかな早朝の陽光は満遍なく降り注ぎ、冷たい空気はしつとりと低く這い、どの緑も固有の色に鈍く輝いていた。ポプラやブラタナスの大樹は、繁った枝を左右に伸ばして空を覆い、車中で独り想像の翼を広げていた。



突然バスは左手にある孤立した亭の前で停車した。そこには「木牛流馬処碑」と彫った石碑が立ち、20mほど奥まった所に見える碑亭は渭水の古戦場を想い出させた。

木牛流馬・連弩の新兵器 (下は木牛流馬の碑亭)

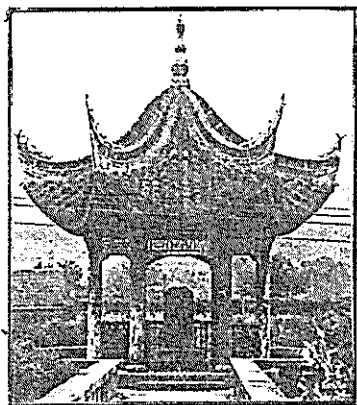
石碑が立っているのは勉県の黄沙鎮という村である。227年、孔明が魏を討つために漢中に駐屯して定軍山で兵を訓練した。しかし北伐の進路の栈道は輸送の困難を極めたため、その難題の解決策に迫られていた。

孔明は兵を訓練するばかりでなく黄沙鎮で農業に従事させる一方、機械工具の徹底研究に励んだ。そして木牛流馬の輸送器を完成させた所が黄沙鎮だと伝えられている。しかし歴史上では詳細な記載はない。

後世のナポレオンは「戦争は補給なり」と明言したが、1800年前の古代の戦争でも同様であった。ここで話を孔明が祁山に出陣した戦闘に遡らなければならない。

漢中滞在中、孔明は軍の機構から整備、兵器に大改善を加えた。例えば突撃や速度を必要とするために散騎隊、武騎隊を新たに編成し、馬に練達した将校をその部隊に配属した。

また従来、弩手として位置や活用も低かった者に、新たに孔明が発明した威力ある新兵器を与え、独立した一部隊を編成している。これを「連弩士」と呼んでいた。



連弩というのは、全く孔明が発明した新兵器で、鉄箭8寸ほどの短い矢が、1弩を放つと10矢づつ飛ぶものであった。この大連弩を飛槍弦とも云う。(右は復元図)

これは1槍よく鉄甲を貫透し、5人掛かりで弦を引いて放ったが、別に石の弾を撃つ石弩もあったようだ。

補給を任務とする輜重(軍の輸送隊のこと)には、「木牛流馬」と称す特殊な運搬車が考案され、兵の鉄帽から鎧に至るまで改良された。(鉄は春秋時代に早や使用している)

そのほか孔明の智恵囊から出たと伝えられている武器は数かぎりない。何よりも大きかつたものは、彼によって考案された兵学の進歩であった。長江の三峡で使用した「八陣の法」は特に有名で、私も長江下りで学んだことがある。

孔明が3年の歳月をかけて準備し、6度目の祁山へ出陣した時の話である。敵の魏軍は一にも守備、二にも守備、ただ其処を守ることを第一として、戦うことをしなかつた。

その間に孔明は渭水の葫芦谷(眉県)に千人の兵を入れ、谷の中で土木作業をさせていた。この谷は瓢箪形の盆地で大山に囲まれ、一方に細い小道があるだけで、僅かに1騎1列が通れるに過ぎなかった。孔明は毎日そこへ出掛けて指図した。

魏軍が敢えて戦わず、長期戦を計画していた真意は、明らかに蜀軍の食糧の枯渇を待ったのは言うまでもない。このとき部下が此の点を憂いて屢々孔明に次ぎのように訴えた。

「いま蜀本国から輸送されてきた兵糧は、剣門関(2頁地図参照)まで来て山と積まれている状況ですが、剣門から祁山までは悪路と山岳が続いて牛馬はたおれ、車はつぶれて輸送は困難です。この分では忽ち兵糧が詰まってくると案じられます」と。

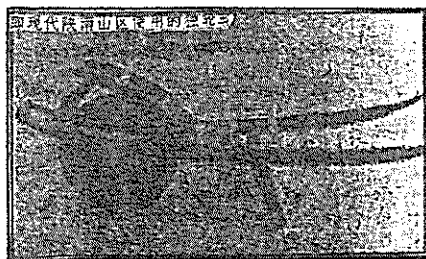
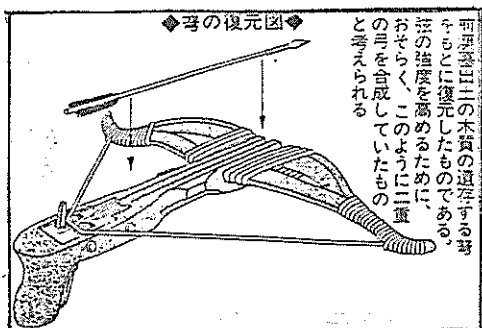
第2次祁山出陣以来、第3次第4次と戦いを重ねる毎に、常に蜀軍の悩みとされていたのは食糧輸送の問題であった。

約3年の休戦に農業に励み、兵士を休め、曾て見ない大規模な兵力と装備を整えて、6度目の祁山へ出た孔明が、再びその苦しい経験を繰り返すとは思われない。その点は近いうちに解決する。

心配するなと部下たちに告げている。(上は孔明の発明した木牛流馬と現在の1輪車)

やがて蜀軍の諸将は或る日、孔明に案内されて葫芦谷の内に入ることが許された。ここ1ヶ月も前から何を工事しているのかと、前から不思議に思っていた諸将は、その谷の内が何時の間にか大産業工場と化しているのを見て、みな瞠目した。

何が製造されているのかと云えば、孔明の考案した「木牛」「流馬」と呼ぶ2種類の輸送機であった。これに似た怪獣型戦車は、曾て南蛮遠征の時に敵陣の前に並べられたことがある。



それを輸送専用の輜重車に改造したもので、第2次、第3次出兵の時にも少し試用したが効果は少なかった。その後の3年の休戦中に孔明が更に鋭意工夫を加え、ここに大量生産にかかる自信を持つに至った新兵器であった。

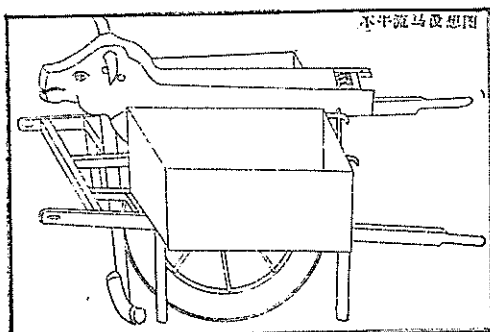
動物の牛馬を使役すれば牛馬の食糧を要し、人間の手間がかかる上に斃死悪病に付^{タイ}れる惧れもあるが、木牛流馬であれば大量の物資を積み、しかも喰うこともなく疲れることも知らない。

既に無数に製造された実物を示し、孔明は設計図に就いて色々な説明を加えて諸将に話した。

木牛流馬とは一体どんな構造の物か。後世に伝わる寸法や部分的な解説だけでは、概念を知るだけでも困難である。前頁の中段のものは漢中の武侯祠の壁画の木牛流馬、下段は現在使用されている一輪車である。

「漢晋春秋」「亮集」等に記載されているものを総合してみると、大略、次ぎのような構造と効用のものであることが推察される。

木牛とは四角な腹、曲った頭、四本の脚、屈折自在、機動して歩行する。頭は頸の中から出て、多くのものを載せられるが、速度は遅い。



大量運搬に適しているが日常に使うことは難しい。1頭が軽い物を運搬する時は、1日数十里（中国の1里は約400m）を行けるが、群となつて行動する時は20里（8000m）に留まる。

（上の図は陝西省人民美術出版社発行の木牛流馬の予想図）

何れにしても其の機動力の科学的構造は明らかではないが、実用に供されて効果のあったことは疑れていないようである。

この輜重機が沢山製造され出すと、蜀軍は続々と木牛流馬隊を繰り出し、剣門関から祁山へと忽ち大量の兵糧の運搬を開始した。蜀兵はその量を眺めただけで勇氣百倍し、反対に魏の持久作戦は根本的に其の意義を覆えされたのであつた。

木牛流馬を使用した戦闘の一例を述べてみる。

魏軍は斜谷の道に兵を伏せて蜀軍の木牛流馬を数台捕獲し、それを参考にして数千台の木牛流馬を製造した。それを聞いた孔明は、それは思うつぼだ。近日のうちに大量の兵糧が、魏から蜀に贈られてくるだろうと期待した。

孔明は千騎の兵を魏の兵に変装させて戦場に送り、魏の木牛流馬を待ち伏せして襲撃させた。そして捕獲した木牛流馬をそこに残置して引き返したのであつた。

そのとき孔明は木牛流馬の口を開いて、舌に仕掛けてあるネズを右に回転し、みな其処に捨てて帰らせた。敵はそれを奪い返したから追撃はしないのは当然である。

一方の蜀軍500の兵はみな鬼面をかぶり、黒衣に素足、手に剣を引っ提げ、腰の瓢箪に火薬をつめこみ、敵が木牛流馬を曳いて返らんとする時に襲った。しかし魏の兵が動かそうとしても木牛流馬は動かなかつた。

その後、蜀兵は木牛流馬の口の中のネズを左に回転させ、兵糧満載り木牛流馬を我れらの本陣である祁山に曳いて変え帰った。

口の中のネズは右に回すと木牛流馬は動かず、左に回転すると動く仕掛けになつて

いた。それを知らない魏軍は木牛流馬をそこに捨てて帰るより策がなかったのである。

孔明が戦闘体験から苦心して研究発案したこの輸送車は、一種の牛馬の形に似ていたから「木牛流馬」の名称が付いた。そして之を記念して此の勉県の黄沙鎮に碑亭を建てた。(1866年)

人間と他の動物の異なるのは道具を使うか否かであろう。

我々が戦った第2次大戦を回顧する時、私の知るところでは日本軍には兵器の開発はなく、精神的要素のみ強調して補給を全く考えず、死を美化した万歳突撃を最大の兵法とした。

諸葛亮孔明は1800年前の昔、すでに人命を尊重して兵器の改良発明から補給を重視した。企業は人なりと言われるが、生と死の戦闘も人である。即ち指導者の問題で、戦闘は尋常な智、尋常な勇では如何にもならない。

「士とは仕である」即ち仕は「つとめ」の意で、我々が従軍した時代の上層部は、孔明のように「つとめ」を自覚していたのであろうか。装備の劣性は裸で戦うのと変わらないと言わなければならない。

武侯墓 (勉県・旧名は汚県)

如何に犠牲を少なくして最大の戦果を収めるかと、平戦両時を問わず脳中をめぐらしていた孔明の「経天緯地」(天下を治め、天地を経緯すること)というか、「経文緯武」(文武両道を兼ね備える)というか、このような玉石は天下に少ないと感激を新たに、木牛流馬の碑亭を去った。

漂渺とした漢水の大河に沿った街道を西に進むと、「天、予を喪ぼせり」と陶醉したように死んだ孔明を祀る武侯墓であった。

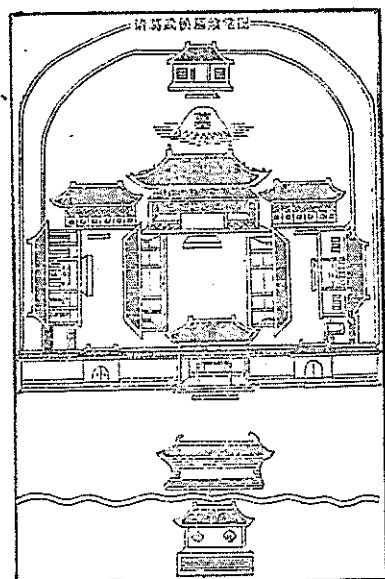
武侯墓は定軍山の西方約1000m、漢水の南4kmの小さい円形の丘の上にあり、鬱蒼とした古木に囲まれて神々しい雰囲気包まれていた。

劉備玄德が蜀漢の国を建国した時の功により、孔明は生前に「忠武侯」と諡されていたから、人々は孔明の墳墓を「忠武侯」と呼んでいる。

湖北省の「隆中」の草庵(16頁地図参照)で、雲を待つ臥竜のようだとされていた孔明は、劉備から三顧の礼をもって迎えられた。三分鼎立(天下を魏、呉、蜀に三分する)を称えて漢室の復興に尽くした彼は、軍師となり丞相となった。

劉備亡きあとは後主の劉禅に仕えて魏と戦うこと6度に及び、234年8月、遂に五丈原に於て孔明は陣歿したのであった。

(上は武侯墓の平面図、下は武侯墓の大門)



武侯墓の扁額を掲げた大門（前頁写真）の前には照壁が設けられ、一条の小溪が墳墓の地を囲むように蜿蜒と流れていた。

大門の内側には「醇儒望重」（醇儒＝純粋に儒教に忠実な学者、望重＝尊崇）、「出将入相」（出ては将帥、入りては丞相、才は文武を兼備）、「名垂宇宙」、「躬沐聖眷」（躬＝自ら、沐＝恵みを受ける、聖＝徳の高い人で孔明を指す、眷＝関心。即ち孔明の恩沢をけるという意）などの扁額が掲げられていた。

境内に繁った漢柏の古樹は、名状しがたい落ち着いた歴史の重みを感じさせ、孔明の精神が不朽に垂れていた。

大門を進んだ正面に建つ「大殿院」（献殿）は、宵を覆うばかりの大樹が林立する中に鎮座しており、鉄の鐘が据えられていた。（右上の写真）

殿の前には「三代遺才」（三代＝夏・殷・周の3王朝、即ち孔明は夏・殷・周以来の才能を留めた人物）、「経済如生」（経済＝経世済民、如生＝生前同様。孔明の姿は生前同様で経世済民、万物を助けている意）などの扁額が上がっていた。

左右の壁面には「桃園三結義」（関羽と張飛と義を結んだ意）、「三顧茅廬」（三顧の礼で迎えられたこと）など、孔明の一代記が描かれていた。

荘厳な殿宇の中に脚を運ぶと、高く掲げられた「功蓋三分」、「万古雲宵」（雲宵＝天空、即ち孔明の偉業は万古に天のように高く崇拜される意）の扁額の下に、「六韜」（古代の兵書）を持った諸葛亮の塑像が端座し、両側に関興（関羽の子）と、張苞（張飛の子）の像が侍立していた。それは正に神彩奕々として民衆の精神的煥発の姿であった。（右中の写真）

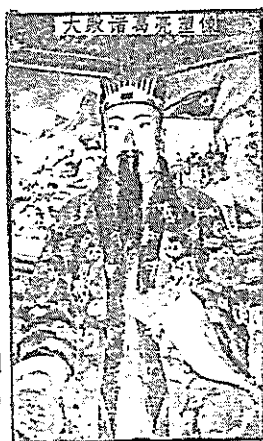
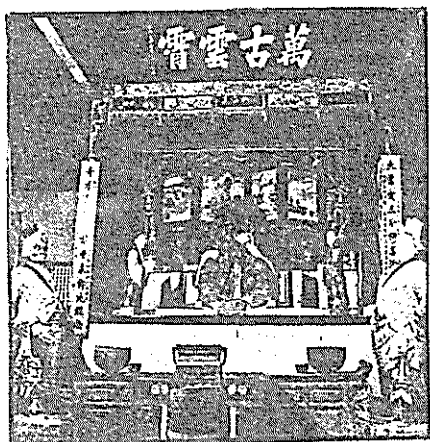
大殿院の両側の建物には多くの碑石が配列されているほか、諸葛亮ゆかりの物が陳列され、多幅な聯詩は蜀漢統一を成し遂げた大偉業を称えているものである。

大殿院を去るに当って私の眼を引き付けたのは、「内敬外直」（内敬＝内心謹慎して厳肅に怠らず、外直＝外面は正直・気壮）と、「永沐神庥」（永沐＝永遠に受ける、神＝神霊、庥＝庇護、即ち永遠に孔明の神霊の庇護を受ける意）の扁額で、襟を正て武侯墓に参拝したことに満足感を感じたのであった。（右下の写真は孔明像）

大殿院後方の翠柏の林の中に祀られた大墳墓が、臥龍といわれ軍師と仰がれた孔明の墓塚であつた。その武、その才、その勇、その略を偲び、拝跪して額ずきたい心は全身を震わし、歴史の重みを感じながら拝礼を続けていた。

斗形の墓塚は高さ約5 m、方円は約60 m、東西に向かっている塚の頭は西、脚は東に向き、「永懷西蜀、興復漢室」の意を表わしている。敬仰措く能はざる人物は、死してなお斯くの如きかと感泣するばかりであった。

（次頁の上の写真は孔明の墓塚である）



墓塚の両側には直径1m、高さ20mほどの2本の桂が、墓を覆って風雨をしのご、人々はこの双桂を「護墓双桂」と呼んでいた。(右が墓塚)

蓋世の英雄・諸葛孔明の人間性、その靈魂を我々日本人まで感じずにおられなかったのである。

墓塚の前に建っている小亭・「墓亭」には、「漢丞相諸葛武侯之墓」(明朝の万曆22年、1594年建立)と彫られた墓碑が立ち、その右側に「墓誡」の石碑が側立していた。(右は墓亭)

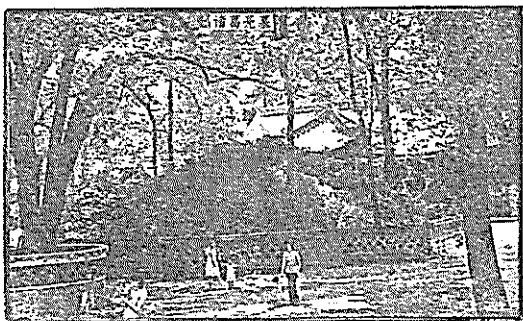
墓塚の後方に建つ「寝宮」正面に掲げられた「先生之風」の扁額は、燦然として金色に輝き、両側の柱に書かれた聯詩「生為興劉尊漢室、死猶蜀軍山」が眼に留った。

自然に私は黙然と立ち止まり、頬をなでる爽やかな風を受けて鬼神の靈に頭を垂れていたのであった。

生前、孔明は我が棺は漢中の定軍山に葬れと言い遺し、彼は234年8月、54歳で五丈原に於て陣歿した。後世の人々は54歳に因んで54株の漢柏や唐松を植えて彼を偲び、1800年後の今日もなお24株が現存している。

毎年、夏秋には天を覆うように紅白の花弁を付け、樹は燃えるようだと言われている。今でも孔明を敬仰する人達は「千年古樹開紅花」と詠じており、それらの詩の数は数え切れず、彼の靈は永遠に慕われていた。

「玉は砕けても純白を失わず、竹は焚かれてもその節を損なわず、その身は死すとも後世まで竹帛に名を留めん」と言われている通り、底知れぬ彼の英風に感激して、静々と武侯墓を去ったのである。



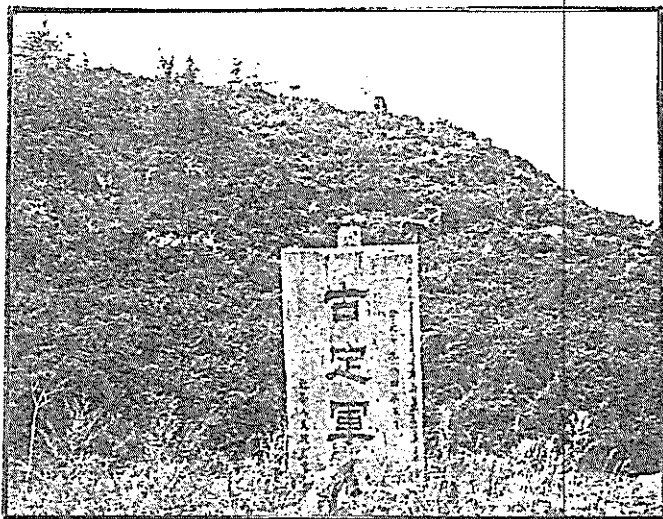
定軍山

(46頁地図参照)

細やかな人情味が溢れて茶目気たっぷりの漢中の通訳の話を聴きながら、東西80km、南北15kmもある長大な漢水盆地を走り、バスは山裾で停車した。そこに古定軍山と刻んだ石碑が立っていた。

(右の写真は定軍山の一部)

連なる山並みは玲瓏として秋の気配を漂わせ、広大な野辺には尾花などの草花が涼し



げな風になびき、秋風薫る風情に満ちていた。

野菊も花を付け始めて天はあくまで高く、一行は手前の台上に登ると、死んだような静けさの中に心地よい野鳥がさえずっていた。私は餌を捜す動物のように四周を眺め、定軍山の歴史的な位置付けに懸命になっていた。

定軍山は孔明を葬った最初の地であると共に、蜀・魏両軍の激突の古戦場でもある。

孔明が五丈原で病死して、その霊車は成都に着くや、雲低く垂れる中で皇帝劉禪以下、文武百官は喪服して出迎えた。孔明の遺骸は故人の遺言によって定軍山に葬られたが、極めて狭い墓域に限られ、石棺中に時服一着を入れたのみで、当時の慣例としては質素極まるものだったと言う。

「身は死すとも漢中を守り、穀魄千載に中原を定めん」、これが孔明の遺志であったと推察する。

【漢中・定軍山の戦闘】（右下の地図参照）

軍師諸葛孔明が総指揮官に就任するや、劉備玄德の軍勢は四川を領有する漢室系の劉璋の軍を撃破し、成都へ攻め入るばかりであった。

この時、劉璋は窮状をこらえかねて遂に漢中の大守（地方長官）「張魯」に救援を乞い、張魯はこれを受諾して軍勢を送り出した。しかし劉璋は劉備の前に降伏した。

劉備は故郷の涿県（河北省）の一寒村から出てから、20有余年の歳月を経て漸く一国を得て、益州（四川）の牧（地方長官）の座に就いたのである。

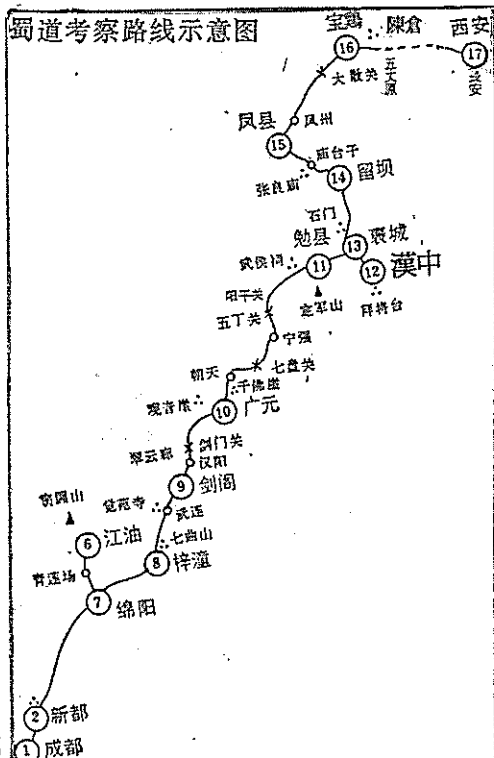
その隸下には軍師・諸葛亮孔明、盪寇將軍・関羽、征虜將軍・張飛、鎮遠將軍・趙雲、征西將軍・黄忠、揚武將軍・魏延、平西將軍・馬超など、三国志に出てくる人材が溢れていた。

大陸は魏と呉と蜀に三分されたが、蜀は前者の3分の1にも足らない兵力をもって戦い続け、よく寡をもって衆に勝ち、国境を死守していた。

しかし関羽も張飛も50の坂を越え、黄忠は70の老齢に達しながら、敵陣に斬り込む勇猛ぶりであった。

魏の曹操は216年に魏王となり、漢中を攻略して張魯を降し、その勢力は更に強大なものになっていた。

漢中を手中にした曹操はその勢力に乗じて巴蜀（四川）を取ろうとせず、部下の武将である「夏侯淵」らを漢中に留めて、自らは都



に帰還した。

魏軍と蜀軍の攻防は漢中の陽平関を中心に展開した。急報を受けた曹操は自ら軍を率いて長安を出て来た。この激戦では孔明の老将「黄忠」が定軍山で獅子奮迅の活躍をしている。

魏軍は漢水の辺まで敗走し、流れに落ちて溺れ死んだ者は数え切れなかったと云う。大勝か大敗か、何れにしても徹底して戦う運命を持った曹操は、この戦闘でもあわや死神に頸根を掴まれる危機に遭遇し、陣営を捨てたのであった。

孔明は劉備とともに成都を出て漢水に至り、魏軍の敗退を見て全軍に追撃を命じた。

魏軍は陽平関に立て籠もって抵抗したが総崩れとなった。この戦闘に於て老將軍・黄忠が魏の將軍「夏侯淵」の軍を猛攻し、遂に夏侯淵の首を斬った地が定軍山であり、時は217年であった。（陽平関は前頁の下の地図参照）

歴史的に知られている定軍山は12峰があるから12連峰と称し、東西に2つの主峰が対立している。四周は土地肥沃で天府の国を形成するため、幾度となく魏と戦った露営の地となり、食糧の補給基地となった所でもある。

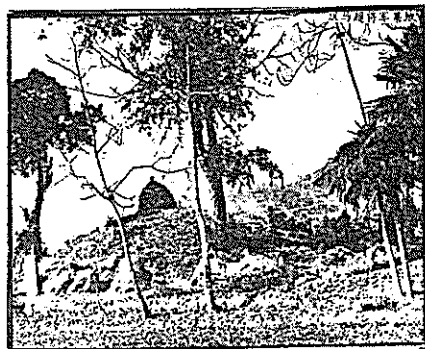
台上に立って沃野千里の地を眺めると、古戦場は自ずから戦袍に身を包んだ我が戦闘中を想い出させた。人間は生死の輪廻は逃れないが、「博引旁証」というか、今では戦って民を苦しめることは、王者（為政者）の道ではないと痛感させられる。

馬超墓 (176~222) (右は位置図)

定軍山を降りてバスは漢中～成都街道を進んだ。漢中市の勉県は魏撲滅の執念を燃やした偉丈夫の遺跡が多く、豪雄たちの苦渋に満ちた詭計百出の力戦は、一卷の歴史絵巻を繙くように思えてくる。

車は田壁をめぐる小学校の前で停車した。「馬公祠」の跡に建てられた学校で、現在その敷地内に新しく馬公祠殿が建築中であつた。

馬公祠跡の学校裏を流れる「漢惠渠」を渡ったが道はなく、通訳の後を追って畦道を歩くこと約100m、そこに「漢征西將軍馬公超墓」と彫んだ墓碑が立っていた。清の乾隆41年(1776)に建立したものである。(右の写真)



墓の南側にある小さな墓塚が天下に雷名をとどろかした馬超の墳墓で、数本の樹木だけが哀れみを誘って、従者を失ったように孤立していた。(左の写真) 高さ2mほどの墓碑や3mほどの高さの墓塚は行く人からも見放され、この土地の人々は遙か路辺に立った馬公碑を「望碑」と呼んでいた。

三国志の彼の鬼神も泣く奮戦ぶりを臉に浮かべると、慚愧に堪えない思いがする。

馬超は西涼(甘肅省武威)の人で字は孟起で、

47歳で病没して「威侯」と諡された劉備の「五虎上將」の一人であった。劉備が漢中王となり、皇帝となってからは驃騎將軍となり、後に涼州の牧となった。

しかしながら墓塚は誠に零落の状と言わなければならない。

三国志によると赤壁の戦いの後、呉の孫堅は蜀に攻め入って支配権を奪い、ついで漢中に軍を進め、西北の豪族「馬超」と同盟して西から中原を窺い、馬超軍と呼応して許都（当時の魏の都・河南省）へ攻め上る計画を立てた。これは孔明が考えていた天下統一の大戦略と同じである。（52頁地図参照）

当時の益州（重慶を中心とする巴、成都を中心とする蜀、それに北方の漢中を中心とする漢水上流地方）は、劉璋（漢室の系統）の巴蜀と漢中の張魯（52頁地図参照）が敵対し、巴蜀は漢中からの脅威にさらされていた。

211年に魏の曹操は漢中の張魯を討つ動きを見せた。しかしこれは曹操の陽動作戦で、陝西方面でなお曹操に心服せずにいる「馬超」らが主目的であった。【これ以前に馬超は潼関（西安東方）で曹操と戦って敗れている】

劉璋は曹操が大軍をおこして漢中を攻めようとしていると聞き、漢中が陥落したら次ぎは蜀だと動揺した。

劉備が益州入りすることは孔明の最初からの計画である。劉備は兵数万を率いて長江を遡航して巴国に入ると、劉璋の歓迎を受けて張魯討伐の委嘱を受けた。しかし劉備の目標は漢中でなく、劉璋の本拠地の成都攻略であった。

成都を目前にして劉璋の頑強な抵抗に遭遇した劉備の軍は、まる1年も足止め喰った。入蜀に当たって軍師として同行した鳳雛と言われた龐統も戦死している。劉備苦戦の報に接した孔明が、荊州（湖北・湖南省一帯）から益州に急行して合流したのは、214年夏のことであった。

劉備の軍勢はいよいよ成都攻撃に移ったが、このとき屈強な味方が加わった。先に曹操に本拠地を追われた西北の雄「馬超」が劉備軍に参加し、成都の劉璋に決定的な打撃を与え、遂に無血開城となったのである。

214年夏5月、諸葛亮が隆中の草廬で天下三分の計を開陳してから6年半が経過していた。

中原を目標とした第1次の作戦に於て、蜀の大軍は蜀の棧道をこえて漢中の西に進出し、この地に着くと孔明は「ここには亡き馬超の墳墓がある。いま我が蜀軍の北伐に遭うて地下の白骨は自己を嘆き、懐かしく思っていることだろう」と、霊を弔って兵馬を休めたと言う。

以上は劉備の益州占領の一端を記述したが、馬超は蜀漢建国の大功労者であり、主として漢中に駐屯したため、この地に祀られたのであろう。他の戦闘に就いては割愛する。

漢中の人々から「錦馬超」と尊敬され、定軍山下の武侯墓と相對峙して祀られる馬超墓は、「逆境はチャンスであり運を呼ぶ」のだと教えているように思うのであった。



武侯祠 (位置は53頁地図参照、勉県)

三国時代の古戦場であった勉県の遺跡や伝説は、言々句々まことに私の胸を衝くものばかりで、戦乱の歴史の幻覚に襲われながら武侯祠へと進んだ。

渺茫1800年、「松に古今の色無し」と尊敬された諸葛孔明の祠は、漢水を隔てて定軍山と対峙し、屏障の山峰に囲まれた蒼翠の古木の中に鎮座していた。

漢時代に創建された祠は定軍山下の武侯坪の上に建てられ、成都の武侯祠より53年も早く建設されている。

星移り明の正徳8年(1513)に此处に移され、清の康熙、雍正、嘉慶、同治、光緒年間に相継いで修復している。(右上は配置図)

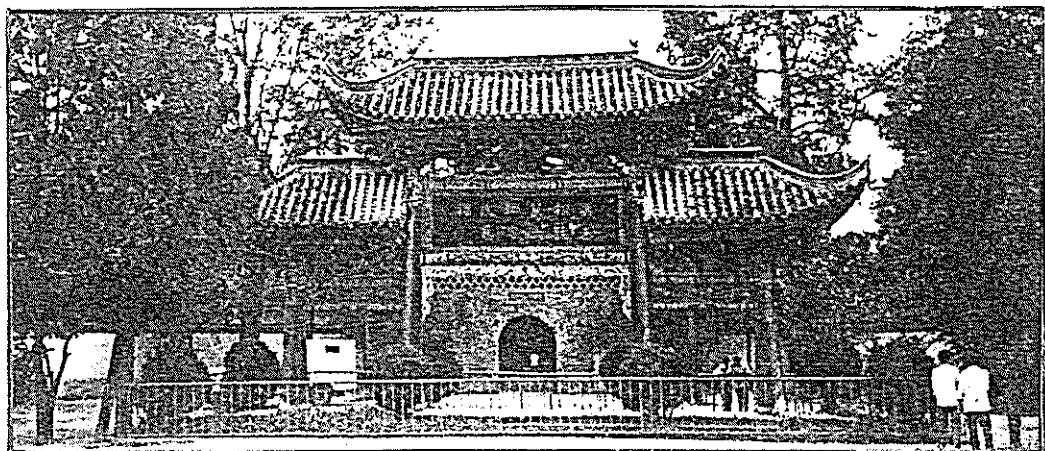
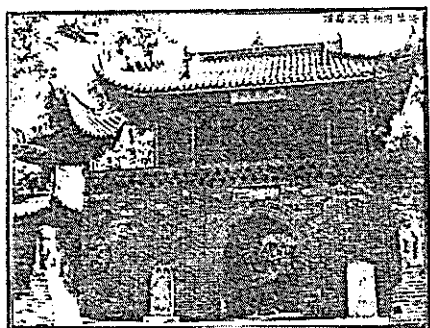
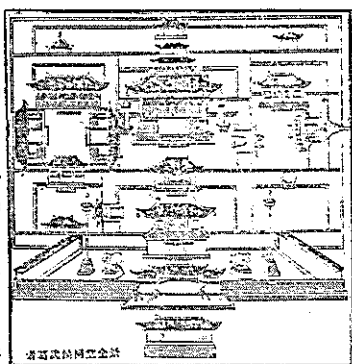
丞相・孔明の陣歿のあと「忠武侯」と諡された「武侯」とは、漢中の東方12kmにある武侯鎮の「武侯谷」の名称に由来している。即ち孔明がこの地に封じられていたからである。

また彼の出生地である山東省の琅琊郡は「武郷侯国」と称したためとも云われる。武侯祠の正式名は「漢丞相諸葛武郷忠武侯祠」である。

武侯祠の山門にあたる「牌楼」の正面には、「漢丞相諸葛武郷忠武侯祠」の金箔の横額が燦然と輝き、牌楼の背面には「天下第一流」の扁額が掲げられていた。

南北約90m、東西約120mの境内には15の楼や殿宇があり、我々は牌楼の洞式通路を進むと、そこに古色蒼然とした二層の楼閣が眼に留まった。これが後世まで「一石琴」と伝えられている有名な「琴楼」であった。(上の写真の楼閣)

軍中であって常に愛弾していた孔明の遺品が保存され、一搔すれば「琴韻清越多年干戈劍戟」のうちに、なお素朴な洗心と雅懷を心に掛けていた、丞相の面影を偲ぶことができるのであった。(下の写真は武侯祠正面の牌楼)



第1次の祁山作戦の時、雪風か枯草の声か判らない吹雪の中で、不思議な美音が何処からとなく響き渡った。

「琴の音だ、琴の音がする」と魏軍は耳を澄ました。軍略に長けた孔明は深い計略があるに違いないと、進撃中の魏軍は吹雪の中に立ち止まったと言う。琴楼は私の臉の奥に三国志の一場面を浮かばせていた。（右上の写真は琴楼にある石琴）



琴楼の楼上には「高山流水」（志は高山・流水の如く、琴曲も高雅の意）の扁額があり、楼の西側に鐘楼、東側に鼓楼が建ち、更に進むと軍師に相応しく瑠璃瓦をのせた「戟門」が建っていた。【戟は両方に枝の出ている古兵器（ホコのこと）】

戟門は昔は兵器を収蔵した所であったが、今は多くの石碑が並び、後主・劉禅に捧げた「出師之表」の石碑が人の注目を集めていた。

魏は夥しい軍隊を呉の国境に派兵したが戦いは利あらず、魏が領有する関中（渭水平野）は曾てのような勢いや戦気は見えず、西域の守りも脆弱をまぬがれな

いと見た孔明は、第2次北伐を決意した。
この決意を披瀝したのが「後出師之表」であった。
（右の図は出師之表を奉呈する孔明）

「漢と賊とは両立しない。王業はまた偏安すべきものではない。これを討たざるは坐して亡ぶを待つに等しい。坐して亡ぶよりは、むしろ出でて討つべきである。その何れがよいかなど議論の余地はない」と、表の冒頭に先ず述べている。

【日米開戦時の軍上層部の心境は？】

感受性の強かった若い時に習った出師之表が思い出され、滂沱の涙をこらえて楼上に眼をやると、そこには「大器無方」（大器＝大才、無方＝極限の意）、「醇儒気象」（醇儒＝純粹、気象＝氣質の意）、「名世挺生」（高名は突出している意）の扁額があり、孔明を称える名句ばかりであった。

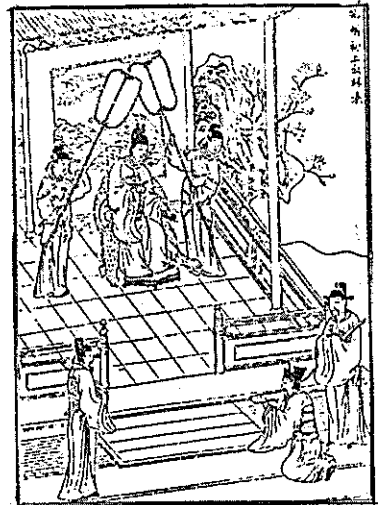
つづく「献殿」（物を奉る所）には長方形の香鼎一基と二頭の狛犬が据えられ、「大漢一人」（大漢＝漢代朝廷の尊称、一人＝第一人者）、「莫大乎天」（莫大＝最大、乎＝相当、天＝天下、孔明の功名は天下最大）、「其猶龍乎」（道教の辞で孔明は老子と同様に有道の士の意）、「天下奇才」（孔明は世に少ない奇特な人才の意）など、掲げられた扁額は数え切れず、両側の石碑も無数に並んでいた。

（右は献殿の扁額の一部）

献殿のすぐ後方の大殿門上の扁額「山高水長」は、孔明の品德は山の崇高、水の流長の如しだと形容している。将に軍師の人格的統御力の貫禄を遺憾なく表現していた。

三国志の舞台の上にいるような錯覚に打たれながら、孔明を祀る「大殿」に襟を正して静々と進んだ。

「死を視ること帰するが如し」といった表情の孔明の坐



像を拝すると、奇妙なことだが一瞬にして何か強烈なものを呼び起し、眼の色を変えるような感動が心・体を震わせた。

青い頭巾をかぶって羽扇を持った像は神態瀟洒、眉宇凛々として魁偉無比、炬眼を光らせて臥龍の品格が滲み出ている。

多くの扁額の中で最も注視させたのは、孔明の塑像の上に掲げた「忠貫雲宵」の四文字であった。「忠貫」は論語にある忠誠貫穿から出た辞で、「雲宵」は晋書の中にある天空の意味である。清の嘉慶8年（1803）仁宗皇帝の恩賜のものであった。（右は孔明坐像）

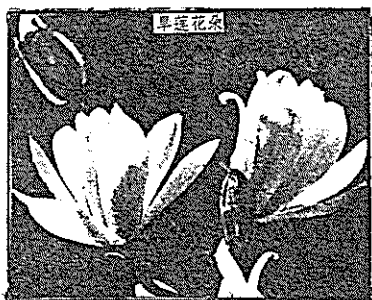


燦然として輝く扁額展示場のような大殿には、「知性知天」（孟子の「尽其心者、知其性也。知其性、則知天矣」から出ている）、「鞠躬尽瘁」（後出師之表の臣鞠躬尽力、死而后已から出ている）の扁額もあり、世人は孔明を師表と敬仰する厳粛な処であった。

千年の古松、古柏が繁って三面に水がめぐり、碑石の林立する境内に生えている一本の珍樹を通訳は指差した。

「旱蓮樹」という名前の稀有な樹で、高さ約10m、直径約40cm、春になると水蓮の花に似た紅色の花を咲かせ、芳香は数百mに及ぶという。（右は旱蓮花弁）

不思議なことにこの樹の種子を他の所に植えても花を付けないと云う。真実のほどは不明だが、孔明の清廉潔白を地上に象徴しているように思えてならない。



漢室の復興を図って都の奪還を夢みた諸葛亮は、7年間に6次の北伐を敢行し、大業未成のまま五丈原で病歿した。その心血を尽くした忠心報国の精神は、明治以来の富国強兵を国是とする我が国でも師表と仰がれ、私も教え込まれ教え込んだ。

我が国の戦後の復興は目覚ましく、経済大国に申し上がった根底は教育の精華であり、日本の精神教育の基礎ともなった孔明の影響は、大としなければならない。

中国では諸葛亮といえば智者の代名詞となっている。日本の「三人寄れば文殊の智恵」の諺は、中国では「文殊」を「諸葛亮」に置き換えるほどである。

近年の中共政府が各地の孔明遺跡の復興に励んでいるのは、国民精神作興のために外ならない。しかし余りにも蜀棧道の僻地のため訪れる人は少なく、効果のほどは疑問のようだ。

深慮遠謀の軍師を祀る祠を拝観して、遠い一時代の歴史絵巻が私の脳中に浮かび続けた。今次旅行の圧巻として妖とした古い幽情に接したことは、星霜が移り変わっても我が脳細胞から消えることはないだろう。

（以上は陝西人民美術出版社及び漢中地区文化極の書を一部参考）



諸葛亮読書台（勉県）

武侯祠の老樹の梢に別れを惜しんでバスに乗車した。生と死の間を綱渡りのように日々を送った孔明には、小説より奇なる運命が待っていたが、人の運命の残酷さを恨まずにおれない心境で、窓外の景色を眺めていた。

停車地点の右方向の丘の上に碑が2つ見えた。これが勉県・老城北門外の臥龍崗に立つ諸葛亮読書台であった。（右の写真）

老城は現在の陽平関（次頁の地図参照）で、伝説によると諸葛亮が魏の北伐に出陣するとき、陽平関の石馬城に駐屯し、余暇を利用して此の丘で読書したと伝えられている。

眺めると練兵した定軍山は1kmほどの近くであった。石馬城内の帷幄で策をねり、勝ちを遠きに求めるために、この丘で読書に励んだのであろうか。

高さ約6m、長さ約11m、幅約10mの丘に立つ1つの石碑には、「漢諸葛武侯読書台」と8字が刻まれている。他の1つの石碑には南宋の詩人・陸遊が漢中に遊び、武侯祠、武侯墓、読書台を訪れた時に詠んだ詩が刻まれている。

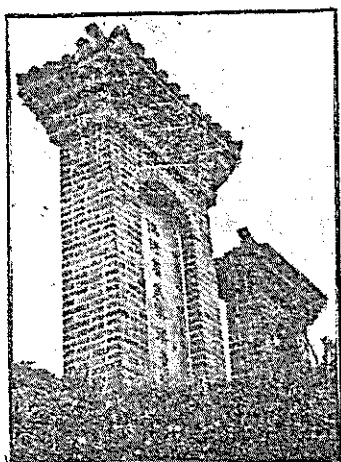
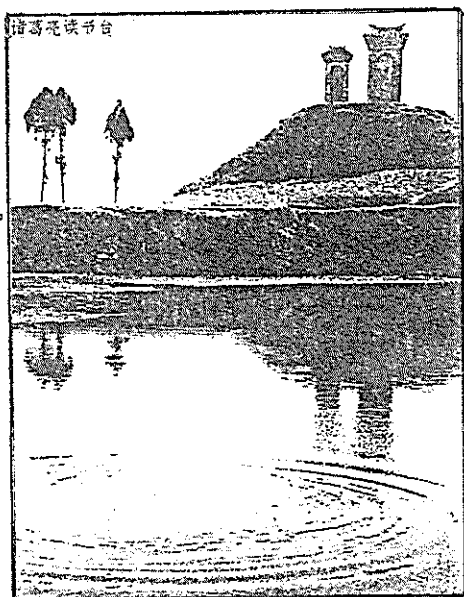
読書台の碑は後世の人が孔明を記念して建てたもので、曾ては此処に臥龍亭と祠があったと云われている。丘の下には古称を蓮花池という池があり、山青水秀の地であった昔の姿は、今ではその面影を留めず、滄桑の変とも言わなければならない。

住民から一顧だにされない読書台を眺めると、痛ましが改めて臍腑をえぐり、武侯祠の感激は一転して悲嘆にくれるような感じであった。

諸葛孔明は秀才というか、天才というか、英才というか、乱世の英雄の神機妙算な慧眼は、根本的には刻苦勉勵の賜物であろう。それが即ち此の読書台で培われたのである。（右は読書台の石碑）

「学須静也、才須学也、非学無以広才、非志無以成学」の辞の通り、学問はすべからく静、才はすべからく学び、学ばざれば広才なく、志あらざれば学は成り難しである。読書台はそうに我々に教えていた。

（陝西人民美術出版社の書を一部参考）



前漢時代の城壁 (古陽平関・勉県、下図参照)

陽光を浴びたススキの波頭は金色に輝き、豆粒のように小さくなって行く読書台の石碑は、次第に視界から消え去った。

バスは進路を西にとり、陽平関街道を疾走して寂しい寒村で停車した。一見して何のために案内したのか目的が不明である。

通訳は道路の左右に遺る土壁を指差し、これが前漢時代の城壁の跡だと説明した。高さ3mほどの崩壊しかけている土壁は、紀元前のものだけに風化作用が甚だしい。北京北方の万里の長城のように煉瓦の城壁ではなく、河西回廊の嘉峪関に遺るものと同様、土を積み上げた土壁に過ぎない。(右が古城壁)

古陽平関の城跡は勉県の老城(現在の陽平関)東方の関城で(上の地図参照)、四川、陝西、甘肅省に通じる交通の要衝、漢中西方の門戸を占めていた。即ち古陽平関は前漢時代に築いた白馬城跡である。

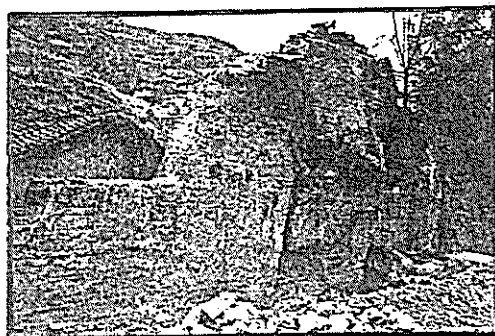
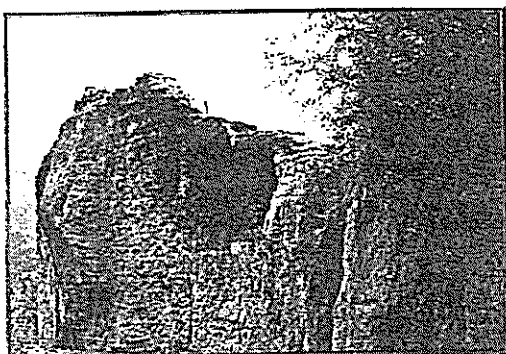
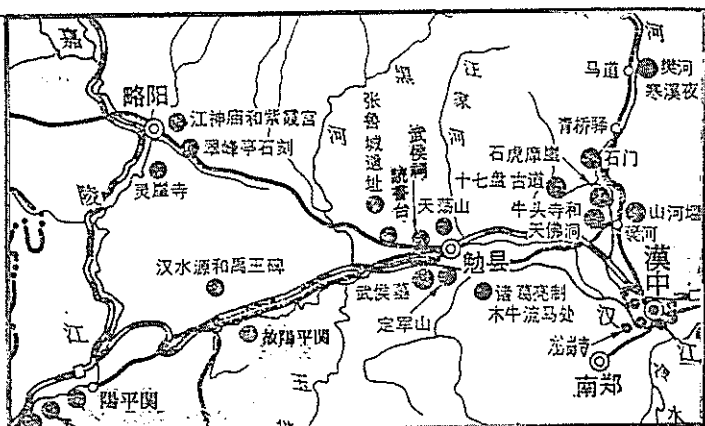
古陽平関は起伏した連峰に囲まれた地勢險峻な地で、三国時代から南北朝時代にかけても要衝であった。215年、魏の曹操が漢中の領主・張魯を討って古陽平関を占領し、魏の将・夏侯淵は3年間も此処に駐屯している。

218年には劉備が漢中に進攻し、古陽平関に駐屯して魏の夏侯淵と対陣、219年には夏侯淵を定軍山で破り、漢中一帯を占領して漢中王となった。

227年、諸葛亮が魏攻略の北伐の時に駐屯したところが古陽平関の白馬城であり、陳倉や天水に進軍するための前進基地としたのであった。

このように古陽平関は南に四川(蜀)を、北に秦(隴西・甘肅省)をひかえた歴代兵家の必争の地で、漢中を奪取するためには絶対的に必要な地点であった。

手づかずに野放しになっている前漢時代の城壁は、将に長い歴史を見てきた古城の遺物である。ここで喋々と繰り返さないが、憂愁に満ちた城址は饒舌に保存を訴えているように思えてならない。(右も古城壁)



以上で本日の漢中市勉県の観光は終わりを告げたが、漢中の歴史はそのまま諸葛亮の歴史の感がする。北伐のため漢中から関中へと駒を進めたが、蜀の運命は孔明一人が担ってきたと言っても過言ではないだろう。

孔明なき後も漢中は蜀の重要な前進基地であつた。また前帝・劉備玄徳以来の中原進出の大志は多くの遺臣に受け継がれた。しかし孔明陣没後30年が過ぎると、遂に漢中も成都も魏の大軍に攻め込まれ、蜀の国は2世43年の短命で滅んだ。悲哉。

中国の帝位や王室の交代は王道を理想としたものの、歴史の示す通り常に覇道と覇道との興亡の繰り返しであった。前漢の帝位を奪った「王莽」を後漢の祖・光武帝が討った時代には、未だ漢の威徳が遺っていた。

私の拙い戦闘体験から、「大兵に兵法なし」と断言できる。孔明のような天下の奇才を以てしても、全軍的には魏の大軍に対して衆寡敵せずだったと言えるだろう。

(月) 雨のち曇

漢中見学 (下図は戦時中の漢中図)

見通しのきかない山気に包まれたホテルの高台は雲烟の中に埋まり、今次旅行では初めての雨であつた。

ること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如しと、古戦場に建つたホテルの朝は私の心を刺激していた。

雨に濡れた葉先から糸のような雫が垂れる街路樹を眺めながら、漢中市内へと走った。雨に烟った鉛色の街は交通マナーは悪く、バスが鳴らす警笛にも反応しない傲岸不遜な自転車の波に苛立っていた。

自由奔放な性格の通訳は冗談まじりの説明を始め出した。厳しい思想統制の中でソ連共産党解体の影響を質ねると、間髪入れず影響ありと公然と即答した。本春、広州の通訳からも共産党を誹謗する言葉を聞いたが、天安門事件以来、人民の目覚めは急激に進行しているようである。

混乱するユーゴには7つの国境、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字があり、内戦が続いている。中国はそれ以上の多民族国家だが、一体これからの中国は如何なるのであろうか。

バスが停車して下りると、大気が動いて小降りになり、地面の匂いがしていた。そこは現在、漢中博物館となっている「古漢台」であった。

古漢台 (劉邦の宮廷の址) (下図は古漢台の平面図)

漢中は周・秦以来の必争の地で、帝王の興業の地であった。古漢台は劉邦の南鄭(現漢中市)に於ける宮廷の遺址で、城内中心から稍々東方にあり、又の名を「七星台」と云う。

前208年、楚の懷王は諸将が彭城(現徐州)に出陣した時、先に関中(渭水平野)に入った者を王とすると約束し、劉邦は項羽より先に南の武関から関中に入った。(38頁地図参照)

然し乍ら、戦力は項羽軍の方が遙かに優り、遅れて函谷関から入った項羽は劉邦に関中を与えず、巴・蜀・漢中の3地を与えて「漢王」と称させた。このことは前記済みである。

現在、漢中市博物館となっている古漢台の高さは約8m、四周を石垣で囲った台上には古桂が数株あり、一草亭、鏡吾池、桂陽堂、竹林閣望江楼等の楼閣が聳え、その雄姿は典雅で古朴である。

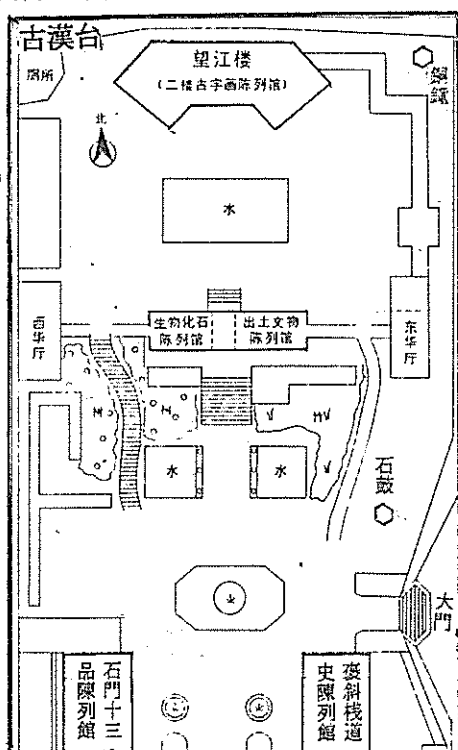


東側の大門から遺址に入ると直ぐ右側に

「石鼓」が目についた。この石鼓こそ漢室の基礎となったもので、「天漢之祥」と言われている。

(左の写真は石鼓)

「天漢」とは天の中央に多数の星が集り、河の如く



見えるものの意で、吉兆を表わしている。即ち天の中心にある「銀河」「天の川」を指し、世界の中心が「漢」だと言うのである。

国号を「漢」とした由来もここにある。故に石鼓は古漢台の中心的、最古的なものであり、連綿と続く「中華思想」の根源も石鼓にあるようだ。

【漢は「カラ」と読み、中国本土の総称で、「モロコシ」「支那」も「漢」である】
南宋の詩人・陸遊は石鼓を眺めて「剣分蒼石高皇跡」の詩を詠み、石鼓を「真碧玉」と尊称している。（石鼓の位置は前頁平面図の中央右側）

石鼓の南にある「褒斜棧道史陳列館」には蜀棧道の模型などが展示されていた。「石門十三品陳列館」には漢魏以来の摩崖石刻十三個の文化的珍品が陳列、これらは褒谷口の七盤山下の石門（59頁地図参照）附近で発見されたものである。

中でも魏王・曹操の書いた「褒雪」は有名である。（右の写真）



曹操は漢中を2回訪れており、その時に山河を眺めて詠んだものである。「褒」は「古代君主の礼服」「懇ろに説く」「ひきつづくさま」の意味がある。「雪」は「洗い清める」「すすぐ」の意味があることから、詩人であった曹操は、これら総合して「天下統一、長期覇権」を念願したのではないだろうか。

その他、十三品中には「石虎」（右の写真）「石門」「玉盆」等の名声の高い石刻があり、訪れた者の眼を引き付けていた。

反転して北に進んだ「古生物化石陳列館」「出土文物陳列館」には陸海の古生物の化石の標本、古代銅器・陶器・石器などが陳列されていた。



古漢台の最北の高台に建った三層の「望江楼」は他を睥睨するように聳え、古くは「天漢楼」と呼んでいた。現在のものは清代の大守が建てたもので、あまりの美しさに足を止めたまま、暫く動くことができなかった。（右は望江楼）

登楼すると二階には歴代名人の書画が飾られ、三階から俯瞰すると四面は青山、江流は線のように伸び、亭や池と相俟って域内最高の景観であった。

望江楼の東側に建つ鐘亭には唐時代の銅製の鐘があり、その側面に「飛天」と「天龍」の画が彫られ、漢王朝の帝業の基のような感じを漂わせていた。

項羽と戦って百戦百敗しながら最後の一戦に勝利を獲た漢の高祖・劉邦は、この古漢台に於て心機一転、火砕流のように上昇気流に乗ったかと思うと、断片的ながら彼の手柄が偲ばれてくる。



項羽の戦法は剛悍で進むことを知って退くことを知らず、激しく決戦して敵を殲滅することに価値を置いていた。一方の劉邦は己の能くせざるところは、人に任せるという事だけで戦ってきた。その点から考えると「兵に将たる人物と、将に将たる人物」との差であろうか。人生は運である。

劉邦が「自分は自己を愛さない。ただ天下を愛するのみ」と云った言葉は、特に私たちの心を打った。地上の唯一者になろうということは天命だが、しかし説明できない王者の徳を身に着けていたに違いない。

古漢台の詩の中に「赤帝龍興事已陣」の辞があったが、この「赤帝」と云うのは、漢室400年の始祖と仰がれる高祖・劉邦を指していた。

「赤帝」とは赤心の帝と云うことであろう。「赤心」とは純真な心であり、それを他人の腹中に推しやって相手にまかせ、絶対的に信頼を寄せることではないだろうか。

戦乱の中で名を成し遂げ、人間性の豊かな劉邦の古漢台の拝観は終わった。魂の抜殻のようになってしまった我々でさえも、彼から代表的な人生観、人生訓を教えられたような気がしたのである。(漢中地区文化局編の書を一部参考)

東塔 (60頁地図参照)

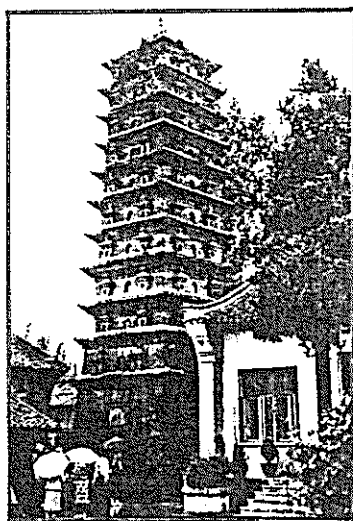
人生は戦場である。超然として生き抜いた精神力の権化、劉邦の古漢台を去り、その東方の浄明寺(現在小学校)の古塔の見学に移った。

東湖(漢の高祖・劉邦が馬に水を飲ませたから飲馬池とも呼ぶ)の傍に立つ古塔を通称「東塔」と呼び、漢中八景の一つになっている。

何時ごろの創建か不明だが、伝えられるところでは三国時代に既に古塔であったと云う。

四方形の塔の高さは約15m、明時代の1375年に建てた原型は13層であったが、最上の2層が崩壊して1953年に修復、現在は11層となっている。

仁王立った素朴で雄偉な古塔は巍然として聳立し、凜乎とした威容の影が湖面に映り、雨後の深い安らぎの中に新鮮さを覚えるのであった。



古虎頭橋 (馬岱が魏延を斬った処)

東塔から一行は漢中北関の漢中駅を通り虎頭橋で停車した。そこに「古虎頭橋」の碑が立っていた。

古虎頭橋と書いた四文字の石刻の右側に「蜀漢の馬岱が魏延を斬った処」と彫られ、左側に「中華民國22年7月重建」と刻まれていた。(右が古虎頭橋の碑)

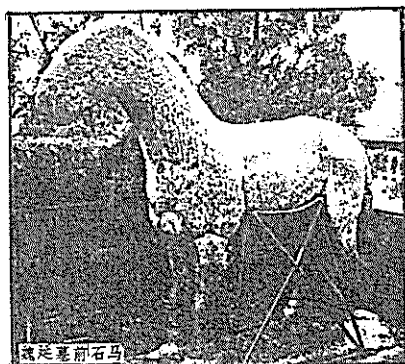
魏延は蜀の武将で劉備に従って蜀に入り、数々の戦功をたて、張飛をさしおいて漢中郡大守(地方長官)に抜擢された人物である。

227年、諸葛亮の北伐にあたって長安急襲を進言したが採用されず、のちのちまで孔明を臆病者と批判し、相互に信用しなかった。



魏延は230年、魏の雍州刺史（地方長官）の郭淮を破り、征西大將軍に任命されて南鄭（漢中）に封じられた。

234年、諸葛孔明が五丈原で病歿し、遺命どおり蜀軍は引き揚げを開始した。この時、副長官の楊義と残留を主張する魏延との間で意見が衝突し、結果的には漢中北門外の虎頭橋で、馬岱によって魏延は殺されたのである。



鬼神にまさる働きをした魏延の墓は、古漢台の一隅に人目につかないように建てられ、墓の前に石馬が悄然と立っていた。（右は古漢台にある魏延の墓前に立つ石馬）

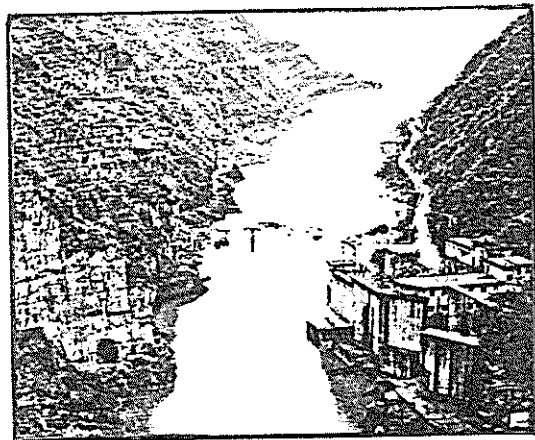
蜀魏の戦争は王道楽土の建設が目標だったと信じたいが、友軍同志でも人間が人間を信じることは至難な業、人間が自分の意志を超えて互いに殺し合った戦闘を想起すると、背筋に悪寒が走る思いがする。

石門（59頁地図参照）

市内の漢南大廈で昼食を摂ったのち石門に向かった。この街道が褒河（古名は黒龍江）に沿った褒斜栈道で、兩岸は迫った万丈の山、千仞の谷、一帯は雲を吐くように霧が立ち昇っていた。

一昨日、漢中に来た時の道からそれ、連雲栈道とか北栈と云われる石門路を北に進んだ。

蛇のように曲がりくねった栈道は闇黒の中に吸い込まれそうで、行く手に突然ダムが現われ、下流に発電所が見えてきた。石門（褒河）ダムである。



秦蜀を結んだ古栈道は峨々とした峰が重なり合って黯然の気が充満し、この危険な栈道を行く人の涙は、乾く暇がなかったという諺があるくらいだ。

歴代の詩人がこの石門の断崖絶壁に好んで詩を刻んでいる。蜀道の難きは青天に上るより難しと言われた險路を、漸く突破した喜びからであろうか。その感激や快思は想像に難くない。（上の写真は石門下の発電所と断崖）

それらの石刻は今は見られず、有名なものは古漢台の「石門十三品陳列館」（61頁参照）に保存されていた。通訳はそのために石門を案内したのであろう。

雨が上つた中にそそり立つ岩、鉛を溶かしたようなダムの水面、壮大な溪谷の美観に見惚れていると、眼に見えないほどの飛沫が押し寄せていた。小時間の石門の見学は終わったが、雲遊の気を魅了するには充分であった。

濃い緑の続く車窓から見え隠れしている溪流を眺めつつ、再び来た道を漢中へと向かった。

拝将壇 (60頁地図)

懸軍万里の栈道は戦乱の歴史を語り伝えているが、治と乱とは古来から、あざなえる縄の如しと言われる通りである。

バスは漢中市内の南側にある「拝将壇」の前で停車した。漢の武将・韓信が大将を拝命した由緒の地で、楚漢の戦闘（項羽と劉邦）の歴史が懐かしく想い浮かんた。

彼の有名な「韓信の股ぐり」の格言は、我が国でも知らない人は少ないだろう。大きな目的

を持った者は、少しぐらいの苦勞や辱めは我慢しなければならないという、戒めの諺である。（上の写真は拝将壇・南台に立つ石碑）

韓信は淮陰（江蘇省）の人。家が貧乏で城下で釣をしていた時、洗濯婆さんの好意によって其の家に寄食すること数日に及んだ。

韓信少年は毎日好んで剣を帯びていたところ、淮陰の少年達は韓信にむかって、「死ぬほどの勇気があるなら我れを刺せ、それが出来なければ我が股をくぐれ」と侮った。この時、韓信は股をくぐったから、彼の卑怯を笑ったのである。

始皇帝が天下を統一したが、秦の治世が乱れるにつれて農民蜂起がおこり、楚の項梁、項羽も挙兵するに及んで韓信はその軍に参加した。しかし志は得られなかった。

項羽と劉邦が相対して楚漢戦争となるや、劉邦の人材登用を知った韓信は、南鄭（漢中）で漢王に任命された劉邦のもとに走った。ここでも重用されなかった韓信は再び去ったのである。

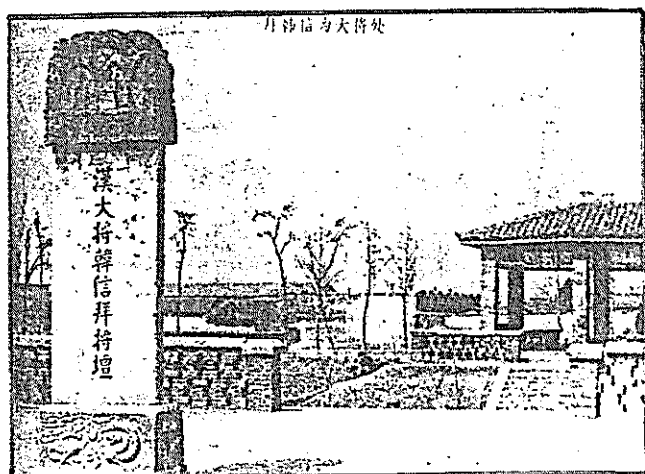
韓信の才能を知っていた漢の丞相・蕭何は、馬道（59頁地図右上）まで追って彼を連れも度し、漢王・劉邦に登用を推挙した。ここで韓信はその才を認められたのである。

206年、壇を設けて大将に任命された韓信は、大軍を統率して北方戦場に臨んだ。彼の赫々たる武勲に助けられた劉邦は魏、斉、燕、趙、等の五大国を平定し、遂に宿敵・項羽を四面楚歌のうちに垓下に破り、漢王朝を建設した。

そのため韓信は蕭何と張良と共に漢朝建国の三傑の一人と称され、特に軍事的には第一人者の名将と言われている。韓信の兵法の妙はその類を見ず、彼の戦史を良く繙いたものである。

漢の高祖・劉邦は次のように述べている。「百万の兵を連ねて戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず取る。この点に就いては、吾は韓信に如かず」と。そして斉王（山東省を中心）に封じられた。

高祖は韓信の才能を認めていたが、しかし、たまたま韓信が謀反すると告げる者があり、遂に殺されたのであった。

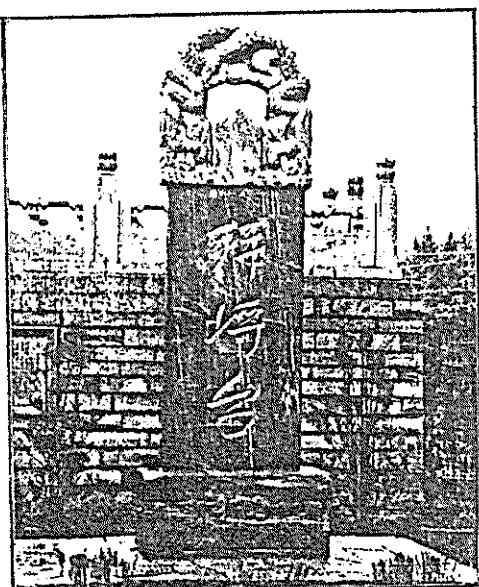


刑に臨んだ彼は、^{コウト}「狡兔死して^{ソハク}走狗煮られ、飛鳥尽きて良弓蔵められ、敵国破れて謀臣亡ぶ」と述べている。

即ち、すばしこい兔が死ぬと、獵犬は不用になって煮て食べられるように、人も不用になれば簡単に捨てられるものだと嘆いたのであった。

韓信が殺害されたのち、歴代の人達は彼の功績と卓越した用兵を賞賛し、各所に韓信の祠廟を建てている。漢中市・勉県の天蕩山（59頁地図参照）の「淮陰侯廟」もその一つであった。

バスを降りて拝将壇に入った。またの名を拝将台、将壇と云い、韓信が大將に任命された記念すべき所である。諸将がみな彼の大將になったことを喜び、「拝将」と呼んだのだ。



壇内には南北に台座があり、台高はそれぞれ4mで、先ず南台に脚を運ぶと、「漢大將韓信拝將壇」と大文字で刻まれた石碑が立っていた。（前頁の写真）

碑の背面に一首の詩が彫られ、「辜負孤忠一片丹……」と刻まれていた。即ち、韓信が忠心から漢王を補佐したのに拘らず、不平の情ありと告げ口されて殺され、心とは反対の処分を受けたことを嘆いた詩であった。

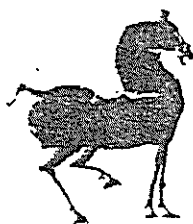
歴代の名君中の代表的な人物と伝えられる漢の高祖・劉邦は、創業中は臣下の功ある者に賞を惜しまず、人材適所、人民の誅求を少なくして民を喜ばせたのであった。

然しその反面、自分に不満を抱く者や、野心家は片端から誅殺した。従って彼の功臣で終わりを全うした者は、甚だ少なかったことは歴史が明記している。

我々一行は北台に移ると、其処にも「拝將台」の碑が立ち、台上は石の欄干で囲まれていた。周囲には柳や榆が植えられて拝將台らしい感じが漂い、三傑と尊敬された蓋世の武勲を称えた詩碑も立っていた。（上の写真は北台の拝將台）

韓信は大將になり王となった後、彼が世話になった洗濯婆さんに千金を与えている。また曾て自分を侮辱した少年を招聘して中尉に任命し、諸將に彼を壮士だと告げたと云う。

参観も終わり、拝將台を振り返って眺めると万感胸に迫り、彼を見ること神に対するようであった。豊かな人間性、卓越した統帥能力、状況次第で千変万化する軍配などを思うと、不運な彼の死に対する憐憫の情は抑え難いものがある。



飛行機欠航・バスで西安へ

揮将壇を去り通訳は一行を市内の百貨店に案内した。百貨店に興味はなく前に眼をやると、新華書店の看板が眼に止まり、自然に私の脚はそれに向かって進んでいた。

閑散とした薄暗い店内で物色していると、勲章を付けた写真に「東条英機」と書いた一冊の本を見つけた。これを手にして購入しようとしたところ、店員は営業時間は午後4時だからと売らない。時計は確かに4時丁度を指していたが、全く融通のきかない社会主義まる出しであった。

世界の荒波の中に伍して行かなければならない中国、何たる不親切な経済観念であろうか。競争社会の根性と粘りを鍛え、猛烈人間を育てることが肝要な中国に、経済の行き詰まりを感じない訳にはいかない。「天漢の祥」の中華思想だけを掲げている中国の現状に憤りを感じながら、追い出されるようにして店を出た。

漢の高祖・劉邦が、回天旋地の大業を成し遂げた古都の見学に終止符が打たれた。「仁者は憂えず、知者は惑わず、勇者は懼れず」と、誰かが述べた言葉を思い出しながら漢中空港に着いた。

朝から降り続いた無情の雨は上っているものの、漢中盆地の中央にある空港からは黄昏の秦嶺・大巴の重畳とした連峰は全く見えない。約1時間ほど経過した頃から、乳色に煙っていた西の空は梢々赤味が帯びてきた。しかしながら、何時まで経っても搭乗の案内はなく、次第に重苦しい空気が漂い始めた。

待つこと約2時間、通訳から欠航を告げられた。漢中～西安間にまたがる4000m級の秦嶺山脈を、プロペラ機では飛行不能ということが理由である。

明日の西安単独行動に胸を膨らませていた私にとっては、如何なることかと愕然自失、唇を噛むような焦燥にかられる思いであった。

臆怖を引きちぎられるように揺られながら、バスは市内中央にある国際旅行社に引き返した。しかし、今後の行動予定は示されず、頼みの綱を断ち切られて狼狽するばかりであった。

夕食に出された漢中特産の珍品「黒米」は、胸を搔きむしる一行の思いをいくぶん和らげ、どうせ世の中はなるようにしかならないのだと、諦めの心情になってきた。

窮余の一策であろうか鳩首会議の結果、漢中国際旅行社は西安までバス輸送を決心した。明日の西安～上海間の飛行機の予約の関係からの決断である。丁度その時、旅で懇意になった小山祐一郎氏が熱発した。

夜間再び蜀棧道の險路を疾走しなければならない。それを考えると踏み締めている大地が急に揺れ出すような不安を覚えた。しかし親切で気さくな運転手のほか、陽気な性格の通訳まで運転を買って出た。一応の不安も解消して万全の処置が整い、22時に漆黒の闇の中へと出発した。

懐かしい思い出にめぐり合わせてくれた漢中は忘れられない。武侯墓、武侯祠、古漢壇などの彫刻美、華棟の妍、碧瓦の燦、金磚の麗を偲びながら、振動の激しい窮屈な車中で自然に眠っていった。

時々トイレ休憩（野外）のたびに空は晴れ間を見せ、一切の表情を失った世界の中に、夜空の星だけが凍るように燦めいていた。このような神秘的な星欄干を見たのは初めてのこと、「天漢之祥」の御利益であろうか。

9月11日 (水) 晴

西安観光

化石のように眠っているとバスは西安賓館に到着した。時は朝の10時、所要時間は12時間であった。案じて身も細る思いだった夜間運行も取越し苦勞となり、喜びの歓声をあげたいくらいで、運転手と通訳に心から感謝したい。

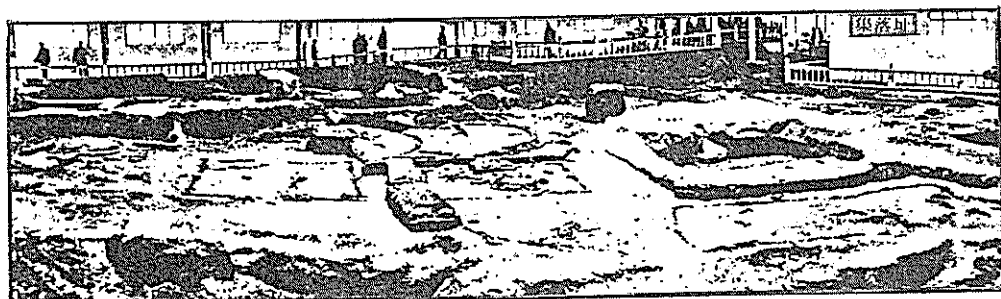
しかし、一縷の望みをかけていた「香積寺」への単独行動は、血が逆流するほどの悔しさだったが、中止しなければならなかった。

山西省・太原郊外の玄中寺、江西省・廬山の東林寺は既に訪れ、残る浄土宗の祖庭である西安・香積寺は、私の長年の夢であった。

我が門徒である親鸞の浄土真宗には7人の高僧がいた。それはインドの龍樹と天親(世親)、中国の曇鸞と道綽及び善導、日本の源信と法然である。

玄中寺の曇鸞は、孫弟子にあたる善導を西安に派遣して普及に当らせた。その善導を記念して建てたのが香積寺で、中国における浄土宗の三大祖庭(庭=場所)の一つである。再び西安を訪れることはないと思うと、強く唇を噛む思いであった。

半坡遺跡 (9頁地図参照)



朝食兼用の昼食を摂り、夕刻までの半日観光は半坡遺跡と大雁塔となった。南門を中心に延びた城壁は長い歴史を見てきた遺産で、古の美意識が息づく街は新鮮なものをはらみ、新しい文明の町に変化しようとしている感じがする。

透き通るような蒼空の下で雑踏を東に進むと、街並みから前回訪れた時の反日デモが想い出されてくる。北京から上海、そして地方都市に波及した学生中心のデモは、世界に飛躍する日本への嫉妬であり、上からの扇動であった。

時は流れて学生や知識階級が目覚め、昨年は軍まで動員して鎮圧した天安門事件にまで発展し、自由化の波は全国に広がったが、中国は実に奇異な国である。

寝不足のために生々しくしながら半坡遺跡博物館に着いた。ここは6000年前の新石器時代の母系氏族社会の村落の跡で、遺跡全体に屋根をかけて保護しており、兵馬俑坑と同じである。(上の写真は集落址)

1953年に発見された遺跡は5万㎡ほどの範囲に及び、そのうち1万㎡が発掘調査され、住居区、製陶区、墓葬区の3部分に分かれていた。

その内訳は住居遺跡が54件、家畜囲い跡が2件、貯蔵穴は200穴余り、土器を

焼く窯が6基、墓葬は250基、その他生産工具と生活用具は約1万点の多きに達している。

(右の写真は方形竪穴住居址)

住居には竪穴住居と平地住居の2種類があり、何れも径2m乃至数mで中央に炉が設けられていた。

円形の平地住居は多数の木を周囲に立て、それに泥を塗って壁とし、円錐形の屋根を葺いたものである。

また長方形の平面形をもった竪穴住居もある。1辺10mもある方形の平地住居もあり、氏族の集会などに使用したものであろう。

村落は深さ5mほどの濠で仕切られ、墓はその外側に集中的に作られている。整然と配列されているから氏族の共同墓地であろう。大部分は頭を西にして葬られ、足もとに土器の副葬品が置かれている。小児は^{カマラン}襁褓で住居地区内に葬られていた。

博物館は上記のような遺跡と遺物の陳列館に別れていた。陳列室を覗くと生産工具は主に石と骨で作られ、石のものは斧、ナイフ、矢じりなどで数え切れない。

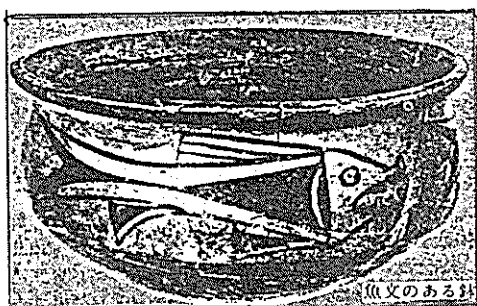
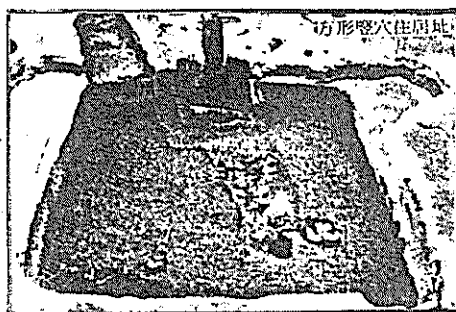
生活用具は主に土器で鉢、盆、壺などの赤褐色のものが多く、直線的な幾何学模様や魚、獣類などが描かれていた。

(右の写真は魚を描いた鉢)

半坡人の高度な技術は経験の積み重ねであろう。等辺三角形や平行四辺形などの形と数字の概念がよく現われており、「智慧は体験より生まれ、科学は実践から生まれる」という真理を証明していた。

半坡式に類似した住居跡は、関中平野の西側半分に分布しているようで、農業のほか漁労が生活の重要な位置を占めていたのであろう。

中国の歴史の開幕というべき東洋史の曙光は、西安を含んだ関中平野にあり、漢民族の発祥の地は関中だと半坡遺跡は教えていた。

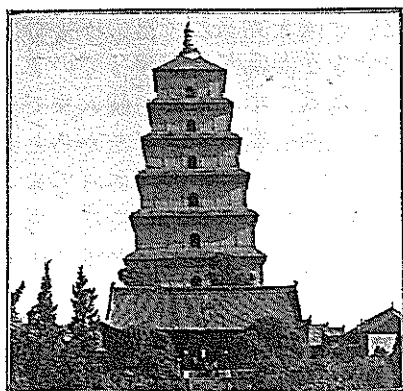


大雁塔

半坡遺跡から懐かしい興慶公園の前を通過して、大慈恩寺、大雁塔に向かうと、古都を訪れる人達を遥かな歴史の流れに誘い込むようであった。

威容かつ異様である西安は、華麗な貴族文化の花が開いた地であると同時に、仏の里でもあり、シルクロードの起点でもある。これが此の町の意気と富を象徴し、黄金に優る財産だと言えるだろう。

大慈恩寺の境内に入って大殿に進んだ。其処にある青銅の燭台には星ほどの小さい灯が点り、永劫の



光となって燃えていた。しかし前回訪れた時の記憶の糸を手繰っても思い出せない。

先哲至理の教えにふれたいと参拝する中国人に混じって二殿に脚を運んだ。するとその後方に気宇壮大な大雁塔が眼に映り、燦然とした仏教文化の威容が息を呑む思いの感動を与えてくれた。(前頁下の写真が大雁塔)

大雁塔内に入ると催眠術にかかったように記憶は明瞭に蘇った。中央に安置した慈悲深い眼差しの仏像、中国各地の有名な塔の写真などは、私の眼に焼き付いていた。

唐の高僧・玄奘三蔵がインドから持ち帰った仏典の翻訳と、それを収蔵するために建立を献言し、第三代皇帝・高宗の時に建てられたのが大雁塔であった。詳細は前回の紀行文と重複するため割愛する。

奇しき縁だと塔内の七層の階段を登り始めた。しかし旅の疲れは2階で私の脚を止めてしまった。下界に眼をやりながら、胸が締め付けられる思いで世の無常を嘆き、人間の運命のはかなさを味わっていた。

煩悩の蜘蛛の糸が十重二十重からみついている我が人生を回顧し、蒼空に毅然として聳立する大雁塔も見納めだと、後髪を引かれるように大慈恩寺を去った。

西安空港を17・40に発ち、上海着は22・00であつた。

9月12日 (木) 晴 帰国の途へ

6ヶ月ぶりの上海は相変わらず活気が溢れ、南京路には中国第一の経済都市を自負する上海人の姿が見られた。彼等の生を楽しむ姿こそ「心是為常楽」(心はこれ常に楽しみをなす)である。

北京から陝西省を一巡してみると、文明は地球を狭くしてしまった。町や村の顔を似たり寄ったりの造作に変えさせている。しかし自然条件や歴史的伝統が違えば、それぞれ個性のある文化や生き方が見られ、旅には異郷を発見できる楽しさがある。

今世紀初めまで一寒村だった上海には歴史がない。しかし経済に生きる上海人は海外人との交流が多く、自由な社会を夢みている。早朝の黄浦公園の散歩では本当の国民の声を聞く楽しさがあつたが、概して反北京の思想が強いことは確かである。

北京政府は開放政策を推進する必要性を痛感しながら、これを実行することは自分の政治的失策を認めるという矛盾がある。そのために既存の政策を修正し、変更することが困難なのであろう。

最近の中国を見ると、富の不平等は嫉妬と怨念の世相を生み、感情的なものが先行して理念なき混乱だけが残っているようだ。中国は古来から長く群雄割拠の時代が続き、大は国家、小は村落や個人まで身を守る習慣が根付いていた。

自国が他国と戦って勝ったからと言って、生活が良くなる保証はない。反対に負けたから特に不幸が覆いかぶさって来る訳でもなかった。幸不幸は地上に溢れており、これを解決するのが政治の責任であつた。

銃口から政権が生まれると言つた毛沢東、脈々と流れる彼(共産党)の思想は、現実離れの空想的な政党の欺瞞である。74年にしてソ連共産党が解体した今日、近視眼的な発想ではなく、世界を見るマクロ的な考え方になってほしいものである。

このような思いを浮かべて南京路で半日を過ごし、定刻に上海空港を飛翔して帰国の途に着き、期待した旅は邯鄲の夢枕を見るように終つたのである。

あとがき

旅は自分の目で見て心で感じ、感性で楽しむことが肝要である。今回の旅は私にとつては掛替えのない素晴らしい旅となり、胸底から湯が沸き立つような満足感を味わった。

旅の刺激も多彩であつた。旅に出て旅から帰って来たとき、自分が一廻り大きくなったような気がしていた。旅先で何か未知なものを発見し、何かを習得すれば、それだけ旅は充実するのである。

本年新たに開放された諸葛亮孔明の陣歿の地・五丈原は、夢想だにしなかつただけに終生忘れられない感動を与えた。蜀漢に仕えて入りては丞相、出ては将となって漢室の興隆に努めた彼に対する感想は、「星落秋風五丈原」の歌詞に尽きるだろう。

(19頁の歌詞参照)

中国王朝の興亡は王朝内部の実力者が概ね乗っ取った歴史であつた。しかし孔明はその地位にありながら帝王を狙わず、策士として生きた彼は偉大な人物である。論語の「勇而無礼則乱」（勇気のみで礼がなければ国は乱れる）の通りである。

街亭の戦いの失策で「泣いて馬謖を斬った」ことは、今日の戦闘に於ては正気の沙汰ではない。蜀漢の万古不撓の基礎をきずく第1次の出兵は、才器と言われた愛弟子の完敗のために算を乱す潰走となった。緒戦のショックは気が狂うばかりで、全軍に詫びるつもりで斬ったものと考えたい。

戦闘は有形無形の戦闘要素を総合判断して行わなければならないが、言うは易く実行は誠に難しいものである。先ず死を賭した戦場では特殊な心理が働く。それを度外視した戦闘指導は空論に過ぎず、私の拙い体験から名将が迷将になった最大の原因は、戦場心理の無視のように思えてならない。

次に兵要地誌の問題である。戦闘計画は彼我の兵器の性能によって変化し、指揮官の能力、戦法の得意・特異性、部隊の訓練の精否、気象条件等によっても変化することは論を俟たない。しかし綿密周到な地形の調査をしない計画ほど杜撰な計画はなく、敗因の大きな要素となったことを忘れてはならない。第一線の戦闘に於て然り、補給に於て然りである。

それらを総合判断すると、戦いの勝因は経験に優るものはないと断言できる。机上の空論と言うのは確かに名言である。稀世の大器と称された馬謖の失敗の第一は、経験不足と言えるだろう。自己の能力の限界に挑む戦闘ほど、千軍万馬の積み重ねが物を言うものはない。付焼刃が通用しないのが戦場の特殊性である。

「蜀道の難きは青天に上るより難し」「一夫関に当れば万夫も開くなし」、と詠まれた蜀の古栈道は、決して白髪三千丈式の誇張したものではなかった。脳髄に戦慄を覚えた景観は色あせることなく、何時までも我が想い出に織り込まれている。

巍峨たる山間に一気に蕾が開いたような漢中盆地、そこには古い歴史が鬱々生えずに遠っていた。過去に遡る旅、歴史の豊富な旅は、長い時の流れに自分が入ってしまったような感じがする。

漢王朝の基礎となったと言われる「石鼓」、漢中で購入した文献から「天漢之祥」の辞を発見した。「天漢」とは天の中央に星が集って河のように見える所で、天の川、銀河を指していることが判明した。浅学な私にとっては新知識である。

漢の高祖・劉邦は、世界の中心の意味をもった「漢」を国号とした。その由来を知ると中華思想もこれから生まれたことが判る。又、漢には「カラ」という読みがあり、中国本土の総称となつたことも理解できたのである。

秦の始皇帝は天下を統一した翌年から、大好きだった巡行を始めている。我々の陝西省の旅も其のような気分になり、漢・発祥地の古址を見学した。その最高なものは武侯墓、武侯祠であり、漢王となつた劉邦の古漢台と韓信の拜将壇であった。

成功した者には成功する理由があり、失敗した者には失敗した原因がある。我々はそれを教訓にしなければならない。そこに歴史や戦史の研究の価値がある。

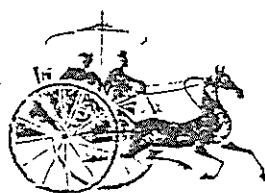
劉邦と韓信のことに就いては喋々と述べない。しかし王権の害は流賊の害よりも非道な仕打ちだと言わなければならない。欲望と嫉妬、怨念のために同士が殺し合うのは人間だけであり、権力への執念は知恵の害である。

劉邦も「古のよく將たる者は、人を養うこと己の子を養うが如し」であるべきであった。戦国時代の名將「呉子」は傷兵の健康を気づかい、できものに苦しむ兵士の膿を自分の口で吸い出している。こうした思い遣りの心が、戦場で喜んで力を尽くす動機となったのである。

悲憤慷慨や涙を誘った数々の文化遺産は、一度に満足感、陶酔感の美酒を飲ませてくれた。そして改めて感じたことは「一期一会」であった。今回の興味津々であった意義ある旅も出会いであり、文字通りの「朧を得て蜀を望む」旅であった。

私は晩年を人生の夕映えの時期だと思っており、限られた持ち時間を生ある限り燃焼し尽くしたいと念じている。沈んで行く大陸の太陽は空を真っ赤に染めていた。あのように自分の人生を終わりたいものである。

又、理想に過ぎないが、最後まで学びの心を忘れないでいたい。人と物との各種の出会いには私に貴重なものを与えてくれた。これからも心の宝石と思って其の数を増やしながら一つ一つを光り輝かせ、精一杯生きて行きたい。これが私の快老学である。



三国志時代の勢力図



